一つは國民性から來て居る。從來識者の定評とも謂ふべきは、「我國民はもと〳〵快活で、天眞思無邪な性を持つて居たが中途佛教の厭世思想や儒教の嚴肅主義の影響を受けて、だん〳〵その快活性がそがれてしまつたものだと云ふ。思ふに我國が過去に於て上述の諸國文化の刺戟を受けることの多大であつた點は否むべからざる事實であるが、さりとてこの影響がなければいつまでも快活であり得たであらうか。管見によれば、快活とか、天眞爛漫とか云ふ性格は望ましいものであるに拘らず、文明の促進とは逆行するものである。古代の我々の先組はオープンリーで、よく笑つたと云ふ。それは丁度二つ三つの乳呑兒が一寸飛び〳〵しても直ぐ笑ふと同樣、文化の原始期にあつた爲めではなからうか。又支那や印度の影響よりも以上に歐米の近代思想の影響を受けた現代人はその爲め、あらぬ懷疑思想に囚はれたり、消極思想に禍せられてゐることは明治以前の儒佛思想の影響の比ではないことをも考へねばならぬ。舊日本にあつては幾ら悲劇だと云つてもマア鴨長明や兼好法師程度の出家遁世で、事はすんだものだが明治以後となつては北村透谷や川上眉山のやうな悲しい死を遂げる人もあり、有島武郎氏のやうな殉情者も出るやうになつた。處が今日と雖も知識階級以外の人々は、矢張快活で思無邪で呵々大笑すること太古の如き趣があるところから推して、どうも文明は人を悒鬱にするものだと云ひたくなる。最近に「日本の國民は心から泣くことも、心から笑ふことも出來ない國民だ」と云ふ議論を見たが、さうした評は少數の知識階級の人々にのみ當つてゐるが、多數民衆に對しての評としては誤つてゐる。勸業債券の籤に當つた工夫のよろこびや、たつた一人の子供を亡くした車夫の悲しみを目擊すれば、彼等は心から悅びもし泣きもするのである。唯知識階級の人々だけ「これ位のことで大よろこびをしては、人がさげすまうか」とて笑ひたくても喉でかみ殺し、又泣きたくても無理に我慢をするのである。

但さう云へば一體に文明國の人は皆不快活であるべきだが英國人のやうなユーモラスな國民があり、佛人のやうな社交的な國民があるのを見ると此は一つは國民性にもよると謂はねばならぬ。で私は我國民性そのものが元來本當のユーモラスではないと斷言する。よしや外來思想云々といつても、それをこゝまで影響するやうに受容した性質は矢張固有のものである。同じ酒を呑んでも、笑ひ上戸と泣き上戸とがあるやうに、我國民は泣き上戸なのではあるまいか。お負けに鎖港攘夷的な空氣は、一國内にもあつて國全體としてのことには擧國一致の美があり、家一戸としてのことには、一家親睦の美があるが、その中級の公生活には精練を缺いた國民で國家道德個人道德が發達してゐる割に、公共道德が幼稚なのもその故ではあるまいか、二十人三十人の一集團が何かの會合をするとしても面白げに口をきくのは村一番の金持とか、そのサークルでの有力者だけで、あとは默々謹聽を餘儀なくせしめられる。御互が對等的にくつろぎ笑つて、その場を濟ますことをしないで直ぐ階級的な考を挾む。どうしても笑の必要な時には、講談師や落語師を傭つたりもする。これ等は芝居のチャリ役者や、神樂の道化役や狹斜の巷に出入する幇間などと同じ下位に看做された階級の人間で、又勢ひその滑稽も低級なものである。尤も近頃は追々社交的な修練を歷て隨分上品な滑稽を言ひ得る人も多くなつたらうが、それでも先づ大抵は秀句以上に出ることは少い。さもなければ座に在る誰かに犧牲を拂はした揶揄嘲笑にすぎない。眞の意味に於て好笑一番、滿座の肩の凝りを和がすやうな高級な笑ひはまだ〳〵發達してゐない。

原因の第二は秀句法に煩はされて居ることである。この修辭はどこの國にも多少はあるが、我邦のやうに秀句を悅ぶ國民は尠い。抑も神代の昔岩戸隱の序幕からして「おもしろ」の秀句に始まつて、明治大正の現代に至るまで盛に用ひられる。文學の方でも之によつて生彩を添へたものが多々あるが、中には之に煩はされて却つて詩趣を損せられた嫌のあるものも又多い。今その一例とし古今集中秋の部「女郎花」の歌を拔くと

題しらず　　僧正遍昭

名にめでておれるばかりぞ女郎花　われおちにきと人にかたるな
　僧正遍昭がもとに奈良へまかりける時に男山にてをみなへしを見てよめる　ふるのいまみち

女郎花うしと見つゝぞ行きすぐる　男山にしたてりと思へば　としゆきの朝臣
　是貞のみこの家の歌合のうた
秋の野にやどりはすべし女郎花　名をむつまじみ旅ならなくに　をののよしき
　題しらず
女郎花おほかるば野邊にやどりせば　あやなくあだの名をやたちなむ　藤原定方朝臣
　朱雀院の女郎花合によみて奉りける左のおほひまうち君
女郎花秋の野風にうちなびき　心ひとつをたれによすらむ
秋ならであふことかたき女郎花　あまのかはらにおひぬものゆへ　つらゆき
たか秋にあらぬ物ゆへ女郎花　なぞ色に出てまだきうつろふ　みつね
妻こふる鹿ぞ鳴くなる女郎花　をのがすむ野の花としらずや　たゞみね
人のくることや苦しき女郎花　秋霧にのみ立ちかくるらむ
ひとりのみながむるよりは女郎花　わがすむ宿にうへてみましを
　物へまかりけるに人の家に女郎花　うへたりけるをみてよめる　兼覽王
女郎花うしろめたくも見ゆるかな　あれたる宿にひとりたてれば
寛平御時藏人所のをのこども嵯峨野に花みんとてまかりたりける時かへるとてみな歌よみけるつゐでによめる　平さだぶん
花にあかでなにかへるらん女郎花　おほかるのべにねなましものをし

などで此等の中女郎花の名から「をんな」にかけた着想を拔きにしたら全然歌にならない位秀句法が有力な地位を占めてゐるが、さて此等の歌に女郎花そのもゝ詩美を捉へ得たものは一首もない。たつた一つ。躬恒の

をみなへし吹過てくる秋風は　めにはみえねどかこそしるけれ

と女郎花の香をめでたものがあるだけである。寧ろ謠曲女郎花の「花の色は蒸せる粟の如し」と云つた方が花その物の形貌は活躍してゐる。

今一つ秀句惡用の例をあげると、近松の作「長町女腹切」に半七のことを

どうせふかこふせふこばを候べく候にやつてすて……
　既に傾く宵月の夜も早や四つ半七は……
やぶれかぶれと半七裾引からげ井筒屋の庭へッカノ〳〵柄卷屋の半七と聲をかけ……

など云ふ。當の主人公半七の悲しき戀に命まで果たさうとするつきつめた感情は、却つてこの秀句に裏切られた感じがする。

原因の第三は外來文學の斯種の物に接することが遲かつた點にある。漢文學は應神天皇の朝王仁が論語と千字文とを將來した時以來多くは經史子集の部類のものがとり入れられ、德川時代になつて詩や雜劇の幾分が餘程消化した形で受容されるやうになつたが、それでも德川全期を通じての漢文學は官學の朱子を始め古學、古文辭學、陽明學、折衷學等

何れも經書の講究が盛んであつた。本當に軟文學輕文學系統の作品を訓詁學的に紹介することは、寧ろ漢學近時の仕事になつてゐるかの觀がある模倣の天才とも謂ふべき我國民のことだから、若も外來文藝に優れた滑稽文學があつたならば、それに暗示を得て、ドシ〳〵傑作を出したゞらうと思ふが、どうも文藝の先輩國の提示が、このことには生憎な種類のものばかりであつた。明治以後歐米の作品が入つて大分新しい展開を見るやうになつたが、國民性が原因する滑稽文學輕視の傾向はまだ一世の文豪をして終生を斯の文學の創作に托するまでには至らしめない。けれどもアーヴィングのスケッチブックや、ヂツケンスのクリスマスカロルやセルヴァンテスのドンキホーテや多くのコメディを見た作家は多分にその着想修辭を指嗾せられて之を前代に比すれば遙に優れたものがある。

之を要するに我邦の滑稽文學は之を想の側から觀ると國民性が原因し之を形式の方から觀ると秀句に煩はされ、尙その上に外來文學に適當な作品がなかつた爲めに、從來その發達の遲々たるものがあつた。

第二　上　代

古代の生活は素朴であつたから今日から觀れば生活全體が滑稽の感があるが、文學にあらはれたものとしてはあまり多くはない。

萬葉集中の戲歌　萬葉集中處々に戲歌なるものが出てゐる。まあ古今集の俳諧歌の前身とも謂ふべきものである。

大伴家持

噫二咲痩人一歌一首　萬葉集十六卷之下

石麻呂爾。吾物申。夏痩爾。吉跡云物曾。武奈伎取食

オイ石麻呂君隨分君はやせてるね。可いことを敎へてやらうか、鰻をとつて食ふに限るよ。あれは夏やせには可いと云ふから。

痩々母。生有者將在乎。波多也波多。武奈伎乎漁取跡。河爾流勿。

だかね、いくら痩せても、命あつての物種だ。鰻なんかをとらうとして、うつかり川へはまらぬやうにし給へ。

追書によれば、この二首は吉田連老(字石麻呂)といふのが、大變痩せぎすで、幾ら食つても飲んでも痩せて居たから戲に此二首を贈つたと云ふ。今ならば

「君の體格は藁のやうだ」「何だ、針金に味噌つけたやうな」「チトソマトーゼでも喫み給へ」と云ふ處であらう。

獻二新田部親王一歌一首　萬葉集十六卷之下

勝間田之。池者我知。蓮無。然言君之。鬚無如之。

勝間田の池は大和にあつて蓮の名所である。新田部の親王といふ鬚の多い方が或日その蓮を見めでゝ歸つてその話をさる婦人にせられた時、婦人は戲れて此歌をよんだと云ふ。

イヤ私はよく存じて居りまする。勝間田の池には蓮はありません、丁度それはあなたにお鬚か無いと同じやうに。

此等は人のよい好笑か輕い嘲笑に屬するが同じ卷の續きには、もつと譏笑的でその當時の贈答した本人も眞面目になつたらうと思はれるのもある。

誘二佞人歌一一首

奈良山乃。兒手柏之。兩面爾。左毛右毛。佞人之友。

一首の意は明らかである。舌を二枚使ふやうな人を裏表ある兒手柏の葉に譬へて謗つたものである。

又大神朝臣奥守が痩せこけてゐるのを池田の朝臣が嘲つて

寺々之。女餓鬼申久。大神乃。男餓鬼被賜而。其子將播。

寺の女餓鬼が云ふことにや、わたしの夫に大神の朝臣を貰つて子を產まう（つまり君は女餓鬼と好一對の男餓鬼だネ――）

と、此は可なり手ひどい嘲笑だが、嘲笑された大神朝臣もぬからず一矢報いて

佛造。眞朱不足者。水渟。池田乃阿曾我。鼻上乎穿禮。

佛像に塗る朱丹が足りなかつたら可いことがある。アノ赤鼻の池田君の鼻の上を掘つて見よ、きつと丹砂か朱砂かが出ようと云ふものだ。

顏の色が黑いとか白いとかで嘲笑し合つたものには

土師宿彌水通嗤二咲巨勢朝臣豐人黑色一歌一首

烏玉之。斐太乃大黑。每見。巨勢乃小黑之。祈念可聞。

飛驒の大黑の馬を見るたんびにアノ色黑の巨勢君が思ひ出されてならぬわい

巨勢朝臣豐人答歌一首

造駒。土師乃志婢麻呂。白久有者。諾欲將有。其黑色乎。

成程職掌柄大黑小黑の馬の像を埴土で造つてゐる志婢麻呂のことだからその大黑の馬をつくるたびに自分の顏の靑瓢簞が氣にかゝつておれが羨しからうよ。

少し知識的分子のある嘲笑では

戲嗤レ僧歌一首

法師等之。鬚乃剃杭。馬繫。痛勿引曾。僧半甘。

坊さんの鬚の剃りあとの剃り杭に馬をつないでひどく引くやうなことはよせ。そんなことをした程なら坊さんの顏は半分つぶれてしまはうぞ。

法師報歌一首

檀越也。然勿言。氏戸等我。課役徵者。汝毛半甘。

さう云つたものではない。檀越だつて村役人が上納を取りたてたらそれ以上に苦しからうぞ。

最もひどいのは穗積朝臣が脇臭でくさいことを草ともぢつて　平群朝臣

小兒等。草者勿苅。八穗蓼乎。穗積乃阿曾我。腋草乎可禮。

チイ子供達よ。そんなに遠くまで行つて草を刈るに當らぬ。アノ穗積朝臣のくさを刈る方が手ッ取り早いぞ

此に對して穗積朝臣は相手の鼻の赤いのを嘲つた。

何所曾。眞朱穿岳。薦疊。平群力阿曾我。鼻上平穿禮。

眞赭の薄はどこにある。マアあの平群の阿曾にとへ。阿曾の鼻は定めて眞赭がウンとあらうぞ。

最後の二首などは寧ろ人身攻擊の歌とも謂ふべきであらう。之に反して唯々和樂の好笑を謳つたものも少くない。天武天皇が明日香の淨見原に居まして初雪を見られたが、その時丁度お妃の藤原夫人（鎌足女）は實家の大原の鄕へ御出でになつてゐたので、そこへつかはされた御消息

吾里爾。大雪落有。大原乃。古爾之鄕爾。落卷者後。

早やこちらでは大雪がふりましたが、あなたの方は多分まだでせう

それに對して藤原夫人の答

吾岡之。於可美爾乞而。令落。雪之推之〉彼所爾塵家武。

何と御意なされまする。私の方でをかみの神に云ひつけて雪をふらせたのですからこちらはとつくに雪見をいたしました。大方私の方の雪のかけら位が散つてあなたの方へも飛んで行つた。それを陛下には物珍らしくめでゝいらつしやるんでせう。

持統天皇に親しく奉仕した志斐嫗と云ふのがあつた。次の贈答歌によつて察するに、君臣とは云ひ條餘程打ちとけた樣であつたらしい。

天皇。賜二志斐嫗一御歌一首

不聽跡雖云。强流志斐能我。强語。比者不聞而。朕戀爾家里。

いやだと云ふのにたつて話の押賣をするそなたが、この頃フツヽリ來なくなつたので何だか物淋しい。

志斐嫗奉レ和歌一首

不聽雖謂。話禮話禮常。詔許曾。志斐伊波奏。强話登言。

これは御挨拶樣ですこと――、私がいやですつてお斷りするものを陛下の方から話をしろ〳〵つて仰つしやるから已むなくお話し申すんですのに話の押賣はあまり可愛相ですわ。

風土記　古代文學中、散文で滑稽味のあるものは往々ありもしようが、作者にさる作意があつて滑稽なのではなく、內容その物が今日から見てをかしいのである。左にその一例として播磨風土記を引く。

印南郡はに岡ノ里

所二以名一はに岡一者。昔大汝命與二少比古尼命一相爭云。擔二はに岡荷一而遠行與二不レ下レ屎而遠行一。此二事何能爲乎。汝命曰。我不レ下レ屎欲レ行。少比古尼命曰。我持二はに岡荷一欲レ行。如レ是相爭而經二數日一。大汝命云二我不レ能二忍行一。卽坐而下レ屎之爾時小比古尼命笑曰二然苦一。亦擲二其屎一汗二於衣一。故號二波自賀村一其はに岡與レ屎成レ石于レ今不レ亡。

大汝命と少比古尼命とが、國土經營の爲め諸國巡回の中途、此國に來て、議論を始めた。それは「赤土を荷ふを荷つて行くがつらいか、大便のしたいときにせないで行くがつらいか、」と云ふので大汝命は「赤土を荷ふ方がつらい」と云はれるし少比古尼命は「大便をせずに行く方が苦しい」と云はれる。とう〳〵賭けをして、大汝命は大便をしないであるき、少比古尼命は赤土をかついで行つたが、數日たつと大汝命が敗けてとう〳〵大便をせられた。少比古尼命は笑つて「そーれ苦しいでせう」と云はれた。便が少々命の御衣をよごした。後にその便と土とが堅まつて石になつて今に殘つてゐる。赤土で賭をした赤土の岡と云ふ意ではに岡と云ふ。如何にも無邪氣なノン氣な話で、諸國巡視と云ひ國土經營と云ふしかつい名目と矛盾するところに滑稽味たつぷりな點がある。

第三　中古

中古の作品には前代よりも量質共に勝れた滑稽文學があらはれたが、此は文學史的に見て前代の滑稽文學の後繼と看

做すわけにはゆかぬ。云はゞ國民の生活全體が向上した結果と見るべきである。先づ韻文中短歌の方面では

誹諧歌　なるものが生じた。誹諧は俳諧と同じ意で、史記滑稽列傳の注に「滑稽、俳諧也」ともあり杜甫などの詩にも俳諧體なるものがあつてつまり滑稽とかをかしみとかの意で「をかしみある歌」を俳諧歌と云ふらしい。古今集中俳諧歌（古今集第十九卷雜體の中）としてあげたものは、殆ど六十首近くもある。その想は戀愛觀、無常觀、及び日常手近な山水花鳥で、多くの場合秀句法を用ひてゐる。戀歌には俳諧體とよりは寧ろ常體と謂ふべきものが大分ある。

山ぶきの花色ごろもぬしやたれ　問へど答へずくちなしにして　素性法師

耳なしの山のくちなし得てしがな　おもひの色の下ぞめにせむ　よみ人しらず

あひ見まくほしは數々ありながら　人につきなみ惑ひこそすれ　きのありとも

などで、稍進んだ諷刺嘲笑の聲とも見るべきは

世の中のうきたび毎に身を投げば　ふかき谷こそ淺くなりなめ　よみ人しらず

世の中はいかに苦しと思ふらむ　こゝらの人にうらみらるれば　在原もとかた

などで次の二首の如きは述懷の常體として雜歌の中にでも入るべきものであらう。

なにはなる長柄の橋もつくるなり　今はわが身を何にたとへむ　伊勢

何をして身のいたづらに老いぬらむ　年の思はむ事ぞやさしき　よみ人しらず

因て思ふに古今集誹諧歌は頗る蕪雜な編輯で、當時の四撰者はどう云ふ考で異類を同部に加へたものか、或は編輯がこゝまで進行した時偶々秀咏（今日から見てさまでの秀咏でないまでも）を得、若しくは始めから氣づいてゐながら次々選から洩らしてとうく雜體まできめて、今更棄てるのも惜しいと云ふ雜肋の感を以てマアこゝへなと位のところで加へたものではあるまいか。今愚案を云ふと

一、誹諧歌に入るべきもの

梅の花見にこそ來つれ
山ぶきの花色ごろも
いくばくの田をつくればか
いつしかとまたく心を
あきの野になまめきたてる
秋風にほころびぬらし
耳梨の山の口なし
あひ見まくほしは數々

二、戀の部に入るべきもの

むつ言もまだつきなくに
石の上ふりにし戀の
枕よりあとより戀の
戀しきがかたもかたこそ

ありぬやと心見がてら
富士のねのならぬおもひ
人にあはむつきのなき
思へどもなほうとまれぬ
隱沼のしたよりおふる根沼縄の
ことならば思はずとやは
思ふてふ人の心の
思へども思はずとのみ
われをのみおもふといはば
われを思ふ人を思はぬ
思ひけむ人をぞともに
出でゆかむ人をとゞめむ
紅にそめしこゝろも
いとはるゝわが身は春の
鶯のこぞのやどりの
あふ事の今ははつかに
もろこしの吉野の山に

雲晴れぬ淺間の山の
まめなれど何ぞはよけく
何かその名のたつ事の
よそながらわが身にいとの
ねぎ言をさのみ聞きけむ
人こふることを重荷と
よひの間にいでて入りぬる
そへにとてとすればかゝり
梅の花咲きての後の

三、四季の内に入るべきもの

秋くれば野べにたはるゝ
秋霧のはれてくもれば
花と見て折らむとすれば
冬ながら春のとなりの

四、雜歌の内に入るべきもの

足引の山田のそほづ
春霞たなびく野べの

春の野のしげき草葉の
あきの野に妻なき鹿の
蟬の羽のひとへに薄き
さかしらに夏は人まね
なにはなる長柄の橋も
なげき樵る山とし高く
なげきをばこりのみつみて
世の中のうきたび毎に
よの中はいかにくるしと
何をして身のいたづらに
身はすてつ心をだにも
白雪のともにわが身は
わびしらにましらななきそ
世を厭ひこの本ごとに

の諸歌としたい。

古今集では寧ろ第十卷物名としてあげられたものが滑稽歌の中に入るべきではあるまいか。少くとも機智の閃きは見られる。即ち「すもものはな」を咏みこんでは

今いくか春しなければうぐひすも　ものはながめて思ふべらなり

と云ひ、「たちばな」を咏み込んでは

足引の山たちばなれ行く雲の　やどり定めぬ世にこそありけれ

と云ふ類で此等はやがて業平の「からごろも」の折句の歌のやうな文字的遊戯と相通ずる傾向のもとに發達したものである。尚遍昭集にある小野小町と僧正遍昭との左の贈答歌の如きも、戯れに咏んだものと解すべきだ。

小野小町
いはの上に旅寢をすればいとさむし　苔の衣をわれにかさなむ

僧正遍昭
世をそむく苔の衣はたゞひとへ　かさねばつらしいざ二人寢む

と云ふので、此が眞面目だとすれば幾ら王朝でもあまりひどい。すればこれは戯歌のうちに入るべきであらう。

神樂歌　催馬樂　中には諷刺の婉曲にして而かも鋭いものがある。今、順々に滑稽文學の素質のあるものを拾ふと、神樂歌の方では

湊田

本

みなと田に、くゞひ八つをりや、ところちなや、八つながら、ところちなや、

末

八つながら、ものもはずをりや、ところちなや、八つながらところちなや。

と云ふのがある。「湊に近い田に鵠が八ひき居つて、八ひきながら物思ひなげにしてゐる。あれをとりたいがさて鵠(とりもち)が

ない――、惜しいな、悔しいな」と云ふのが表面の意で、實は奸臣跋扈に對する憤慨熱罵である。

早歌（はやうた）

本

ヤこのえのみかどにこじおといつ、

末

ヤかみのねのなければ

は、「ヤアあの人は近衞の御門で巾子をおとした。それもその筈頭がツンツルテンだから」との意でこれ等は單なる嘲笑である。同じ早歌の部で

本

ヤたにからゆかば、岡からゆかん、

ヤ岡からゆかば、谷からゆかん

は、何でも人に反對する「あまんざこ」を諷したものである。

催馬樂では

澤田川三段

一段

さはだ川、袖つくばかり、淺けれど、ハレ

二段

あさけれど、くにの宮人、高橋わたす、

三段

アハレ、ソコヨシヤ、たかはしわたす。

「澤田川はアノ長い袖が一寸漬かる程の淺い川だのに恭仁（くに）の宮人は高い橋を架けることよ」と云つて實は重稅を課して無益の土木を起す宮人を諷したものである。

老鼠　一段

西寺の、おいねずみ、わか鼠、おん裳つんづ、裳裳つんづ、ほうしに申さん、師にまうせ、法師にまうさん師に申せ、

も親子の奸臣を諷したものである。

尙神樂歌早歌の中の左の二種の如きは、今日から見れば、實に無邪氣な好笑歌である。

本

ヤあかがりふむな尻なる子、

末

ヤわれも目はあり前なる子。

「オイおれの胼胝（ちかざれ）を踏むなよ、ナーニおれだつて眼があるさ」唯これだけである。

本

ヤとねりこんぞ、しりこんぞ、

末

ヤわれもこんぞ、しりこんぞ。

「ヤイ舍人の尻屎め、ナーニさう云ふ和主も尻屎ぞ」で丁度今の子供が「君は僕の弟子々々々々」と云ふ風のもので、眞に罪のない想形共に單純素朴なものである。

散文の方では滑稽を標榜した作品は一つもないが所々に滑稽な記事が散見してゐるそれ等の中には高級なユーモラスなものもまゝある。

土佐日記　は卷頭已に

をとこもすといふ、日記といふものを、女もしてこゝろ見んとてするなり。

と戯れて全篇秀句を驅使して至る處

舟路なれど、馬のはなむけす

一文字をだに知らぬものしが、あしは十文字にふみてぞあそぶ。

かの人々のくちあみも、もろもちにて、このうみべにて、になひ出せる歌

ある人、西の國なれど、かひうたなど歌ふ、

たゞおしあゆのくちをのみぞすふ。このすふ人々のくちを、おしあゆもし思ふやうあらんや。

あさぢふの野邊にしあれば水もなき　いけにつみつる若菜なりけり

この人……

ゆくさきにたつしらなみの聲よりも　おくれて泣かんわれやまさらん

とぞよめる、いと大ごゑなるべし。もてくるものよりは、歌はいかゞあらん。

まことにて名にきくところはねならば　とぶが如くに都へもがな

ふねにのりそめし日より、舟にはくれなゐ、こくよきぬきず。それは海の神に、おぢて、といひて、何のあしかけにことづけて、ほやのつまの、いずしすしあはびをぞ心にもあらぬ、はぎにもあげて見せける。

ふな君の　…人もいふことゝて、心やりにいへる歌

ひく船のつなでのながき春の日を　よそかいかまでわれはへにけむ

きく人の思へるやう、などたゝことなると、ひそかにいふべし。ふな君のからくして、ひねりいだして、よしと思へる事を、えしもこそ誣へとてつゝめきてやみぬ。

かぢとり、ふなこどもにいはく、みふねよりおほせたぶなり、あさぎたのいでこぬさきにつなではやひけといふこのことばのうたのやうなるは、かぢとりのおのづからの詞なり。かぢとりは、うつたへに、われ歌のやうなる事いふとにもあらず。きく人のあやしく歌めきてもいへるかなとて、かきいだせれば、げにも三十文字あまりなり。

とをかしく洒落てゐるが、土佐日記の滑稽文學としての價値は右様の局部の外、更に文全體がもつ輕決な調子をも逸してはならない。當時にあつては男子の國文はまだ誰も手をつけてゐないものだのに、貫之が此文は快暢平明聊かの滯りなく、宛然交際上手の老人が得意の座談に圓轉滑脫の辯をふるふ趣である。

竹取物語　は前半凡べて滑稽な構想である。此物語は著者も年代もはつきりしない。即ち

一源順……俗說
二延喜以後のもの……本居宣長　玉の小櫛
三延喜以前のもの……田中大秀　竹取物語解

など云ふが、第三說が穩當らしい。源氏物語中にも「繪は巨勢相覽、書は紀貫之書けり」とあつて此等の人の年代から推しても第三說が當つてゐるやうだ。

物語の略筋は「竹の中から生まれた美しい「かぐや姫」に對して言ひ寄る貴公子がだん〳〵數多くなつて來たので姫はそれ等の人々に各別の難題をふきかけて

車持の皇子は蓬萊山の玉の枝
石作の皇子は天竺の佛の御石の鉢
右大臣安倍御大人殿はもろこし火鼠の裘
大納言殿は龍の首なる五色の玉
石上中納言殿は燕の子安貝

を持つて來て下すつたら嫁ぎませうと云つた。五人は競爭でそれ〳〵の聘物を探しにかゝつたが、もと〳〵あり得べき品でないものだから、或は贋物を掴まされて面目を失したり、或は自身探索に出かけて飛んでもない失敗を演じて、とゞ姫は五人の何れにも嫁がぬことになつたが、時の帝がこれを聞召して、侍臣に命じて慇懃に輿入あるやう御沙汰があつた。けれども姫は身の上を打ちあけて「私はもと天人ですから地上の交らひは出來ませんので、折角の御志ですが此儀ばかりは平に」と辭した。やがて八月の十五夜が來て大空からは一團の密雲が姫を迎ひに來た。流石名殘の惜しまれて「帝にこれを」と不死の靈藥を記念に贈つて、やがて翩々と天に昇つた。帝は記念の藥を見て「姫がゐないでは不死の藥も何かせん」と云つて、命じて高い山の上で燒きすてさせられた。「不死の藥」を燒いたので「それよりしてこそこの山を富士の山とぞ名づけける」で終り。となつてゐる。思ふに室町時代の狂言で詐謀がばれて「やるまいぞ」で落ちになる作品は多分に此物語に暗示を得たことであらう。

源氏物語　中の滑稽は一體に重苦しいが、流石に王朝式の優美な箇處もある。

源氏が紀伊守の宅へ行つた時、紀伊守の父伊與守の妻「空蟬」と伊與守の娘で空蟬の繼娘に當る軒端の荻とが双六をしてゐる處を垣間見た。氣品の高い愼ましい空蟬と、あはそかなお人よしの軒端荻とを對照し、偖て數をよむところになつて娘が蓮葉に十、二十、三十とかぞへる樣を寫して

すみのところ〴〵いで〳〵とおよびをかゞめて、とをはたみそ、よそなどかぞふるさまいよのゆげたもたどたどしかるまじうみゆ

と云ひ、源氏が新たに通ひそめた末摘花は生まれは立派で今零落してゐて、琴は上手だが容姿は醜い。殊に鼻が大きくて赤くて象のやうだと云ふところを

まづ居だけの高うせながに見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。うちつぎてあなかたなと見ゆるものは御鼻なりけり。ふと目ぞとまるふけんほさちののりものとおぼゆ。

とある。末摘花と云ふのも紅花のことでやがて「赤鼻」の秀句である。併し此は讀むものはをかしくとも本人の末摘花が實在の人間だとすれば隨分不德義な同情のない描き方である。今は作品中の假定人物だけれども聯想上、會心の笑み

をもらすことは出來ない。まして讀者がその人と同じやうな醜女であつたとすれば、あまり悅ばないであらう。純文學のたちばから見ても此等は今少し手法を變へた方がよろしからう。此に比べると宇治の大姫君の琵琶を彈かれるところは當時の教養ある淑女の戲れを思はせるゆかしみがある。佛信仰が緣となつて薫大將は宇治の八の宮と親しくなり折々彼方を訪ふうち、或時八の宮が佛會參籠の留守宅へ行つた。それは夜であつた。若やかな女の聲がしたので覗いて見ると大姫君が琵琶を彈いてゐられると妹の中の君が「昔は扇で入日を招き返した人もありますが、姉君が今そのお氣取りで琵琶の手で入るさの月をとめようとなすつても、そりやいけますまい」と云はれる。「デモ撥も扇も同じやうな恰好してゐるわ」など云はれてゐる樣は薫が眼にも物語中の姫君を眼前に見る心地して、それ以來大姫君に對する大將の戀心が熱して來たとある

橋姫

うちなる人ひとりは、はしらにすこしゐかくれて、琵琶をまへにおきて、ばちをてまさぐりにしつつゐるたるに、雲がくれたりつる月の、にはかに、とあかくさし出たれば、扇ならで、これしても、月はまねきつべかりけりとて、さしのぞきたるかほ、いみじくらうたけに、匂ひやかなるべし。そひふしたる人は、ことのうへにかたぶきかゝりて、いる日を返すばちこそ有けれ、さまことにも思および給御心かなとて、うちわらひたるけはひ、今すこしおもりかによしづきたり。およばずとも、これも月にはなること物かはなど、はかなきことをうちとけの給かはしたる御けはひども、さらによそに思ひやりしにはにず、いとあはれになつかしうをかし昔物語などに語りつたへて、わかき女房などのよむをもきくに、かならずかやうのことをいひたる、さしもあらざりけんとにくゝおしはからるゝを、けに哀なるものゝくまあるべき世なりけりと、こゝろうつりぬべし。

此等以外隨處に此と同趣の上品な輕口がある。源氏が侍女右近を通じて頭中將の落し胤の玉鬘を我子と披露して引きとり、善美を盡したかしづきに、忽ち絕世美人の噂高くなると、何かにつけて源氏の向ふを張る頭中將は「自分にも夕顏に產ませた娘（實は玉鬘）があるから引き取つて源氏を鼻白ませてやらう」とて賞を懸けて八方に手がゝりを求めると何がさて褒美を目當の似せ娘が、こゝやかしこから續々出てくる中にも此こそは本物らしいとて迎へとつた「近江の君」は田舍娘の育ち覆ふべくもあらず。出入の公達の前で色々失敗を演ずると云つた風なところも面白い。

常夏

いかでき〻しことぞや、おとどのほかばらのむすめたづねいで〻、かしづき給とまねぶ人なんありし。まことにやと辨少將にとひたまへば、ことぐしう、さまでいひなすべきことにもはべらざりけり。この春のころほい、夢がたりし給けるを、ほのき〻つたへける女の、我なんかこつべきことあると、なのり出侍りけるを、中將の朝臣なん聞つけて、まことにさやうにもふればひぬべき。しるしやあると、たづねとぶらひ侍ける。くはしきさまはえしり侍らず、けにこの比めづらしき世がたりになん、人々もし侍なる。かやうのことこそ、ひとのためおのづから、けそむなるわざに侍けれときこゆ。まこと成りけりとおほして、いとおほかめるつらにはなれておくるゝかりを、しひてたづね給らんが、ふくつけきぞかし。いと、ともしきに、さやうならん物のくさはひ、み出まほしけれど、名のりも物うききはとや思ふらん。更にこそ聞えね。さても、もてはなれたることにはあらじ、らうがはしく、とかくまぎれ給ふめりし程に、そこきよくすまぬ水にやどれる月は、くもりなきやうのいかでかあらんと、ほゝえみての給ふ。中將の君も、くはしくきゝ給へることなれば、えしもまめだゝず、少將と藤侍從とは、いとからしと思ひたり。

其他源氏の「葵の上」に疎ましいのを葵の上の里方左大臣家では「どうだか」と疑ひつゝも源氏の機嫌どりをして、兄の頭中將始め一家眷族は朝廷へ出任しても君への奉公よりは源氏の君への忠義第一といそしんだことを寫しては

箒　木

いとゞながるさぶらひ給ふを、おほいとのにはおほつかなくうらめしと、おほしたれど、よろづの御よそひ、なにくれとめづらしきさまに、てうじいで給ひつゝ御むすこの君だち、たゞこの御とのゐ所の宮づかへをつとめ給ふ

と云ひ、

同じ卷の「雨夜の品定め」の所だけでも、「みんながよつて女の品定めを催されたが何しろ女の評論のことゝて大そう耳の痛い話がはずんだ」とて

そのけぢめをば、いかゞわくべきと問給ふほどに、左の馬のかみ、藤式部丞、御物忌にこもらんとて、まゐれり。世のすき物にて、物よくいひとほれるを、中將まちとりて、このしなぐ〳〵をわきまへさだめあらそふ。いときゝにくきことおほかり。

と書き、馬の頭が議長格で品定めの口を叩いてゐることを

馬のかみものさだめのはかせになりて、ひゞらきゐたり。

とし、それを聞く頭中將の熱心な傾聽振りはまるで名僧知識のお說敎でも聽いてゐるやうだとて

中將いみじく、しんじて、つらづゑをつきてむかひゐ給へり。のりの師の世のことわり、ときかせん所のこゝちするも、かつはをかし

と表すなど謹嚴な式部の、輕快な微笑とも謂ふべき筆致でなか〳〵可いと思ふ。

枕草子　十二卷百五十七段（春曙抄による）は全篇機智の記錄と謂つても可い。そしてそれの多くは矢張秀句である中に故事出典を卽座に活用する機智には秀句でないものもある。（又この種のものには聊か衒學的臭味の鼻につくものもあると云はれてゐる）

一條天皇が「無名」と云ふ銘の琵琶を持ちわたらせられたら中宮（定子）附の女房たちが、それをなやめて「これは何と云ふ琵琶ですか」とお尋ねすると、中宮が「名は無い」とおこたへになつた――彼女の悅んで寫した所はこの種の秀句にある。

無名といふ琵琶の御琴を、うへの持てわたらせ給へるを見などして搔き鳴らしなどすと言へば、ひくにはあらず、緒などを手まさぐりにして、「これが名よいかにとかや」など聞えさするに、唯いとはかなく「名もなし」との給はせたるは、猶いとめでたくこそ覺えしか。

同じ續きに中宮が「いなかへじの笙」を持つてゐられると御弟君の隆圓僧都が琵琶と交換してほしいと言はれた時中宮が「いなかへじとおぼいたる物を」と云はれたこともある。

中宮の御兄隆家が素敵に可い扇を持つてゐると云ふ。どんなのですかと云つても、それは形容しきれぬ立派なものだと云ふ。彼女が「ぢや骨なしの扇でせう」と云ひたい所を「では海月（くらげ）のでせう」と云つた。「こりや秀逸だ隆家が申し受けて自分が云つた洒落として發表したいと云つた一段

中納言まゐらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに、「隆家こそいみじき骨を得て侍れ。それをはらせて參らせんとするを、おほろけの紙は、はるまじければ、もとめ侍るなり。」と申し給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさ

せ給へば、「すべていみじく侍り、更にまだ見ぬ骨のさまなりとなん人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」とこと高く申し給へば「さては扇のにはあらで、くらげのなり」と聞ゆれば「これは隆家がことにしてん」とて笑ひ給ふ。

中宮が職の御曹司に居られる頃、五月の一夜、殿上人が、呉竹をかざして訪づれ「ことゞ〳〵しく訪なふは誰か行つて見よ」との仰せに彼女が起つて行つて見ると、ことばはなくて呉竹を、バサリと御簾の内へ入れた。「オヤ此君でした」と云ふと、外で聞いてゐた殿原が感歎して「サア行つて殿上で披露しよう」とめではやした。これも本朝文粹十一卷藤原篤茂の修竹冬青の詩の序に、晉の王子猷が呉竹を此君と稱したことが記してあるところからきた洒落である。一體關白道隆からして申樂言のうまい人で、よくかう云ふ冗談を云つたもので、その御女の中宮がまた非常に秀句がお上手で、その下に仕へた清女は就中最も巧みであつたやうだが、それを殿上で披露をしたり、扇に書きつけておいて朗誦したり「それは私の洒落に讓り受けたい」と云つたりするところから觀ると當時宮廷一帶の風尙が此方に向いて居たこともわかる。

次に枕草子に見られるをかしみは奇想天外的な機智で此は「ものは」題中自分の心持を主題にしたものに多い

おほつかなきもの――知らぬ所に闇なるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがになみゐたる。

ありかたきもの――姑に思はるゝよめ。……主誹らぬ人の從者。

あぢきなきもの――しぶ〳〵に思ひたる人を、しひて婿にとりて、思ふさまならずとなげく人。

いとほしげなきもの――遠きありきする人の、つぎ〳〵緣尋ねて、文えんといはすれば、知りたる人の許、等閑にかきてやりたるに、なまいたはりなりと腹立ちて、返事もとらせで、無得にいひなしたる。

なまめかしきもの――薄樣の草紙、村濃の絲してをかしくとぢたる。

ねたきもの――とみの物ぬふに、縫ひはてつと思ひて、針をひき拔きたれば、はやうしりを結ばざりけり。

又かへさまに縫ひたるもいとねたし。

かたはらいたきもの――まだ音も彈き調へぬ琴を心一つやりて、さやうのかた知りつる人の前にて彈く。

あさましきもの――賭弓にわななく〳〵久しうありて、はづしたる矢のもて離れてことかたへ行きたる。

くちをしきもの――いとなみいつしかと思ひたることの、さはる事出で來て俄にとまりたる。

はるかなるもの――大般若の御讀經一人して讀み始むる。

むとくなるもの――人の妻などの、すゞろなる物怨じして隱れたるを、必ず尋ねさわがんものをと思ひたる

に、さしもあらず、のどかにもてなしたれば、さてもえ旅だち居たらねば、心と出できたる。

はしたなきもの――こと人を呼ぶに、我かとてさし出でたるもの。まして物とらするをりはいとゞ。

うつくしきもの――三つばかりなる兒の急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを目敏に見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、おとなどに見せたる。

むつかしげなるもの――猫の耳のうち。

くるしげなるもの――こはきもののけにあづかりたる驗者。

うらやましきもの――うち東宮のめのと。

とくゆかしきもの――人の子產みたる、男女とく聞かまほし。

こゝろもとなきもの――心地あしく物恐しきほど、夜の明くるまつ。

むかしおぼえて、ふようなるもの――おもしろき家の木立やけたる。池などはさながらあれど、浮草水草しけりて。

近くて遠きもの――鞍馬のつゞらをりといふ道。

遠くてちかきもの――極樂、船の道、男女の中。此種の快感は逆説法と甚だ相似て而かもその出發が違つてゐる。つまり暗中模索の適中した時に得る契合快感と一致してゐる。暗がりに書齋に入つて寢かけに讀まうと思ふ隨筆本をさがすに、手探りでとつて來て電氣の下で見ると、てつきりその本であると云つた風で、「近くて遠いものは」と索す目あてが極つてゐるところへ、「男女の中」とつゞけると「成程さうだ」と手を拍つ。つまり暗中模索の契合快感と謂ふべきであらう。

思ふに後世の冠附などは着想の側に於て枕草子の此樣式から多くの示唆を得たことだらう。又この形式を全然まねた趣味は今日では一般化して「物は附け」と云ふものになつてゐる。謎々、福引などもまたその源流をこゝから發してゐる。

少さいものは　蚊の涙。

早いものは汽車の先引

（謎）雷、（解）神さまの鈴　（意）ふるとなる。

（籤）新婚旅行　（福）ガラス瓶　（意）なかよく見える。

次に、社交馴れた好笑も尠くない。これで殊に目立つのは道隆と中宮と、中宮の御伯父君の高階明順の如才なさである。（彼女自身は別として）道隆のさるがうの秀逸は百三十三段（春曙抄本以下同上）積善寺の一切經供養の始めの處である。中宮以下下々の女官まで、皆美々しき裝ひして列座してゐる處へ來て、始めは中宮に向つて眞面目に「これ皆然るべき高家の子女だから大切にあはれみをかけてお使ひなさい」と言ひきかせておいて、こんどは女房一同に向つて「みんな御奉公に精が出るなあ、だが云うておくが此中宮樣は、ひどい吝な質だぜ、イヤ冗談ぢやない、その證據には吾々は中宮樣の產まれおちられるとからずつと何かにの世話をしてゐるが、まだ、ついぞ一遍御めし物の御ふるさへ貰つたことがない」と言つて滿座を笑はせたとある。

中宮のことは第六十八段の一節がことにめでたい、道隆薨去後中宮の御境遇も日々に道長におされられて御氣鬱の矢先だのに、清少納言はあらぬ中傷に畏り申して長らく里居して居ると、中宮のお使が來て「いはで思ふぞ」と云ふ御文をわたす。清少が、どわすれして此歌を童に敎はる

心には下ゆく水のわきかへり　いはで思ふぞいふにまされり（古今和歌六帖）

そこで御返事をしてやがて參內しはしたものゝ、久し振のことゝて極りわるゆに几帳のかげに小さくなつてゐると中宮が「アノ恥かしゆなのは今參りの女房かね」と戲れられる。これに勢を得て清少も輕くお詫びをして、さて御文にあつた本歌を忘れたことを申すと「イヤさう云ふことがよくあるものだ、いつぞやも謎々をして左方が「天に張り弓」と出して右方がこれはやさしいとつひ馬鹿にして「これはむつかしい、どうも考へつきません」と云ひかけると左方がぬかりなく「ヂヤ左勝」と數をさせたなど云はれる。つひ話興につりこまれてそのまゝもとの儘の心やすさでお仕へしたとある。

明順の社交振は第五十段清女の一行四人が杜鵑をきゝに賀茂道へ乘り出した處に書かれてある。京に田舍ありと云つ

た風の明順の家はその道順にあること丶て車を駐めて立ちよつたところ存外のもてなしに遇つて、農事の實地見學にとて、近所の娘を驅りたて丶鄙歌面白くくるべきもの二人してひかせなどして見せてくれて、やがて晝餉の御馳走が出ると、主人の明順が「サア召食(あが)れ、こんな所へ來る人は、惡くすると、まだ何か喰物はないかなど云つて徵發までして召あがるものですよ」なども云ひ「これは如何です、私が摘んで來た蕨ですが」などもす丶める。清女が「わたしたちはお行儀が惡いんですから、世間通常の女官のやうにちやんとお膳に据ゑてなんか戴けませんわ」と云ふと、明順もぬからず「成程あなたがたはいつも拜跪匍匐の禮に慣つていらつしやるから下の方がよろしからう。ぢやアかう致します」と云つて取りおろしたとある。今日吾々が亭主役をしようものなら到底この明順の足跡もふまれないことだらう。清女自身の此種の記事は勿論澤山あるが余の殊に妙と感じたのは、矢張百卅三段の積善寺供養の一節「遲參の辯解」の所である。

中宮が二度目に宮中から積善寺へ御出でになつたのは夜分のことであつた。女房達が我一と先を競つて車に乘るのがうるさいので、清女は朋輩三人と、態とおちつきはらつて

「若し卓がなくて私たちがとり殘されたと御き丶になつたら中宮樣が何とかして下さるでせう」など澄ましてゐると、係の役人が「もうどなたもお乘りですか」と念をつく「イイエこゝにまだ」と云ふと「これは怪しからん、モウ皆樣はお乘りになつたことと思つて今は得選子を乘せようとしてゐた所でした」と云ふ。「では、その御思召の得選子を乘せておあげなさい、私たちは乘らなくても可いんですから」「こりや怪しからん、そんな人の惡いことは云はないで早く〳〵」とせき立てられて、四人同車して後ればせに先方へつくと、中宮が早く清少を呼べと仰せになつてゐる所であつた。で、召されて四人が御そばへ行くと、中宮の御氣色頗る斜めで「どうしてこんなにおくれたか、もう居ないかしらと思つてゐた」と仰せられる。が、こちらも少々不平顏で少納言が「そりや御無理でせう。一番おしまひの車に乘るものがサウ〳〵早くは參られませんもの、それもウツカリすると乘られなかつたのを、得選子が氣の毒がつて讓つてくれたのです。」など云ふ「それは係りの不都合だ。併しお前方もお前方だ。今參りならばとにかく、右衞門などは勝手も知つてゐるように、云へば可いではないか」とまた御叱りになる。「でも、人をかきのけて先へ走つて乘るやうな、ふざまなことは私には出來ません」と劣らず佛頂面をする。「それが不體裁だからとて、かう遲刻するのもほめたことではない、すべてこんな時は豫定の順序書き通りに、儀式尋常にして來るのがよいのだ」とだん〴〵御不興になる。座にあるものは皆先を爭つた人々だから、右衞門のあてつけにむつとしてゐる。右衞門は右衞門で一だんと膨れ顏になる、この三方を圓めようとて「それはつまり私が惡かつたのです、下局におりてあまりゆつくりしてゐましたので私の上るのを待ち兼ねて皆さんが先へいらしつたのでせう。御不興は申すまでもなくお三人樣に迄御迷惑をかけて誠に相すみません」で、すつかり場面を和げてしまつたとある。

次には清女の才學が逆つた頓機卽妙である。于定公の門だとか、函谷關の雞とか、廬山夜雨草庵の中とか、(これは次期の漢和聯句の濫腸とも見るべきもの)香爐峰の雪とか、せんぞくの料だとか、皆彼女が自得のユーモアでもあり人々の感歎措かざる學問的滑稽でもある。

最後に今一つ記述の材料そのものゝをかしみかある。暇が多くて仕事がなくて所在なさの大宮人は滑稽を人造して、それで自家生活の單調を破らうとした。翁丸の一件や、常陸介の女乞食や、雪のの山の賭や、推柴の袖の擬筆や、卯の花車で大路をかけずつた一段や方弘のをかしいことを寫した所は殊に生彩奕々そゞろに讀者をして甘い微笑を催さしめる。(尙中宮が「下わらびこそ戀しかりけれ」とよまれたのに對して彼女が「ほと丶ぎすたづねてき丶し聲よりも」とこ

たへた問答歌は後日盛行した連歌の前驅とも見られる）

但し、彼女の才筆を以てしても尙飽き足らぬ節がないではない。

第一は衒學的な嫌味である。大進生昌を嘲弄する所などは、あまりひどいと思はれる。

第二は貴族主義的思想である。「にけなきもの」の一つに「けすの家に、雪の降りたる。月のさし入りたるも、いとくちをし」など云つてゐる。

第三は反老人趣味である。子供をめでる記事と略同じ位に「年老いし人のむくつけさ」が記されてある。

第四には感情の上すべりのした秀句である。

第三十段　川は

おほゐ川。いづみ川。みなせ川。みゝと川。又なに事をさしもさかしくきゝけんとをかし。おとなし川。おもはずなる名とをかしきなり。ほそたに川。たまはし川。ぬき川。さはだ川。さいばらなどのおもひはするなるべし。なのりその川。なとり川もいかなる名をとりたるにかときかまほし。よしの川。あまの川。このしたにもあるなり。七夕づめにやどからんと、なりひらがよみけんも、ましてをかし。

と樣に唯その名稱の端に縋つて洒落ただけで、川そのものゝ實景についての體驗なきことゝて、强いてをかしみをつけようとすれば勢ひかうしたうはすべりに墮するのであらう。「淵は、池は、木は、鳥は」とやうな段は何れも同樣の嫌がある。

後世「松づくし、橋づくし、何々づくし」など云ふものゝ濫觴もこの書にあると見ることが出來る。

中古文學にはまだ雜史中の大鏡、榮華、雜の今昔、宇治拾遺にも、可笑しき記事は處々にないではないが、それ等の全體に比べて眞の九牛の一毛だから今は擱く。

第四　近古

韻文の方には職人歌合と落首と漢和聯句、和漢聯句と連歌、俳諧とがある。

職人歌合　とは職人の身になつて詠んだ歌同士の競爭と云ふやうなもので

左　鍛冶

月にねぬ宿とや人の思ふらん　いつも絕えせぬ合槌の音

右　番匠

墨がねの直きをたゞす身なれども　傾く月にかふはりぞなき

左　紺搔

月すめば夜はの嵐の色あけて　むらごに見ゆる森の下陰

右　筵打

うちをける戀のさむしろ徒らに　ねぬ夜の月にしく物ぞなき

と樣なものである。右は建保二年九月十三日に催された。東北院職人歌合（群書類從第十八輯四三―四九）の三番と七番とで、その他當夜の取組には、左に、醫師、佛師、刀磨、巫女、深草、塗師、博打、針磨、桂女、商人、右に、陰陽師、經師、鑄物師、盲目、壁塗、檜物師、船人、數珠引、大原人、海人などがあがつてゐる。歌合の稍滑稽化したもの

であるが詠まれた歌よりも、擬する職業にをかしみがあつたらうと思はれる。

落首　は作者不明の諷刺歌で源平合戰の頃からよく表れた。

伊勢武者は皆緋縅の鎧着て　宇治の網代にかゝりつるかな

と様に大抵用ひる技巧は秀句である。尤此種の早いものでは、皇極天皇の二年十月、蘇我入鹿が上宮王を廢し古人大兄を立てゝ天皇としようとした時の童謠

岩の上に小猿米やくこめだにも　たけて通らせかましししのをぢ

と云ふのがあり、尙早いものに崇神紀にも一少女が皇庶兄難波邇安王の叛を詠じたものもある。落首の長篇は建武元年八月の二條河原のそれで大體七五調をとつて八十八句を連ねてゐる。諸書に引かれて有名なものだから左にあげる。

此頃都にはやる物
召人早馬虛騷動
俄大名迷者
本領はなるゝ訴訟人
追從讒人禪律僧
器用の堪否沙汰もなく
きつけぬ冠上のきぬ
内裏まじはり珍しや
夜討强盜、謀綸旨
生頸還俗自由出家
安堵恩賞虛軍
文書入たる細葛
下克上する成出者
もるゝ人なき決斷所
持もならはぬ笏持て
賢者顏なる傳奏は
我も〳〵と見ゆれども
愚かなるにや劣るらん
まな板烏帽子歪めつゝ
たそがれ時に成ぬれば
いくそばくぞや數不知
人の妻鞆のうかれめは
尾羽をれ歪むゐせ小鷹
鳥とることは更になし
大刀より大きに拵へて
ばさら扇の五骨
日錢の質の古具足
下衆上臈のきはもなく
鎧直垂猶不捨
落馬矢數にぞさりたり
遍くはやる小笠懸
京鎌倉をこきまぜて
在々所々の歌連歌
巧なりける詐は
ゐ中美物にあきみちて
氣色めきたる京侍
浮れてありく色好
内裏をがみと名付たる
よその見目も心地あし
手毎に誰も据たれど
鉛作のおほ刀
前さがりにぞ指ほらす
ひろこしやせ馬薄小袖
關東武士のかご出仕
大口にきる美精好
弓も引えぬ犬追物
誰を師匠となけれども
事新き風情なり
一座揃はぬえせ連歌
點者にならぬ人ぞなき

譜第非成の差別なく　　自由狼藉の世界也
犬田樂は關東の　　ほろぶる物と云ながら
田樂はなほはやる也　　茶香十炷の寄合も
鎌倉鈞に有し鹿ど　　都はいとゞ倍增す
町ごとに立つ簪屋は　　荒涼五間板三枚
幕引まわす役所鞆　　其數しらず滿々たり
諸人の敷地不定　　半作の家是多し
去年火災の空地共　　くわ福にこそなりにけれ
適のこる家々は　　點定せられて置去ぬ
非職の兵伏はやりつゝ　　路次の禮儀辻々ばなし
花山桃林さびしくて　　牛馬華洛に遍滿す
四夷をしづめし鎌倉の　　右大將家の掟より
只品有し武士もみな　　なめんたらにぞ今はなる
朝に牛馬を飼ながら　　夕に賞ある功臣は
左右及ばぬ事ぞかし　　させる忠功なけれども
過分の昇進するもあり　　定て損ぞあるらんと
仰て信をとるばかり　　天下一統めづらしや

御代に生れてさまゞ〳〵の　　事をみきくぞ不思議共
京童の口ずさみ　　十分一をもらすなり

滑稽味は少いが、當時の形勢に對して一個の批評眼ある慷慨家の咏と想はれる。落首も斯うしたものになると洒落どころでなく一種の勞作と謂はねばならぬ。

和漢聯句　（古城貞吉氏支那文學史一八七――一八八）漢和聯句は支那の栢梁臺聯句などが影響して出來たものらしくそれと後鳥羽院の頃から催された元久詩歌合と、當時盛行した連歌などの氣運に促されて催されたものと觀ることが出來る。群書類從第八輯（一一五九――一一六七）これの續きに內裏詩歌合（建保元年二月廿六日）現存三十六人詩歌（建治二年）五十四番詩歌（康永二年）權律師守遍の詩歌合、文安詩歌合、詩歌合（文明十四年九月廿八日、文明十五年正月十三日）などが出てゐる。）そこでそれ等の作品について觀ると

和漢聯句（空華日用工夫略集）

松ハタテ、ヌキハ紅葉ノ、錦カナ、　　二條攝政
秋雨灑如レ絲　　空華
ケサミツル、花ハムカシニ、チリナシテ　　府君
春遊跡易レ陳　　國師
秋ノ田ノ、ミツホノ國モ、ラサマリテ、　　二條攝政
晃旒拜二紫宸一　　大清

漢和聯句雜話篇　策彥

難奈讀殘書　紹巴

秋風に、飛行螢、吹たえて、　策彥

沙濕履無聲　紹巴

しのふ夜の、雨はなか〳〵、便にて、

（神谷保朗氏帝國歌學史四四一――四四二による。これは室町時代のもの）

滑稽味と云つても、高い教養のある士が頓奇卽妙の吟咏振に興趣があるだけである。

連歌　俳諧　連歌とは二人以上句を連ぬることによつて出來た詩形で、その原始的なものは紀記に見えた問答歌

にひばりつくばを過ぎていくよかねつる　日本武尊

かゞなへて夜には九よ、日には十日を　火燒の翁

があり、人によつてはもつと溯つて諸册二尊の天の浮橋にたゝして「あなにやしえをとこを」「あなにやしえをとめを」と云はれたのに起源を見出すと云ふ向もあるが、とにかく斯うした形式のものも早くから萠芽してをつたと大まかに見てその後萬葉の家持と尼との問答歌があり、王朝に入つては伊勢物語や後撰集や拾遺集や、檜垣嫗家集、相摸集、金葉集等にも散見してゐる、前九年の役に源義家が弓に矢をつがへて

衣のたてはほころびにけり

と云うたに對して、安倍貞任が

年を經し絲の亂れの苦しさに

と返したのでその風流をめでゝ一命を助けたと云ふことは十訓抄にも出てゐて有名な話だが、これによく似た逸話は當期末戰國時代にもある。卽ち常山紀談載する所の木全知矩（後に宗晡と云ふ）のことで、彼は安藝佐伯郡の城主であつたが、當時安藝一圓は毛利元就の手に歸してゐるにも拘らず、彼は「父祖傳來の城をたやすく人手に渡すことあるべからず」と云つて頑として籠城をつゞけた。その中毛利方の軍が肉迫して城の運命も旦夕に迫つた。元就は彼が連歌に心を寄せることをきいてゆかしがり箭ぶみを城中にやつた

秋かぜにまだき木だまの落葉かな

すると知全は直ぐ

よせ來てしづむ浦浪の月

とかへした。元就大に之をめでゝ圍を解き、禮を厚うして和を講じ賓將として永く優遇したと云ふ。

後鳥羽院は風流韻事を好ませられて連歌の御催しも度々あつた。で當期に於ける歌人として聞えある定家、家隆、西行、土御門院、順德院、爲家、爲氏、良實、實經、辨內侍、少將內侍、基家、良知、知家、行家、善阿、道生、寂忍、無生等も皆連歌した。そして後鳥羽院時代には高雅な連歌を柿本（有心）と云ひ、低級な連歌を栗本（無心體）と云つて當時は柿本の方が盛で、栗本の座に屬する歌人の咏を「連歌うた」と云つていやしめたが、「新し味」は寧ろ此方にあつたのでその後段々勢力が正反對になつて、室町時代宗祇の頃には遂に栗本派が柿本派を壓倒しその派の人々の連歌を「うた連歌」であつて本當の連歌でないとまで罵倒するやうになつた。

後鳥羽院頃を連歌の發芽時代とすれば花園天皇頃の善阿は斯道の中興で、二條良基宗祇宗鑑の頃はその圓熟時代と云ふ

ことが出來よう。善阿は應長正和の頃に活動した人で鋭意斯道の普及に努め、その門下からは救濟、周阿、良阿、順覺、信照の如き名人が出た。此等の人々と及び宗砌、兼載、知藍あたりが良基以前の斯界を飾つてをつた。

二條良基　は關白左大臣藤原道平の子で、後醍醐、光明、崇光、後光嚴、後圓融の五朝に歷仕し、官は太政大臣、關白、位は從一位、お負けに二度まで攝政して弘和五年六十九歳を以て逝去、門閥に於て地位に於て、天壽に於て申分なき上に學問該博で幾多の好編著をのこした。先づは福祿壽學の四拍子揃つた人と謂ふべきである。愚問賢註、御禊記、百寮訓要抄、榊葉日記、小島口すさび、貞治御鞫記、諒闇記、大嘗會記、雲井御法、白鷹記、山鳥之慰、魚鳥平家、小夜寢覺、等何れもその道必讀の良著である。又新千載、新拾遺、新後拾遺等の勅撰も公の內面よりの扶助に俟つ所が多かつたと云ふ。連歌についての著菟玖波集は連歌道の古今集とも謂ふべく、此迄錯綜してゐた斯界に一定の標準を與へ歸趣を示したものである。

宗祇　は良基の後に出でゝ一層この趣味を鼓吹した。彼はもと紀州の伎樂師で姓は三善氏は飯尾別號を自然齋、見外齋など云ふが、通名のやうになつてゐる種玉庵と云ふのは比叡山下假寓時代の號だと云ふ。若くして律宗の僧となり東常縁、猪苗代兼載に師事して學問した。(又ト部氏について神道をも習つたと云ふ)その始めて連歌志望の旨を兼載につげた時「をしいことにはもう十年後れてゐる。連歌は少くとも二十年振沒頭しなければ駄目だ」と云はれて「では殘りの十年を夜晝ぶつ通しで二十年間と同じなみに努力しませう」と答へて兼載を驚かせた。彼が山路で盜難にあつて

我ために拂ふばかりはゆるせかし　ちりの浮世をすてはつるとも

と云つたので泥坊も歌に感じて掠めることを止めたと云ふのは有名な逸話になつてゐる。性旅行を好み、足跡天下に遍く、西行芭蕉と共に三大旅行詩人とも謂ふべき人であつた。文龜二年七月晦日八十二歳を以て逝く。辭世は

はかなしや鶴の林の煙にも　たちおくれぬる身こそうらむれ

と云ふ。彼明應四年後土御門天皇の御內勅によつて新菟玖波集を撰び作法自由の說を唱へ又吾妻問答、老のすさび等の歌論を著し、筑紫の道の記と云ふ紀行をも書いた。

宗鑑　本姓は支那、後に山崎に住んで油筒を賣つたので山崎宗鑑が通稱のやうになつた。彼はこゝで商ひして一日に錢十孔を得てそれで口を糊し室の額には

上客はたちところにかへれ。
中客は一日にてかへれ。
下客は一宿せよ。

と掲げてゐた。室內の道具としては唯藥罐が一つだけあつた。天文廿二年十月二日癰を病んで死去八十九歳

宗鑑はいづくへ行くと人とはゞ　ちと用ありてあの世へといへ　(辭世)

彼は性瓢逸歌も亦慓輕、從來の眞面目くさつた連歌に飽き足らずとして犬菟玖波集を著はし大にこの趣味を民衆化した。從來堂上のみの慰みであつた連歌はこゝに至つて地下に移り、更に地下より一般人民に流布した、所謂「俳諧」とはこの一般化した連歌に下す名稱で諸家見解を異にしようが、俳諧の起源はこの宗鑑に見出されるとするのが妥當のやうだ。

荒木田守武　伊勢國內宮の神官で宗鑑と相呼應して栗本の連歌卽ち（俳諧の連歌）を奬勵した。その著飛梅千句は斯道の一寶典で、その歌風滑稽な中に上品味を失はないのはその學識と品性とによるものと謂はれてゐる。同じ栗の本と謂つても犬筑波は滑稽粗豪の趣があるのに對して飛梅は優雅と輕快とが融け合つてゐる。併しかうした差違は彼自身も意識してゐたものなので、卽ちこの飛梅千句の跋に

俳諧とてみたりに笑はせんとばかりはいかん、花實を供へ、風流にしてしかも一句たゝしく、さておかしくあらんやうに、世の好士の敎也。

俳諧の第一の句、卽ち發句が獨立詩形（俳句）となつたのも先づはこの守武時代と見てよろしからう。

落花枝にかへると見れば胡蝶かな　守武

尤宗鑑の發句にも上句ばかりを記した短冊で現存するものがある。此等から推せば俳句の起源は宗鑑守武時代と云ふことが出來よう。

守武の著外に、世の中百首と云ふがある。一名を伊勢論語と云ひ童幼敎訓の好著といはれてゐる。

宗鑑の弟子宗長、その弟子牡丹花肖柏、及び里村紹巴、その弟子里村紹叱、及び天正年間の木喰應其は何れも名高い。肖柏には新式今按の著があり、昌叱は豐太閤に召されて連歌七名人の一人として食祿までも賜はつた。應其には無言抄二卷の著があつて紹巴が校閲し奧書してゐる。その紹巴と云ふのは豐太閤に仕へた有名な茶人で、今京都大炊御門（下立賣寶珠庵）堀河東にある紹巴町はその名を記念してつけたものだとか云ふ。

連歌　俳諧のをかしみ　連歌俳諧は純文學的に見ては價値のうすいものである。丁度德川時代の戲曲作者が、一つの題目を手わけして忠臣藏の中、勘平の腹切は某が作り、山科の段は某が作ると云つた風のものと同樣創作の眞義から見ては無意味な遊戲である。それも唯上の句と下の句を二人で歌ふ場合ならば二人が共通の情調に生きてゐるその表現と見れば意味がないでもないが、後世のやうに百韻本體（時には五十韻や二百韻や其外の數もあるが）となつて多くの人々が次々つけて行くとそれ全體に通ずる一貫した想はなくなつて、まるで小作人の轉々した田畑のやうな觀がある。甲が借りて稻作をし、乙が後へ來て豆を作り、丙が借りて粟を作り、丁戊己がそれ〳〵黍、茄子、南瓜を作るとすればその畑は本來何畑か譯がわからなくなる。連歌の初句を第一句若くは發句と云ひ第二句第三句と數へて最終の句を擧句と云ふ。（此以外煩鎖な用語例があるが、假にその一二三の句を並べたとして二の句は長屋の眞中の借家のやうに一の句にも三の句にも隣り合せになるから可いもの丶一と三とは全然無交渉である。

發　句　ならの都を思ひこそやれ　良暹法師

二の句　八重ざくら、秋のもみぢやいかならむ　大將殿

三の句　しぐるゝたびに色やかさなる　越後の女のと

とすると二の句を上の句にして二首の歌は意味の聯接があつて

八重ざくら秋のもみぢやいかならむ　ならの都を思ひこそやれ

八重ざくら秋のもみぢやいかならむ　しぐるゝたびに、色やかさなる

となる。けれども發句と三の句をつゞけた

ならの都を思ひこそやれ。しぐるゝたびに色やかさなる。

しぐるゝたびに色やかさなる　ならの都を思ひこそやれ。

は全くトンチンカンである。これが長く續けば第一句の發句と第百番目の舉句とは戀愛と出産とより以上の遠距離にならう。けれども統一的着想の要求さへとりのければ此も亦なか〳〵面白いもので滿座は發句にどんなのが出ようか、二の句にどうつぐだらうかと云ふ好奇心と、うまくつゞけた時の契合快感と此二種の愉快をその韻の數だけ味はへ得る譯で確かに滑稽文學の一珍である。

心やすい同士の細君が始め此頃の天氣の話をして、それから米相場、物貨、着物、帶、三越、ルーフガーデン、ソーダ水、猿、南京豆、地震、火事、カタバンと話が變つてマルビルの美粧倶樂部云々の時來客があつて中止、マア飛んでもない處へお話が脱線しまして……と云ふ、連歌のをかしみとは此種のそれに酷似したものがある。

又後世の遊びの「尻取文句」と云つて「きつね。」「ねこ。」「こども。」「ものさし。」「しろ。」「ろうか。」「からす。」などつけるをかしみとも似てゐる。

俳諧の一種に天狗俳諧と云ふのがある。上の句組下の句組と等分に人をわけて、めい〳〵勝手な句を作つてあとで兩方の句と組合せるとまるきりチグハグなのも面白いし、てつきりあへば尙面白いもので今も餘興として所々に催される。それが俳諧となると此をかしみの上に更に用語や着想にもをかしみを持たせて段々笑ひの文學となつた、今犬筑波集から引例すると

碁盤のうへに春は來にけり。
うぐひすの巣ごもりといふ作り物。
あなうれしやな餅いはふ頃。

梅が香の、まつ鼻へ入、春たちて、
かすみのころも裾はぬれけり。
佐保姫の春たちながら尿をして
しうとのための若菜なりけり
澤水につかりて洗ふよめが脛
うそをつき〳〵花をこそみれ

散文には狂言を主なるものとし外に戯作的な小説や隨筆物などに滑稽な文字が散見してゐる。

狂言　早く神代の昔天神の怒を和らげる爲めに天鈿女命以下天の安の河原で歌舞した記錄があり、山幸海幸二人の彦神が物爭ひの結果海幸彦の負けとなり犢鼻(たふさぎ)一つでをかしな振をして舞はれ「子孫代々かうして慰め役をしよう」と云ふ條件で仲直りをせられた。(後世隼人舞の起り)とも云ふ。それ以後たつて興趣が高潮に達した場合には何等かの表情姿態はあつたらうし、わけても奈良朝の末から王朝の始めにかけては神樂歌催馬樂の歌舞もあり王朝始めから始まつた猿樂の趣味は段々一般化し、平忠盛が昇殿を許されゝば「伊勢平氏はすがめ」と諷刺もする。鹿が谷でも「瓶子倒る」で召捕れ」などと笑ひ興じたとあるから狂言の下地は早くからボツ〳〵發達してゐたものだが、それが系統的に組織化されたのは室町時代に入つて謠曲が盛行してからのことである。云はゞ膏濃い支那料理の後でサラリとした茶漬を喰ふやうな風に悲劇的な謠曲の後に喜劇的な狂言が要求されたものと觀られよう。

狂言と謠曲との對照　謠曲が祝言物に發端したやうに狂言も始めは祝儀狂言から發達し（松樗、相合烏帽子、三人百姓等）謠曲の修羅物に相當する狂言の爭鬪物があり（胸突）彼の幽靈物の「朝嵐と共に消えにけり」の「けり」のつけ方は此の多くの落ちにある「やるまいぞ〳〵」と相似た趣があり、彼の道行の「急ぎ候ふ程に此は早や佐野の渡りにつきて候ふ」は此の「參る程にこゝぢや」と云ふに酷似し彼にシテ、ツレ、ワキなどの役ある如く此にもシテツレ等の役があり、共に作者や年代の不明なものが多くて共に同じ舞臺で演ぜられて共に面をかぶる。けれども兩者は又正反對の點も少くない。今項目的に對照すると

形式

謠曲	狂言
一、文語	一、口語
二、技巧的	二、無技巧
三、古詩歌句古事の引用多し	三、少し
四、文章としての價値少けれども朗讀文としてはよろし	四、朗讀文としての價値はなけれど時代文法の好資料なり
五、主人公は古英雄、古美人、名將、碩學名僧知識畏るべき惡鬼幽靈等	五、主人公は破戒僧、エセ修驗者、無學の大名、無知の小人、無力の鬼等
六、莊嚴、直摯、幽玄、神秘、崇高偉大の想	六、滑稽諧謔、皮肉、諷刺、不眞面目にして茶氣多し
七、脚色は悲劇的	七、脚色は喜劇的
八、演技複雜にして時間を要し修練を要す	八、演技簡單にして時間は短く修練も入らぬかはりに眞に上乘なる演戲は天才者に限る

作例　狂言の作例として嘗て拙著綜合日本文學全史にあげたものは

一皮肉　萩大名
二矛盾の滑稽化　胸突
三無邪氣なる附會　酢薑
四事實誇大のをかしみ　膏藥煉
五日常の小失敗を取材せるもの　鱸庖丁
六日常の錯誤のをかしみ　狐塚

で今は此等と重複をさけて唯一例をあげておく。

瓜盜人

前略……

アト今日も畠へ見舞はうと存ずる。是はいかな事。何者やら垣を破つて置いた。合點の行かぬ事ぢや。是は如何な事。瓜づるも引きかなぐつて有り、殊に是はかがしまで引崩いておいた。扨も〳〵、憎い事かな。定めて是は鳥類、畜類のわざでは御座るまい。瓜盜人が這入つた物で御座らう。扨も〳〵腹の立つ事でござる。此盜人を見顯度い物ぢやが、何とせうぞ。いや、思出いた。斯樣のものは又重ねても參るもので御座る程に、今度は某の案山子に成つて、急度見顯さうと存ずる。扨も〳〵、腹の立つ事で御座る。今度參つたならば急度見顯

して、只置くことでは御座らぬ。是々、是で一段とよう御座る」

シテ急いで罷歸らうと存ずる。夫に付いて夜前瓜を持參致いて御座れば亭主をはじめ何れも、殊の外風味のよい瓜ぢや、と有つて、ほめ物に致されて御座る程に、又戻りにも一つ二つ取つて、宿への土產に致さうと存ずる。いや何かと申す内に、是ははや夜前の畠で御座る。まだ瓜主が見舞はぬと見へて、垣も其儘御座り、瓜づるも其儘御座る。是はいかな事。瓜主が見舞うたやら致いで、又案山子がしつらうて有る。はて扨、しやうこりもない者が御座る。殊にこれは上手の作つたかゝしで御座る。さながら正直の人の樣に御座る。いや、あの案山子が人に似たに付いて思出いた。重ねての狂には鬼が罪人を責むる體も有り、其外種々の學びをして遊ばうと仰せられた。自然某が鬼の役に當るまい物でも御座らぬほどに、あの案山子を罪人の心にいたし、某が鬼に成つて一責せめて見ませう。さりながら、この邊に竹杖はないか知らぬ迄、幸これに竹杖が御座る是を鐵棒の心に致いて、一責せめて見ませう。いかに罪人いそけとこそ。笑。何程責めても人形ぢやに依つて、責め力がない。又鬪取の事なれば、自然某が罪人の役に當るまい物でも御座らぬ程に、今度は此案山子を鬼に致し某が罪人になつて責められて見ませう。あら、悲しや、是程參り候ふ程に、さのみ御責め候ひそ。行かんとすれば引きとむる。とまれば杖で丁とうつ。是は如何な事。とまれば杖で丁と打つ。とうたうたれば、謠に合いて丁と打つたが、合點の行かぬ事で御座る。風のしつらひでも御座るか。引けばうつむく。ゆるむればあをむく〳〵、引けばうつむく、ゆるむればあをむく。笑。扨も〳〵、上手の作つたかゝしで御座る。是では丁と打つたも道理で御座る。今一度責められて見ませう。行かむとすれば引きとむる。とまれば杖で丁とうつ。アトがつきめ、のがすまいぞ、シテ南無三寶。だまされた。まつぴらゆるいて呉れい〳〵〳〵アトおのれは憎いやつの。よう某の瓜を取つたな。横着者、どちらへ行くぞ。人はないか。捕へて呉れい。やるまいぞ〳〵。

狂言は近世以前我國滑稽文學の最大作品で後世の「脚本」はその繼紹であり、近世滑稽本の種ともなり今日餘興物の出典ともなつてゐる。

お伽草紙　鎌倉時代から多く出た繪卷物は繪を本位にして處々繪詞を挿んだものであつたが、これから出發して文本位の童幼婦女向の草紙が室町頃に出た。大部分は敬神崇佛（物質的慾望を遂げる上に、御利益あるものとして）の想を盛つたものだが、中には滑稽な作品もある。魚鳥平家一名精進魚類物語の如きはその好例である。けれども、そのをかしみは唯外面的名目的であつて眞の好笑の文字は乏しい。

其他　一休和尙や曾呂利新左衞門のことがあるがこれ等を作つたものは近世になつてから出たもので、而かも普通講談落語物に取扱はれてゐるから省いておく。

兼好の徒然草は隨筆の傑作たること勿論だが、又次の各段などは滑稽文學の上乘である。

五二、石清水
五四、御室の法師
八八、道風の和漢朗詠集
八九、猫又、
一三六、鹽の字
二三六、丹波に出雲といふ所あり。

殊に第四十五段の堀池の僧正がをかしい。從二位侍從藤原公世郷の兄良覺僧正は怒りつぽいたちで、坊のよこに大きな榎の木があるので人々が「榎の木の僧正」と呼ぶのが癪だと云つてその木を切らせたら切株が殘つたので、又人々が「伐杭の僧正〳〵」と云ひ出したから、なほ〳〵腹を立てゝその株を堀つて捨てさせたらあとが堀のやうになつて水がたまつたから、世人が又もや「堀池の僧正〳〵」と云ひはやしたと云ふ。

公世の二位の兄人に、良覺僧正と聞えしは、極めて腹惡しき人なりけり。坊の傍に大きなる榎の木のありければ、人榎木の僧正とぞいひける。此名然るべからずとて、彼の木を伐られにけり。其の根のありければ伐杭の僧正といひけり彌々腹立ちて、伐杭を堀り棄てたりければ、堀池の僧正とぞいひける。

第五　近　世

徳川時代に入つて、國文學はあらゆる方面に於て多様の發達をしたが、別けても滑稽文學は世の太平と、淡白洒落な氣質を特徴とする江戸文化の高上と、文教弘布の結果中下流人士までも享樂を讀書に求める傾向とに醞釀せられて量質共に多く優れ所謂「輕文學」の好例になりさうな作品を見るに至つた。就中

韻文　の方では短歌の變態たる狂歌、俳句と同一詞形の川柳は特筆すべきもので他に漢詩の變態たる狂詩、琴、三味中心の歌謠、舞踊中心の俗謠などにも面白いものがある。前期の俳諧は此期に入つては稍々古典的なものとして見られ發句の獨立詩形卽俳句が盛行するやうになつては、最早純文學的方面に一地歩を占むるやうになつた。(但し中にはをかしみある俳諧や俳句もある)

狂歌　の淵源は大體

萬葉の戯歌——古今の俳諧歌——近古の—┬職人歌合
　　├連歌—俳諧
　　└落首

と様になるが、尙近古の

門松は冥途の旅の一里塚　めでたくもありめでたくもなし　(一休和尙の作と云ふ)

太閤が一石米を買ひかねて　今日もごとかい(五斗買と御渡海)あすもごとかい　(曾呂利狂歌咄)

などの先蹤もあり、兒物語や狂言が着想方面の示唆ともなつたことだらう。

當期に於ける狂歌は之を二期に分けると、前半期は京阪中心時代で松永貞德、石田未得、半井卜養、鯛屋貞柳、栗柯亭木端などがその名手である。後半期は一般文運の東漸と共に東に榮えた江戸中心時代で唐衣橘州、四方赤良、鹿都部眞顏宿屋飯盛あたりの名流によつて、此ものが戯文學の有力な一部として氣を吐き、大屋裏住、平秩東作、元木綱、手柄岡持、芍藥亭長根、奇々羅金鷄、馬場金埒、千秋庵三陀羅、狂歌房米人などが續出して多士濟々の全盛を見た時である。そして後期の人々は抑々その雅號からして滑稽的なものが多くて或は自己嘲笑的に大屋裏住と云ひ、或は音調にをかしみをつけて奇々羅金鷄と云ひ、又、古人の名を、もぢつて知慧内侍と云ひ、むづかしい漢字でどんな謹嚴な名かと見れば「しかつめまがほ」と頓降し、誰一人として尋常平凡の雅號はないやうだ。

半井卜養　（安永九年十一月出版卜養狂歌集拾遺）は泉州堺の醫師で慓輕な性格の人であつたと見えてその作は一帶に輕快である。

戌の年の春よめる

春たつた霞もたつた松たつた　これはさんたのいぬの年かな

寛文三年丑のえとなれば

午ならば如何程はねんうしの年　寛文三年さてもはねたり

（くわんぶんさんねんと捻ねる「ん」の音が四つもあるから）

とても年くれなばくれよくれかぬる　師走の皺はしわん坊の皺

或時その類火で燒けたので

丸やけのつれなく見えし我屋敷　赤土ばかりうきものはなし

（壬生忠岑の歌に

有明のつれなく見えし別れより　あかつきばかり憂きものはなし）

自家の職業を咏んでは

むさし醫者命をかけてたのむには　はやるもつらしはやらぬもうし。

彼が狂歌は當意卽妙人のもとめに應じて直ぐ口を衝いて出たものが多い。

去る御大名の御儀にて土蜘蛛の能ありけるが、賴光になりけるツレ太刀ぬかんとする時懷より饅頭二つ太刀と共にころび落ち舞臺をにげまはりて太夫がふみつぶしけるを、去大名一首所望とありければ

賴光の太刀と一度に走り出る　是やまんぢう（賴光の父は滿仲）のあんの打もの

床の間の香爐を臺にてよめとありければ

しんかんと　そとあたゝかに命門のうちには沈と肺と火ばかり

其他

なれ茄子なれ〳〵茄子なれ茄子　ならずば床のかけものになれ

の畫賛や、

我見ても久しくなりぬその羽織　貴樣の袴幾世經ぬらん

の問答歌の如き、何等推敲する所なく言下直ちに咏んで我人共に呵々大笑する底のものが多い。

鯛屋貞柳　（延享三年十一月版、狂歌月の鏡、寶曆九年正月版、狂歌千代のかけはし、享保十四年七月版、家津と、寛延三年六月版、狂歌手なれの鏡）は難波の人でその一族には戲曲作者として有名な紀海音、近松が戲曲の注をした難波みやげの著者穗積以貫などがあり、彼の師には、玉雲翁信海がある。その號は色々あつて

珍果亭言因、信乘、霜露軒、精雲洞、生庵、遍船子、放曠子

など云つたが、彼の有名な墨の一件から油煙齋と名のつた。それは奈良の松井和泉と云ふ油煙所（製墨所）の銘「龍煤」といふ大きな墨が、あまり珍しいと云ふので叡覽を賜つたと云ふので

つきならで雲の上までするみのぼる　これはいかなるゆえんなるらん

と咏んだのが、當時朝野の喝采するところとなつたからである。その集を「家津と」と云ふ。それは

「見るもの聞くものにつきて浦の汐貝拾ひ集し玉の數々を露ばかり水莖に書流し外には出さじと思ひいれし作者の心ばへなれば家津と名づけて」

と知人淵田不咸の序によつてその題意が察せられる。

百人一首にどうありとても元日の　曉ばかりよきものはなし
大晦日ふけ行く鐘を腰につけて　うたうて歸るかけとりの聲
いろ〳〵の善をもなさば盆前に　焰魔の帳を消してたまはれ
よの中に何と將棊のこまりもの　はるもよしなや捨てゝつまらず
ぢゞは山へしばしが程に身は老いて　むかし〳〵の咄戀しき
ちら〳〵と音羽のさくらちりつんつ　てんと三すじのたきの白糸

その作を見るに流石に輕妙飄逸の趣致愛すべきものがあるが、後の斯界に於ける彼の名聲は寧ろその歌以上である。同書の卷末萬笈齋の跋にも

壯麗工緻最合于事情故一詠時出則人舉無不以賞嘆矣然其所詠僅窺一班而未見全牛豈不遺恨乎

と云つて居る。月の鏡の卷頭には、北果亭雪窓が序して

栗の本のことの葉しけりまさり此かけにあそぶ人世を重ねて數おほきなかに故由緣齋わきて近き世に名を得て雲の上までも聞えをあげ世の人のくちに喰炙せる佳咏かぞふるにいとまなしまことに此道の中興といふべし。

とも稱へて居る。尙又、「千代のかけはし」の序には、貞柳の孫弟子とも謂ふべき吉備中國吉濱の里なる高津貞山が

先師貞翁の歌は理情の境をはなれて自然の妙處に入る故にこれを見る人腸の底より笑ひを催しふかく感じて鼻をすゝる一たび口を開けば釣する海士芽を刈る童まで耳をおどろかす云々

と讃美してゐる。此等は幾分の誇張があるとしても、とにかく貞柳が斯道の後輩に重きをおかれ「柳門」と銘打つて斯壇に有力な一集團を成したことは確かで、察する所彼は性格圓滿の好紳士で世話事を好み、殊に抱擁力に富んだ人であつたらしい。

「手なれの鏡」は「家津と」に洩れた彼の咏や門人の咏を浪華なる桂山主人と云ふ――これも門弟の一人が集めたものでその奥に「柳門狂歌十德」と題して左の文（番號は余がつけた）をあけてゐる。此は狂歌價値論とも謂ふべきものだ。

一、本歌物語の詞を用ゆれば、うた人も口ずさみ、
二、古詩本語をもちゆれば、詩人も亦吟弄し、三、俗諺俳言を用ゆれば、兒女のたぐひ、牧童樵夫のともがらも耳近くて心得易し。
四、梵漢の語も共にもちゆれば詞廣して詩歌にいひ殘す情ものべやすし。
五、詞長うして俳諧の句にいひつくし難き趣意もまたいひかなへやすし。
六、ことば聞えやすくて、教戒の助に成易し。
七、はやりうた、はやりこと葉の拙きも此道に用ゆれば、やさしくなれり。
八、卽席の詠に興を催しやすし。
九、餘力なき人も學び易し。

十、和歌の本意を忘れねば、節の小袖に繩帶の、ことばの海に、簸の川上の、流れを湛えたり。

此道にそなえし德のかず〳〵は是のみにはつきせねど、まづ十の數をあげ侍る。柳門に遊ばん人は、これらの德を仰ぎて、故翁の遺風を、したふべきものなり。

此は「何々の十德」と十の項目をあげる型のまねで狂歌固有の特點ではないが、併し一面當時狂歌道に遊ぶ人士の心理をあらはしたものであらう。

柳門の人々　中で有名なのは栗柯亭木端であらう。師の十三回忌には

月ならではちすにすみや登るらん　彌陀にゆえんの深き身なれば

と咏んで追善狂歌供養を催した。

三味線のいとちの戀のあひの手か　ちりん〳〵と鈴蟲のなく

打よせて年の瀨こしの近づけば　人のあしなみさはがしきかな

今日こゆる年の大岑泥川に　行くのもあれば金かけもあり

かた戀は道具を持たぬ仙人や　こなたばかりでなけきをば樵る

菜の花の黃なものほしくおもひ寢の　夢に莊子も蝶となりけん

行列のとまるところにとゞまらず　箒千里もふるやつこかや

北果亭雪窓、永日庵廉鄕、安藝の國の貞佐、貞佐の門人貞山と段々門戸が擴まつて關西狂歌壇の主流をなして居たが、此等多くの作者は、その人格存外生眞面目で、云はゞ生活の安全瓣に一寸咏んで見る人々ばかりであるから樂しんでも恥らない趣があつて、腹の底から茶目つてゐるのではない。その點になると

後期江戸全盛時代　の歌人は徹底したものが多い。彼等は自己の生活そのものからして狂歌調で營んでゐると云つた趣がある。此意味から私はずつと後の十返舍一九（列傳體小說史二四九―二六二帝國文庫第九篇膝栗毛開題）を第一にあげたい。駿府の町同心重田與八郎の二男重田貞一（明和三年生）と云へば如何にもしかついが、浪華に出て、小田切土州に仕へても、持つて生まれた放蕩癖は、仕官懸命思ひも寄らず。材木屋へ入婿したが此も落第して離緣沙汰。而かも平氣で若竹笛躬並木千柳等と「木下蔭挾間合戰」と云ふ脚本を作りなどした。（これも後世、可なりよく上場せられた）江戸にさすらうて通油町の地本問屋蔦屋重三郎のかゝりう人として、錦繪用の奉書紙の禁水引きの片手間に洒落本黃表紙などを書いても一向賣れない。今日で云へば惡い意味の文學青年と云ふ體で借家の二階でころがつてゐて、正月が來て御馳走の出來ない時は、得意の繪筆で酒肴海山の珍味を四壁に描いて、それで飲み喰ひしたつもり、又も婿入り沙汰で、長谷川町へ入夫、それも向ふから離緣して元のひとりみ、結句氣樂とうそぶいてゐる中に享和二年の當り年が來て、東海道中膝栗毛初編を出すと、それが意外の好評で、眞に東都の紙價を高からしめる程の賣行、文化六年第八編を出す迄はトン〳〵拍子の大成功、此で味をしめたは彼ならずして寧ろ本屋で、俄に待遇を厚うし路金を與へて讃岐の琴平、安藝の宮島、木曾のかけはし善光寺、草津溫泉、六阿彌陀と、所々方々へ遊ばせて續々紀行を上梓した。江の島土產、金比羅道中、大師めぐり、六阿彌陀詣、宮島參詣、木曾街道、善光寺道中、草津溫泉道中などはその標題である。それ程流行兒になつても彼自身は相變らず能く貧しく、一生を洒落のめして、天保二年七月廿九日六十八歲を以て逝く、その幽明の過渡にすら、ケロリ閑然

この世をばどりやおいとまにせんかうの　煙と共にはい左様なら

と辭世した。墓は淺草善龍寺、法名「心月院一九日光信士」彼一代の作は寛政七年出版の心學時計草を處女作として無慮三百餘篇（慶長以來小說家著述目錄）筆まめとのんきと貧乏と酒好きは通りものであつたらしい。

東海道中膝栗毛は彼の代表作であり、又、滑稽本中の傑作であることは衆口の一致する所であるが之を狂歌の秀逸と見ることは從來の文學史家にはまだないやうである。余思ふに、膝栗毛の狂歌に於けるなほ源氏物語の短歌に於けるが如き趣がある。源氏を以て和歌必讀の書と云ふには誰も異論はないやうだが、膝栗毛が狂歌、必讀の書であることはあらはに首唱する人はまだ見ない。けれども狂歌を嗜む人は矢張この書を無二の寶典としたのではあるまいか。蓋し物語歌は歌と同時にその歌がどうした場合に咏まれたものかと云ふ歌境をもあげることになるから初心の徒もよくその眞趣を汲みとることが出來るのである。滑稽飄逸の狂歌を父とし、奇警奔放な川柳を母として產まれた愛すべき畸形兒――、それが膝栗毛であらう。

（今は故人となつた余の舊知に丹波國氷上郡黑井村片山三十郎と云ふのがあつた。外に道樂はないが三味と狂歌が大好きで、それで身代棒にふり、黑井片山と云へば郡內では聞えた舊家なのが段々貧乏して家も賣り飛ばして、もとの庫に住んで

三十郎は豆腐のやうに家を賣り　心こんにやく口はあぶらげ

など云つて居つた。余が國文を研究することになつたと聞いて「わたしの狂歌の虎の卷を差上げませう」とて贈られたのが、今、現に開かうとしてゐる古版本の膝栗毛だ。）

東海道中膝栗毛　高島川に差かゝつて、名物のさらしを買つてくれと小女が云ふ。「こちらから賣つてやらうか」「あなたさらしをお持ちですか」「持つてるとも上等を…　業さらしと云ふのだ」

買もせず名物の名のたかみやに　恥をさらしてとをるうき旅

それから、一人の相客と連になつて茶屋に入り眞裸の崇高院和尙と落ち合つて酒になり、京のお公卿が便器にする吹筒で振舞はれ、飲んだあとでそれと知れて大騷ぎ

胸わるや公家衆がしたる小便と　うつてかわつたけさは吹筒

摺針峠の茶店では鼻紙に書いて、名物の座頭餅の糊で貼りつけた狂歌がある。

遠目鏡よりもまさらん摺針の　めどよりや見る湖の景色

居合した隱居に褒められて又北八が駄句つて

名物のさとうもちより唐崎に　雨氣もなくてはれわたる湖

鐙が淵を通るとては

爰もとは鞍の鐙が淵なれど　踏またがりて通られもせず

瀨戸では名物の染飯に舌鼓を鳴らし

やきものゝ名にあふせとの名物は　さてこそ米もそめつけにして

「北八の怒つた顏が御愛嬌だ」といふので彌次郎兵衞が

御馳走とおもひの外の始末にて　腹もふくれた頰もふくれた。

全篇此調子で續いてゐるから之を狂歌の教科書と云ふに無理はないであらう。

狂歌の中興　けれども普通斯道の代表作家としてあげらるゝものは、唐衣橘洲、宿屋飯盛、就中太田蜀山人であつて、事實狂歌の作の量は此等の諸家の方が多いやうである。けれどもこの三家は何れもその生活は大部分眞面目で一九のやうに左傾してゐない。橘洲（二四〇三―二四六二）は通稱小島源之助と云つて田安侯の家臣なり、宿屋飯盛（二四一三―二四九〇）は國文學者石川雅望の狂號で、彼は雅言集覽（辭書）の編者であり、北里十二時、都のてぶり（雅文）の作者であり、近江縣物語、飛驒匠物語、紙魚の住家物語（雅文小說）の著者である。蜀山人（二四〇九―二四八三）だけは幾分學者的であつたが大體に於て狂歌師戲文家の分子が多く、生活態度そのものが狂歌を基調としてゐたかのやうに思はれる。

蜀山人　本名は太田覃と云ひ、號を南畝、戲號を杏花園、四方赤良、四方山人、寢惚先生、杏花園、竹羅山人、蜀山人など云ふ。（蜀山人はもと「崑崙山人」と云つたものを、彼に手紙を貰つた人が見そこなつて「崑山人先生」とするところを「蜀山人」先生としたのを「此もよからう」とてそのまゝ採つて用ゐたとも云ふ）江戸幕府の士で、その學は和漢雅俗に渉り、その性は磊落にして機智に富み、隨筆雜著めいたものに浮世畫類考、假名世說、一話一言などがあるが皆有益の文字だ。（新百家說林中、蜀山人全集）狂詩狂文の集には「寢惚先生文集」と云ふがあり、當の狂歌集には南畝帖千紫萬紅、萬紅千紫があつて斯道中興の名手と仰がれてゐる。隨て後期狂歌の全盛時代はやがて彼の全盛時代――卽ち天皇を以てすれば、後櫻町、後桃園、光格の三朝、年號を以てすれば明和安永天明の頃に當る。

玉川の流に二夜まくらして　左右の耳を洗ひぬるかな
太白の砂糖のもちはおきらひで　いつの三千尺の瀧のみ　（李白觀瀑畫）
よつの海靜けき御代は萬歲の　つゞみにのみぞ波の聲する
春雨のうるほふ枝の山なしの　きのふの花はけふのありのみ
彥星の引くてふ牛の涎より　この契りこそ長たらしけれ
ねてまてどくらせど更に何事も　なきこそ人の果報なりけれ
一刻を千金宛にしめあげて　六萬兩の春のあけぼの
名月は雨ふるぞよき中々に　かたぶく世話もまつ世話もなし
世を捨てゝ山に入るとも味噌醬油　酒の通路なくてかなはじ
新しき肴もとめにこゆるぎの　いそぎつかひにあし二本橋
鶴もいや龜もいや松竹もいや　たゞの人にて知らぬこそめでたき
一門で三百三五十五城　つらねし和氏が玉の盃

彼は亦斯道の墮落を云ひ、中庸の三强說に似せて（塵外櫻清澄編萬代狂歌集）

古之狂歌歟今之狂歌歟東方之狂歌歟西方之狂歌歟南方之狂歌歟北方之狂歌歟抑而狂歌歟滑稽以教不墮落書者古之狂歌也祇金玉而類本歌者今之狂歌也

と謂つて居る。思ふに以前の狂歌には自然の輕味をかしみがあり、當期の狂歌にはわざとらしいくすぐりで笑はすやうな嫌味が生じたのを慨いたのであらう。

其他の諸家　今名家の名作と思はれるものを次々列擧すると、

歌よみは下手こそよけれ天地の　動き出してはたまるものかは　宿屋飯盛

春立て見し初夢の初茄子　嫗はともあれ貘にくはせじ

古跡ぞと聞いてしかけし小便を　とむるもつらし宿坂の關

かけ取に尻尾だにも出さじとや　逃て王子の狐火を見る

ちりかゝる隣の花に春の夜の　あたひせんきを頭痛にぞやむ

なよ竹のいもに見とれし尻目さへ　藪にらみとて嫌はれにけり

仙人も天狗も雲と見たがへて　梢をふむなみよしの丶花

手引あみとりもち竿もほしくこそ　いもが姿は沈魚落雁

五日めに風ふく世にも栗ばかり　おちたるをなど拾はざるべき

佛をも賴むな妹が後の世に　ひよつと變生男子ではいや

水牛の櫛に鉛のかんざしを　もらうてにせとちぎる麥畑

世の中に酒といふものなかりせば　何に左の手をつかふべき

（狂歌については飯盛は蜀山人や橘洲の指導を受けた）

菜もなき膳にあはれは知られけり　しぎやき茄子の秋の夕暮　唐衣橘洲

我戀は旅の行く手の長縄手　たゞ果もなくまつばかりなり

辨慶が早業めきて行年の　尻馬に乘る春は來にけり

かり行くやさく花の山人のやま　花見る人をはなのしをりに　朱樂管公

ゆく春を暫時とゞめてねむらせよ　はたごやもなき海棠の花

かゝる露玉とあざむく君子あれば　又質におく連歌師もあり

暮れて行く年も道中双六の　龜山あたり雨ふりにけり

けぶり草たゞ一服のむさし野に　花もこもれりつきもこもれり

くちをしや身は老と云ふくせものに　かしらを下げつ腰をかゞめつ

居ぶろにかゝり湯もなき宿とりて　むさや草津の里の夕暮

あふみのやかゞみの山といふつらの　春にうつらん翁さびても

なべて世に春つぐるとて九萬里の　翼はまさかからぬ鶯

二階から又三階の箱ばしご　も一つあがれたとひるふとも

ゆくさきは勿論あしの名所とて　大阪たびのふみ出しのよさ

吉原は花の盛になりにけり　吉野ははだし傾城は下駄　手柄岡持

十五夜としころひきあふ十三夜　月の景淸雲のみほのや　平秩東作

すゝはきの日とて立てたる据風呂に　よごれぬ旦那先へ入りけり　文　麿

鶯も蛙もおなじ歌仲間　經よむもあり唯なくもあり　大屋裏住

めを出さばはさみきらうと横に行く　宇治の茶畑は香に匂ふなり

かくばかりかはる姿や梅干も　花をさかせしすいの身のはて　元木　網

雪ならばいくら酒手をねだられん　花の吹雪の志賀の山越　馬場金埒
きぬ〴〵のなさけを知らば今一つ　うそをもつけや曉六つの鐘　三陀羅
世の中の人とたばこのよしあしは　烟となりて後にこそしれ　鬼卵
おとがひを撫る間もなき歳の暮に　ひまなけぬきや口あくびせん　尾田初丸
涼しさに秋かと問へば蓮葉の　かぶりをふれる夏の夕風　百草朝摘
僧正が榎木に來なくその根さへ　掘り出しものゝ鶯の聲　吉田俊徑
百人一首によみのこされし鶯の　楚辭に入らざる梅にきてなく　篝屋三駄
やれ寺の障子もけさははりかへよ　のりをときにし釋迦の誕生　大矢員久
迷ひ路多き山家にこれはまた　きくに勝手のよきほとゝぎす　黄金持丸
いつまでも居るには若かじ歸るには　しかじとなくな山郭公　世常有
初鰹さても價の高笑ひ　腹をかゝへる程は食はれず　一富士二鷹
勢を筆にあらはす紙のほり　御無事で老の坂田金時　物事於古足
だまされて憎い水鷄とおきて又　おのが頭をたゝくかどの戸　田道行成
われ鍋をとぢた二人の中ぞとて　やたらうきなのもりてくるしき　麥飯高盛
三味線のてんとたまらぬよい雨と　客は調子をはづす居つゞけ　横井也有
うまさうな色をも香をも知る人ぞ　汁にせよとてくるゝ納豆
豊なる世にすみながらすゝはきの　けふは身ひとつ置どころなき

忙しい中にからうすふむ人の　手はひまで居る年の暮かな
鼻紙か煙草入でもあるべきに　沓をとれとはふみつけたこと
更くるよの霜に寒しとひだるしと　合せて二四の鉢たゝくなり
御垣守衛士のたく火の夜はもえて　尻はひへつゝものをこそおもふ
世の事をきかじ〴〵とせし耳も　遠うなれとはいのらざりしに

其他地方の名家や自稱名家の撰集は隨分多く、今日坊間に流布する古本をあさつても直ぐ十數冊は手に入る位である。段々盛行するにつれて和歌に倣つて種々の方式をたて、歌態を分類して多くの目を立てなどするやうにもなつた。（戎歌式後撰夷曲集）併しこの狂歌とても重な技巧は秀句にあつて上掲數十首の中秀句を拔きの事實上の滑稽歌は十首以下位の數であらう。隨て狂歌の巧拙は秀句の巧拙によつて決定されるやの觀がある。そして此等歌人の秀句の多くは人口に膾炙してゐる古歌を引用して「元日の曉ばかりよきものはなし」と云ひ、俚諺を下にして茄子の夢を「嫁はともあれ貘にくはせじ」と云ひ歴史上の故事をやとつて「月の景清雲のみほのや」など云ふ。その外には大袈裟に勿體をつけて、單なる「梅に鶯」をば百人一首と楚辭にまで照らし合せたり頓降法や語呂を考へて「夜はもえ尻はひへつゝ」と云つたり「われなべにとぢぶた」と云ふ風の下世話にくだけたり、したものが多い。中につき自分を棚下しゝたり、人間の矛盾を茶目つたり着眼を奇警にして忙しい歳の暮に毛拔やからうす踏の手に眼をとめたり、日常の小錯誤を笑つたりしたものは確かに狂歌中の秀咏と謂ふべきだ。

川柳　川柳の系統　本質川柳は此期の特産物であつて、就中實暦明和以後にはやつたものだ。詞形は俳句と同じだが

俳句が狂體化したもの即ち川柳と觀るのは少しく早計であらう。正式短歌が自由化し俗化したものが連歌で、その連歌が滑稽化したものが俳諧で、俳諧の中の發句だけが獨立したものが俳句であるし、俳諧の二句（即ち短歌と同じ形）が獨立してその一半を題にしたものが前句附、俳諧の發句を獨立させて更に之を通俗化し、初五音を題にしたものが冠附で、この冠附の題と答とを一つにして詠んだものや、前句附の上の一半即ち五七五が獨立したものが川柳と余は大體かう云ふ風に解してゐる。即ち

短歌―連歌―俳諧｛二句の獨立――前句附｜發句の獨立――俗化―冠附｝川柳

のやうな系統表が成立つ譯だ。

前句付　（俳諧きつねの茶袋）とは下の句の「遠いことかな〳〵」と題を出されて「榧の實を植えて碁盤のこゝろあて」とつけるやうな類で、そのをかしみは奇想天外的のものや逆說法的のもの若くは枕草紙などにある「物は」式の文と同じ趣がある。尙例をあげると（始めは題次は附）

雲の上から足がふら〳〵
茶釜をば自在天まで釣上げて
四角な玉子もあるものにこそ
鳥の子も紙とて丸うすきもせず
丸し四角し長し短し
まる盆にちんばが豆腐かひに行き
くるり〳〵とくるり〳〵と
丸藥を舌でまるめる藥賣り
きりたくもありきりたくもなし
盜人をとらへて見れば我子なり

冠附　とは始めに「早いこと」と題して附に「お弓町から矢の使ひ」とする類のもので、始めの題が五文字次の附が次の七文字五文字だから讀者の受け入れが順當であり、又詞形も簡單でありする點はちがふが他は前句附と同じ趣がある。

どう見ても
海は世界の看鉢
鳥居は神の鏡立
つきのお笠に紐がない
かしくは梅の若ずばえ

寬政二年版の「若とくさ」（此は「青とくさ」の續篇として出たもの）には

學びけり、時々に、まつすぐな、安堵して、そろひかね、うち〳〵と、ほつしりと、かき上げて

等百數十の題があがつてゐる。此は浪華の前句附で

學びけり

人の木賊は經と傳
うぐひす蛙はづかしい
看板讀せ子を自慢
禪の後住の疎懶輩
名所委う知る中風
草履取まで慈悲深い

が始めにあがつてゐる。

柄井川柳　川柳點　前句附、冠附は選者が題を出して同好者に配ると、めい〳〵詞想をこらして十句なり二十句なり（終には百句以上のものも澤山あつたとか）案出したものを選者の手許に届けると、選者の宗匠が此に點を入れ、入選句が百、二百とまとまると一編にして出したもので、時には宗匠が二人以上ある場合もある。その時にはどの選にも入つたものだけが篇に載せられる譯である。然るに寶曆明和の頃前句附の點者柄井八右衞門、號を川柳と云ふものがあつて、斯道の達人であつたが、とど前句だけを獨立させた句の作を奬勵して之に點を入れた、川柳の入れた點之を川柳點と云ふのだが、後次第に此詞形が盛になつて遂に五七五の此種の詞形を凡べて川柳點又は川柳と云ふやうになつた。

俳句と川柳との對照　上述の次第で俳句と川柳とは連歌に對しては孫（俳句）曾孫（川柳）との相違があるが、尙參考の爲め、一通りその差異をあげておく。

對照表

俳句	川柳
起り　一、創始期　室町時代	一、近世、寶曆、明和頃
起り　二、由來　連歌の第二次變形	二、連歌の第三次變形
形　三、用語　制限あり	三、制限なし
形　四、季の定めあり	四、なし
五、自然美を主材とす	五、人事を主材とす
六、主眼　さび	六、穿ち
七、滑稽有無不定	七、必ずあり
想　八、飄逸を悅ぶ	八、皮肉を主とす
想　九、詩味陶然たるあり	九、警句の奇拔あり

一二は已述の通り。

三の用語は短歌に比しては俳句も自由の多い方だが尙切字止字のことなどがあり、川柳のやうにくだけた口語を使ふことはない。

お靜かにござれ夕陽いまだ殘んの月

は謠曲まがひの口語調であり

　鳥よのほゝんどころか歳の暮

はやゝ口語に近いが俳句では先づ此程度まで許される。所が川柳では

　お轉婆にかまひなんなと轉婆云ひ

　おまはんとわたいで家がをさまらず

　いきをれがいきをつて又秋の暮

　南無女房乳を呑ませに化けて來い

と云つた風のものが澤山ある。

四の「季」は俳句の主材は自然美だから自然美を短適に表現する爲めに豐かな聯想のものをきめておく必要がある。「清水」と云へば、直ぐ青葉若葉の夏木立や、岩間谿間の靜けさや。山路を辿る苦しさ、その苦しさに渴を醫する瞬間の痛快さ、一杯一杯又一杯と汗の種は承知しながらも貪り掬うた體驗、こんなことは直ぐ聯想される。そこで「紅さいた口もわするゝ清水かな」と云へば、清水の一語によつてその場面が非常に詩化される。で、この「清水」を夏の季（六月）として、その頃の風物以外にはよまないことにするこれを寄と云ふ。處が川柳は人事が主材だから

　立聞が風鈴の紙持つて居る

としてその風鈴は夏でも秋でも一向おかまひなしである。五の主材は多くの作例を見わたせば直ぐわかることで俳句では

　おらんだの文字が横たふあまつかり

　さみだれや或夜ひそかに松の月

と「かり」や「月」や凡て自然美を材にとるが、川柳では

　親と云ふ二字と無筆の親は云ひ

　居候寢言に云ふがほんのこと

など凡べて人事に交渉をもつものばかりを歌ふ。

俳句にも「更くる夜や炭もて炭をくだく音」「子をねせた間をぬけ出でゝ夕涼み」など人事句もあり、川柳にも「おさへればすゝきはなせばきりぐ〳〵す」「白鷺は五位鷺よりも暮れのこり」など自然句もあるが、此等は寧ろ例外とも謂ふべきだ。

六、俳諧は「さび」を主にする。尤も此「さび」と云ふのが隨分神秘的なもので寧ろ悟得すべきものなのだから一言に釋明することは困難だが、先づは禪味と茶味とをつきまぜて文學のオブラードを着せて呑み込んだと思へば大體は分らう。卽ち分ちて云へば澁くてあつさりしてゐて古めかしくて雅びやかで、どこかに超越的な趣のあるものが「さび」で、熟語で云へば、

　枯淡　古雅　超越味

の結合とでも云ひ得よう。芭蕉の

　枯枝に烏のとまりけり秋の暮

は「さびの上乘」と云はれてゐる。然るに川柳では「穿ち」を主にして人生の弱點を錐でもむやうに、把雜剔抉することを悅ぶ。

立聞は己が嘘をもつて逃げ
仲人に不斷着で出てぞつとさせ(見合ひ)
昔ならなあおぢいさんさうぢやとも
こつそりと別室へ送る下戸の膳
稚子のころんで泣かぬ褒め詞

七、俳句は滑稽の有無に拘らず「さび」のある詩致を含んで居ればよろしいが、川柳は滑稽そのものが主生命だから、讀んで見て何等をかしみのないやうなものは失敗の作である。

八、飄逸とは超越的な趣のことで、人事の喜怒哀樂に對して關せず焉ケロリカンとしたやうな趣を云ふ。惟然坊父子に例をとると、久々の邂逅に泣くものは非超越な娘で

兩袖に唯何となく時雨かな

で澄ましてゐるものは飄逸な惟然坊だ。後から追うて袖に縋るものは矢張非超越な娘で

重たさの雪拂へども拂へども

とうそぶきかへつてゐるものは又矢張飄逸な彼だ。俳句が含む飄逸味とは略々かうしたものである。川柳とても浮世小路の義理人情から解放された氣分でなくては咏めなからうが、此には寧ろ茶氣が入る。そして

町内で知らぬは亭主ばかりなり
仕方なく辭世をほめて醫者は立ち

など皮肉る。

九、「起きて見つねて見つかやのひろさかな」と云へば、夫に死に訣れた千代女が夏の短夜の夢路すらも轉輾反側する哀痛の裡に貞操な女性の思慕の姿がしほらしくもいぢらしくうつゝてくるが

起きて見つねてみつ蚤を三つとり

と云へば「これはふるつてるね――」とでも云ひたくならう。そこに俳句と川柳との對照が見出される譯だ。

川柳の特徴　一、想の側から　川柳の特徴は前掲俳句との對照に於て略察せられるが、尙分ちて之を云へば

一、下女の無能　山だしの下女割箸を二ぜんすへ
二、居　候　居候三杯目にはそつと出し
三、人の得手勝手　夏はまた冬がましぢやと云はれけり
四、燈臺下くらし　町内で知らぬは亭主ばかりなり
五、何氣なき好笑　雷がことはりにきて天氣なり
六、歴　史　小便もせずに平家は船に乘り
七、小失錯、小錯誤　かなちがひ醫者と石屋のかどちがひ
八、矛　盾　通拔無用で通拔が知れ
九、寫　實　生醉の琴をけなしてとうとう寢
一〇、をかしみある想像　追分は道をまたいで道をきき
一一、纖細の穿ち　麥畑の尙々書へ豆を蒔き

川柳の特徴　二、修辭

一、頓降法　光陰矢の如し、雪隱もうたまり

二、對照法　すい息子辛い親爺に甘い母

三、秀句法　煮え切らぬ中だにかひ（貝、甲斐）へ鹽を入れ（上杉謙信）

四、引用法　イ、古歌　かけとりが來べき宵なりかねて逃げ（衣通媛）

我せこが來べき宵なりさゝがにの　くものふるまひ兼てしるしも

ロ、俳句　物云へば唇寒し前齒かけ（芭蕉、物云へば唇寒し秋の風）

ハ、古物語　よつぴいてひやうと放たぬかゞしかな（軍記物語によくある語）

五、誇大法　鼻唄を胴切にする番所前

六、譬喩法　薙刀は刄物の中の女形

柳樽の編輯　川柳の集を「柳樽」と云ひ明和二年の夏第一編を出し文化二年第三十四編まで初代川柳が選をし、文化三年の秋第三十五編からは二代目川柳が代つてゐる。その時の序文に

今年二代の川柳、親の柳と根を續ぎて、角力のざれ句十回を催し、其句を拔萃して、三十五編の十句集成りぬ。云々

とある。これは小石川の琴我の文である。この二代目川柳が第四十五編まで選をした。今國書刊行會本によつて計算して見ると

編數	句數	編數	句數	編數	句數
一	七二〇	一六	七五二	三一	六五七
二	六一七	一七	六八七	三二	五二〇
三	七三四	一八	七四四	三三	五五九
四	六八三	一九	六九六	三四	五六八
五	六八二	二〇	六五九	三五	五九六
六	七一二	二一	六八一	三六	六三二
七	七二六	二二	七二一	三七	六一八
八	七一六	二三	七二二	三八	六一五
九	七四二	二四	六七〇	三九	六一五
一〇	九三一	二五	五四八	四〇	五三七
一一	七四一	二六	七一〇	四一	六三七
一二	七〇六	二七	五六二	四二	五六九
一三	七四二	二八	五六一	四三	四九一
一四	七四九	二九	五七三	四四	六四六
一五	七六九	三〇	六一八	四五	五七四

計二萬八千六百九十八句外に冠附が十八句あつて、中には同じ句が重複してゐるが、それは作者がちがふ場合には、たとひ同一句でも採ることになつてゐるからである。

京阪の柳壇　京阪の狂歌が江戸で花を開いたと同一程度に迄は、江戸の川柳が京阪に盛行するには至らなかつたが、それでも次第にこの趣味が普及すると共に隨分多くの作者が表れたらしい。但吾々がそれ等を讀むときどうしても「川柳は矢張江戸趣味の一つで江戸ッ兒に限る」と云ふやうな感じがする。

教訓柳樽（浪華群玉堂出版）に紫式部のことを

石山で出來た書物のやはらかさ
よるかいた物がたり故夢でとめ

とあり、

浪華やなぎ樽（文政七年版）

には、十點を得たものとして

阿呆よと徐福仲から指をさし
挨拶を目で返事する彈がたり
回狀の點を承知と無筆よみ
秋の夜に腹の蟲なく居候
直針でとう〳〵釣つた齊の國
敵役樂屋の風呂で蘇生をし
人魂は笛や太鼓の拍子で出
女房は家の柱とたてこかし
稚子の強いといふはこけたとき
唇は薄く無心は厚かまし
笑ふては喰〳〵女客
持參金鼻のかはりに頰高し
秋きぬとめには見えねど質屋知り

などが揭げられ

莚猿狂句集（天保二年花笠外史校）

には、五代目團十郎の

よひざめの羽織ふるへば櫻かな
夕顏や尼が垣根の洗ひ足袋
豆腐屋が隣で嬉し冬ごもり

や、七代目羈窓唫の

はせつりや鰤につられて七つ起き

などがあつて一寸美しい本だが、秀吟は少い。

誹諧狐の茶ぶくろ、(文化十三年三月うその幽靈著京都東洞院佛光寺上ル町湖月堂菊屋平兵衛版行)には、可なり面白いものがある。

傾城の涙で藏の屋根がもる
先生といふて灰吹すてにやる
作病がわすれて團扇つかい鳥
小男が小男といふ小男は
かり物にしてわがものをかしてやり
なまなかによめぬ書物を飾りけり
丁寧が出口の邪魔になつて居る
やみの夜に小溝を廣うまたぎ鳥
寒垢離が寒さ握つて走りけり
立聞が風鈴の紙持つて居る
傘に挨拶一つ盗みけり
水仙をねぶかとほめて笑はれた
化物かいや按摩めでムります

概して上方の川柳は、節季掛取居候などを經濟の側から皮肉り、こまかな寫實に手器用を見せ、後家や娘を世話にくだいてをかしくしたものが多く、各句作者の狂號も一々あげたものが多い。

其他の韻文　には歌謠の幾分と漢詩とがあるが特筆する程のことはない。殊に漢詩は

贈二小琴女史一　雷首

二八誰家女　嬋娟眞可レ憐
君無二王上點一　我爲二出頭天一

(年は二八かにくからぬ、何處の良家の美し女ぞ、御身定まる主なくば　我婿がねとならましを　と云ふ程の意で王上の點は主卽ち主人のこと、出頭の天は天の頭を出した夫卽ちをつとの隱語である)

同返詩　小琴

扶葉第一女　今夜爲レ君開
欲レ識二花眞意一　三更蹈レ月來

(日本一の美人われ　こよひ御身に靡かなん　このまごころを識らんには　月の夜ふけを君來ませ　と云ふ位のところで、つまり戯れの贈答詩である)

など、素養ある人が讀めば直ぐそれとわかりもしようが、川柳のやうなわかりの早いものとは違ふから、その趣味が民衆化するまでには、まだ大分の距離があつた。

散文　**俳文**　散文中常期滑稽文學の第一位にあぐべきは俳文であらう。就中横井也有の俳文であらう。俳文とは俳句

の心して綴れる散文卽ち俳散文とも謂ふべきもので、苟くも俳句に一角の才ある人ならば、その文は自然俳味を帶びるやうになるが文調俳調をこきまぜて圓轉滑脫の調を創めたのは實に彼の也有が始めである。

也有實名は横井孫右衞門、中京名古屋の藩士で祿二百石を食み、公けの務めも忠實に盡したその餘暇俳道に心をひそめて無上の樂しみとした。家號を半掃庵と云ひその著には、野夫談、小皮籠、羅葉集などあるが就中「鶉衣四卷」がその代表作である。

芭蕉の奥の細道
許六の風俗文選
支考の本朝文鑑

等を先驅にする俳文はこゝに大成せられたかの觀がある。「借物の辨、蓼花巷記、長短の解、百蟲譜」などは殊に佳章として有名だが、尙それ以外の一二例をあげると、

妖物論

世に化物といふ者ありて、多く女となり、兒と現れ、大坊主の取沙汰は聞けど、月代剃りたるは遂に聞かず。夜ばかりいづるは、いかなる故ぞと、或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさよと答へたるは、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にとれば、其藝ことに出來ばえして、武功の人に出あはすれば、思の外の過を蒙る。鬼は伯母に化けて腕をとり返し、狐は叔父に化けて艮の意見を云ふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらんには、其姿をかしからまし。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなす業に落ちて、猫又、河童は、たま〳〵の沙汰なれども、其正體の穿鑿は、樂屋の見えて面白からず。たゞ理窟なき化物といふものこそ、殊にゆかしけれ。抑神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此化物は、百物語に感應して、何と定れる姿なければ、三才圖繪にも載せられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表紙の小双紙に、恥しき姿は止められける。さるに昔今の美婦國色すら、身の終は見苦しく、關守に落ちふれ、檜垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果ては東坡が九相の見たてもうるさきに、たゞこのものゝ終ばかり引幕の蔭をも賴まず、あとに箒も雜巾も入らず、かきけすやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

臍頌

臍を不用のものなりとは、我も誇りし人の數なり。されば他の一寸は見えても、我一尺は見えずとか、世に益なき物くらべせんには、先我こそはさきなるべけれ。そもかの臍は物やは食ふ。素餐の謗もなし。さらば物やはいふ。三緘の警にも及ばず。我世にありて、物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論ぜば、男の乳ばかりこそいかなる益のあるとも見えねど、今更これ等を取り掃はゞ、腹は混沌王の面かゞして世にすゞなきものなるべし。いで、かの臍は、頓死九生のせんかたなきにも、まづとてこれに灸する時は、泉下の首途を留むる例も多し。扨こそ腹のさしも草、只たのめともよみ給ひけん。たとへ、項羽が山を拔く力も、この垢をとれば忽に落つとぞ。痛悔臍を嚙むとは、漢文の故語にして、我朝に人を嘲りては、臍が笑ふともいへりけり。然るにつましき隱居ありて、臍金といふを溜められしより、天津空の鳴神も、このものほしがりて、いかで是抓まんとし給ふより、女子、わらべの氣づかふことは、麝香の狩人を恐るゝにもこえたり。祖翁の故鄕に歸りて、臍の緒に泣く年の暮と懷舊の袖を濡させしは、耳も及ばじ、鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば

今は我身を何に譬へん。されば臍は我下に立たん事かたくとも、我も亦臍の下といはんは何とやらん場所よからず。かれに並ばんとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、然れば上下の品定はやめて、今日より只、彼を謗るまじとぞ。

友とせん臍ものいはゞ秋の暮。

鬼傳

昔は佛の國に住みしが、舍利を盜みし科により、天竺浪人の部になりて、唐土へ渡りしを、鬼も十八のあだし心より、揚貴妃の枕に忍びで、鐘馗といへる髭男に追はれ、かくれ蓑の身も住みうしとや、十郎姫にも引き別れ、赤裸に身代たゝみて、始めて日本へ親に似ぬ子と生れ出でけるとかや。其頃はまだ涙もろくやありけん。朝雄が歌の理屈につまりて、一先分散しけるまではさすがに横道なしと、役の行者の情深く、大船葛城の荷持にも雇はれしに、次第に身持惡しくなりて、煎餅も珍しからずと、芥川の暗まぎれに、鬼一口のあばれ喰に、昔男を泣かせ、それのみならず鈴鹿山の好色、大江山の醉狂、戸隱山に維茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留守にと、世上物躁になりにけるにぞ、神々の怒強く、鰯柊の責道具に驅り出され、遂に煎豆の追放にあふて、娑婆に行む方なくて、冥途の出代に赴き、しばし佛の示に發起せしも衣の似合はぬ生れつきなれば、是非なく業の秤目を習ひ、釜の焚加減を覺え、呵責の荒仕事に獄卒と呼ばれ、地獄の六尺とはなりける。扨こそ癖とられたる天下となりて、萬民泰平を謳ひ、丹後丹波の境なる城跡も、松風淋しく、安達ヶ原の黑塚も、草茫々として訪ふ人なければ、今はたゞ煉瓦に、俤を殘し、大津繪に笑はれて下戸と鬼とは無き世とぞなりける。

今上掲の例文並びに已掲の例文を抽象して彼が俳文の特徴をあげて見ると、

一、故事の引用の多いこと、妖物論には羅生門、生田の森、采女小町、揚貴妃、東坡の九相などが引かれ、臍の頌には項羽が拔山の勇、芭蕉が「故郷や臍の緒に泣く年の暮」の句、古今集讀人不知の「津の國のながらの橋もつくるなり、今は我身を何に譬へん」の歌、「天に二日なく地に二君なし」の古語が引かれ、鬼傳には、印度の舍利を盜んだ鬼のこと鐘馗の鬼退治、十郎姫、朝雄の鬼退散、役の小角、伊勢の物語、芥川の故事、鈴鹿山の山賊、大江山の酒呑童子、戸隱山の山姥、佛説の獄卒、安達ヶ原の鬼婆などが引かれてゐる。だからこれ等の出典を知らぬものにはその興味がないかも知れないが、大抵は一般的なものばかりを選つてあるやうである。

二、その引用は大抵潛引法とも謂ふべきもので「昔〇〇氏の曰はく云々と」とはしないで、平氣で本文に作りこんでキヨロリと澄ました趣がある。(前述引用の箇處について檢すれば明瞭であらう)

三、主想となつてゐるものは閑適の情操である。利害得失の外に出て、死生浮沈の問題には觸れてゐない。「もし鬼が叔父に化けて伯母が狐に化けたらどうあらう」なんてノンキな想像である。臍の爲めに一篇の頌德表を起草するのも、その題目からして滑稽である。

四、揶揄と皮肉に富んでゐる。江戸ッ兒の手きびしいアイロニーも無くさりとて上方の理責めでニタ〳〵笑はす趣もないが、六分の輕快三分のからかひ一分の憎まれ口位な割で流麗に笑つてのけてゐる彼の文致は、江戸上方の中間に居て中京の名ある名古屋の產として正に相應しい地方色を示してゐる。愁の段をきいた隱居が、何のことやらわからないで人が泣けば泣く場かと、無上に鼻をすゝるなども面白いが、「三重の間にホッと息をついて、ホンの體裁だけに汗を拭く」と云ふのも穿つた批評だ。「人の世にある思ひ出、俺も一度はあゝした舞臺で大向ふをヤンヤと云はせたい」などは一寸思ひ寄らぬ皮肉だが「マア淨瑠璃習ふなら二十迄のことだ」と結ぶところには、通人の粹意見柔かいやうで味ひがある

と云つた風だ。

五、輕快洒落な想に富んでゐる。始めの一篇だけをとつても、怪物に「ナゼ晝間出ないか」ときくと「例の子供がうるさいので」と云ふ。猫又、河童の取沙汰はあつても、それがどうして、ナゼ化けたとの穿鑿は野暮だと云ふ。そしておばけの終焉は、關寺小町の哀愁や、馬鬼ヶ原の血の騷ぎもなくてかき消すやうに失せるその點が面白いと云ふ。何れも洒々落々たること奈良茶漬の如き趣がある。

六、思無邪なる矛盾、他の一寸は見えても我一尺は見えぬところから、臍を不用と云はば男の乳が何になると論じ、他の藝事は暗誦するものが達者と云はれるのに、淨瑠璃に限つて、しかつめらしく卷臺に向ふを以て上手と云ふとも論じ鬼と云へば恐しい怪物だのに、行者の荷持や柊の目つき、冥途の出代、地獄奉公などをかしき意氣地なさの數々をあげ古代希臘のジャイアント（巨人）よりも尙親しいものに化したやうな趣がある。

俳文は誰のにしても上述の特色を多少は、そなへてゐるが、也有のそれは確かに一頭地を抜いて、あくぬけがしてある。

小說　當期の小說は前代お伽草紙や兒物語のあとをついで最初は敎訓的な假名草紙が出、その中の世話の寫實が發展して西鶴物となり、それをまねて八文字舍本が出た。これが前半期のあらましで後半の江戸中心期に入つては童蒙を相手にする草双紙なるものが出て、表紙の色が變るに連れて內容も變り

（貞享の）赤本……（妖怪談や合戰記）

（享保の）黑本……（實錄的）

（安永の）青本黃表紙（滑稽小說、諷刺小說）

など云ふ。黃表紙の發達したものが洒落本で、洒落本時代官憲の干涉によつて筆路一轉、眞面目な方向に發達したものが讀本、洒落本の中、遊里情調を拔きにして、をかしみの一面を發揮したものが滑稽本、讀本全盛の後多少その影響を受けつゝも洒落本の後を繼承して今少し耽溺的享樂的な色彩の濃いものが人情本で、讀本や實錄本の細扁を集めて五卷を單位とし、同時に內容も、もつと複雜多樣なものを盛つたのが合卷物である。當期の小說を斯う通覽しておいて、さて滑稽文學作品はと云ふと、先づは黃表紙と滑稽本とに特筆の價値があらう。假名草紙中、如儡子の可笑記、山岡元隣の小扈、などは滑稽分子もあるけれども、作の動機は敎訓諷刺にある。草双紙初期のものは繪卷物の俗化したやうなもので童幼消閑の方便とて面白くは出來てゐるが、をかしくは作られてない。

黃表紙（新群書類從第七、一九五—四六七增補靑本年表、增補續靑本年表續帝國文庫第卅四篇黃表紙百種卷頭幸堂得知氏の解說）は戀川春町が金々先生榮華夢（安永四年版）頃から時期を劃し、全交、通笑、參和、政演等の人々が續出して、黑本中に取材された歷史物までも世話に碎いて洒落のめし、始めは諷刺物多く、中は敎訓物となり遂には敵討物（歷史的）に逆轉し、文化三年までに世に公にされたものは凡そ千五百部に達し、天明、寬政期以後は表紙も二度摺三度摺などにして彩色美しく裝幀も整つて來た。

戀川春町　實名は倉橋格、小島藩士で江戸產れで、家が小石川の春日町に在るといふので、それを粹に連ねて戀川春町と云ふ。文才があつて、畫が上手で、自作の黃表紙は皆な自畫で出した。又酒上不埒の名で作つた狂歌や俳句にも秀

逸が多い。(萬載和歌集には彼が狂歌を澤山載せてある)光格天皇の寛政元年(一七八九)に歿四十六歳。彼は從來の黑本が稚拙見るに堪へざるものを精練して、趣味あり滑稽味ある作品を出し、黃表紙流行の新起原を開いた。「金々先生榮華の夢」はその出世作であり代表作であり又傑作と云はれてゐる。內容は盧生の夢を飜案したもので、目黑の不動へ參詣の途すがら、とある茶店に立寄つて、名物の粟餅が出來る間に、一寸かりねの肘枕、つひうと〳〵とうたゝねして、圖らずも自分一代の運命を夢路に豫見し、餅つく杵の音に目さめるといつた風のもの、明治、幸田露伴氏の作大珍話(露伴叢書四〇一—四六〇)は更に此を現代化した趣がある。

彼一代の作、三十五篇、その中、前記榮華の夢や、くすのきむだいき、悅最負蝦夷押領、あふむ返文武二道、などが名高い。併し「黃表紙」と云ふ作品が持つ概念を前提として作意を立てるところから、此種作者の作品には作家の個性の目に立つやうな特色を見出すことは出來ない。で、今他の作家をも一通り見渡して後、「黃表紙の特徵」と云ふに一括してその梗概を云はうと思ふ。

明誠堂喜三二　(藤岡作太郎氏近世小說史四一七—四一八)本名は平澤常富と云つてもと秋田の藩士で、輕文學の多能家で、韓長齡(天壽)の名で狂詩を、月成の名で俳諧を、手柄岡持(又は淺黃裏成)の名で狂歌を作り、(外に龜山人、道蛇樓、鹿阿記、虎耳崛等の別號がある)つひには、江戶に出て俳諧戲作を專業とし光格天皇の文化十年(一八一三)に七十九歳で亡くなつた。「鼻峰高慢男」はその有名な作で、鎌倉上野屋萬右衞門、愛子萬石の鼻が低くてまるで碁石を一つくつつけたやうだから、方々の醫師や加持や祈禱にかけたところ「高慢な心を起させたら高くなる」と云ふことなので、金にあかせて人に賴んで萬吉のすること爲すことを褒め囃させたので、しまひには途轍もない高い鼻になつた、これはちと高過ぎると云ふのでこんどはそれを低くしようとて、又々天狗さまに賴んで色々のせりあひに、いつも彼を負けさせ、しくじらせ、やうやくにして鼻人並となる、と云ふ筋である。その他

親敵討腹鼓
鐘入七人化粧
長生見度記
文武二道萬石通
一粒萬金丹
珍獻立曾我

なども佳作と云はれる。其他(藤岡博士のあげられたも)の天明五年作の氣散次物語と、同七年作の龜山人家化物とは自分のことを脚色したもの、又、讀本には古朽木、おらく物語の作があり、隨筆には後昔物語の著がある。一代の述作凡て三十六篇その中、おらく物語などはまだ刊行されないで寫本として傳はつてゐる。

市場通笑　江戶、日本橋通油町の骨董商で、實名は寧一、俳名は橘雪、通稱は小平二、その作は、量の多いことゝ各篇多くは敎訓物であること(敎訓の通笑など云はれた)が目立つ。安永八年から天明に亘つてはその作品の最も多く出た時で、天明の末から、やゝ下火になり寬政二年以下は中絕、同六年、七年、とそれから享和二年に各一部宛出てゐる。皆で六十一篇大抵は黃表紙で他の述作は少いやうだ。文化九年(一八一二)に七十四歳で沒した。生涯獨身で通し「市中の仙」と稱せられた。「近頃島めぐり」は小林の三郎平が正月の初夢に朝夷に連れられて島巡りをすることを綴り、

「矣は日本の島ざかへ千倉が沖と云所だ、これから島々の新道、裏町、まつ方、己が廻つた時の道中記をやりませう」

「忝茄子のしぎ燒」

と云つて始めに渡つたは手長島、手が長いので居ながらにして用を足し、一日の中立つのは小便をする時だけ、飯時には棒のやうに手が陳列されてまるで見附の内を祭が通るやうだし、遊女町を通つて向ふがはを歩いてるてもつらまへられる。次は足長島、着物は一反で出來るがパッチは三反入る。女房は裾切のしないのだけが一得で、大風の時道をあるくに轉ばぬ先の杖代りに太鼓を持つて出る。次は小人島豆粒のやうな小人原が三郎平が歩くと「何だか臺つて來た」など云ふ。泊るにも家が小さくて、入られず「鰯は日本の鮪の如く、なまあみは花鰕にして、大平へ一つ盛り幾ら食つても腹には溜らず、漸々と酒二三駄働き、皆飲でも三升に足らず、蒸籠も二荷計一度に食つてもあやめ團子の樣で腹にも溜らず」と云ふ調子、次には「腹に穴のあいた人の棲む國」次は「女護島」と一巡りして江戸の湯島に引上げると「矢張江戸はよい所だ」とよろこぶ。つまり都市生活讃美殊に江戸禮讃的な想を盛つたものだ。その他彼の作として有名なのは

憎口返答返し
本の能見世物
間違狐女郎買

などである。

芝全交　は實名（山本藤十郎と云つて又江戸生れ元は大藏流の狂言師だつたが性來の滑稽洒落遂に身を戲作界に投じ一代の作凡て廿九篇で殊によく當つたのは大悲千錄本（天明五年版）である。千手觀音樣近頃不景氣とあつて手の損料貸を始め、手一本の貸料金壹兩とふれこんだ處、大寺代地に住んで居る面の皮屋千兵衞といふ山師早くもこれを聞きつけて、大まい千兩を拂つて一手に貸りしあ、澤庵漬の大根のやうに、繩でつるして手貸屋を開業）

一、鳥渡かし　代三十二文
一、一日一夜　代銀三匁
一、一ヶ月　代金二兩
一、一年切　代金拾兩
一、佛の御手に御座候間千手觀音御つぶしの義は御容赦の事
一、御祝儀御貰ひなされ候儀貸方に於ては一切かまひ申さず候得ども其儘御懷中にて御握りつめは大悲の誓にも洩れ候義に付相當の御施行なさるべく候事
一、御心中などに御用ひ遊ばされ指一本たり共不足致し候節は決して受取申間敷候事
右之通相定申候以上

月　日

それと聞いた手無し連中我先にと爭ひ競うて借りに來て千兵衞の店は大繁昌、二本の手では廻り兼ね、奉公人手々入所

へ申込んで、てれめん貞兵衞といふ手代をおいて帳づけをさせる。茨木童子は初一發に借りたが佛の手故毛むくじやらになつてゐない「よし〳〵」と云つて男を磨く神田與吉が人形に毛を植ゑるのを賴んで植ゑさせたはよかつたが、當節猪の毛が不足で鹿の毛を植ゑたので存外やさしい手になつた。

一の谷の戰に岡部吉彌太に手を斬られた薩摩守忠度は右の手を借りるつもりで間違つて左の手を借りたので「さゞなみや」と歌を書いても左文字になつて書盡屋も大きに手こづり「後にはなんまみだぶつ〳〵で何處でも此を恐れけるとぞ」。手のない女郎が借りに來て折角客を引きとめても、朝になると「おいらん手を取にきいしたよ」と禿が云ふので客が感づいて手を切るものだからしまひには一割引にして月極で借りることにした。無筆の人が借りて手紙證文を書かうすると佛の御手故梵字ばかりになつて埒があかず、やむなく爪に火をとぼして臘燭の代りにする「是手燭の始めなりと云ふも久しいやつサ」

最後、勢州鈴鹿山の賊退治の爲め勅命によつて坂上田村麿發向となり、此には是非觀音の御手を借りようとて、久々の御無沙汰御わび旁々參つてその由をたのむと、觀音語るに實を以てし「さりとて外ならぬ其方故千兵衞より取戻して貸してやらう」とあつて、早速その段取りにせられる。さて返して來たその手を見ると

「女郎へ貸たのは指が失り、握りこぶしで返つたのは喧嘩でもしたか痕が出來てゐる。鹽屋へ貸たのは鹽辛く紺屋へかしたは青くなり、下女へ貸たは糠味噌臭し、飴屋のはネバ〳〵する。飯焚のは凍痕だらけ、舂屋へ貸たはまめだらけ皆少しづゝ損所が出來たが、員は千本整ふたり」

それをいよ〳〵借り受けて、今日立つと云ふその日には、觀音樣も見送つて

「ナニ田村丸どの御身鈴鹿の鬼神を首尾よく退治召れたなら、損料をつけ、千本の手を必ず揃へてお返しあれ」

「いふにや及ぶ大望成就した上では、兩に八本の損料を以て御手を千本お返し申さん」

「先夫迄は田村どの」

「觀音薩埵」

「さらば――手手てん〳〵〳〵〳〵ててててててん〳〵手手手手手手手手手手手手、手手手手手、手手手、てててててててててててててててててん（「て」が卅字「手」が廿三字ある）

「ハア此手の字がめの字なら藥師どのへ進ぜたいものぢやが。」

此作は非常な評判をとつたものと見えて「黃表紙百種」（三九二頁）には左の奧書がある。（幸堂得知氏の）

此本は一冊物（漉返し五枚）袋入にて出たるものなり名作二十三部の内にて第一等の出來なるべし大當りにて板の潰れたるより世の中に至つて少なく嘉永年中關宿の商人が一部秘藏せる事を下谷上野町なる京紺屋の主人（當時の藏書家なり）が聞及び是を讓り受んとて同所に至り商人某に逹て所望せしも金錢にては讓難しといふに其時持合せたる煙草入の緒〆に付けたる珊瑚珠を取出し是と交換したりといふ其後之を借て寫したる者密に再版したりと聞しが今稀にあるは此再版ものなるべし此作は纔に五枚物なれど夫々手の遣ひ道を分け首尾全くして能く行き届いたるものなり。

神田の與吉といふは其頃名高き俠客なり本業は木偶師と聞及びぬ。

其他遊妓寔卵角文字（寛政二年版）鼻下長物語（同四年版）同後編白髭大明神御渡申（同五年版）年寄冷水曾我（同年）等何れも好評、又芝全交智惠の程（天明七年版）全交法師常々草（寛政六年）は自分を取材したものである。

萬象亭　本名は柱川中良と云つて家は幕府の侍醫であつたが平賀源内に師事して狂歌戯文に筆を執る。竹の杖爲輕、森羅萬象天竺老人、二世風來山人など雅號がある。その著紅毛雜話、西洋奇譚、萬國新話、桂林漫錄などは直面目な述作で、又源平藤橘の雅號を署して淨瑠璃をも作つた。黄表紙の作は天明二年頃から寛政七年頃までに十幾種を出したがその特色は純然たるユーモラスの想を盛つた點に在る。これまでの作にはとかく淫猥に墮したり、洒落を弄したり、教訓を寓したりしたのを彼は純をかしみを想材として上品に作つた。文化五年（二四六八）五十五歳を以て逝く。彼が學は和漢蘭を兼ね、無慾無妻にして淡白瀟洒、その筆を遣るに、師の源内よりは寧ろ喜三二や全交の先輩にまねたあとが多い。その名作「夫從以來記」なども春町の楠無題記喜三二の長生して見度記の模倣であることはその序

「戀川春町先生の楠無題記續て喜三二先生の長生して見度記の紙屑なりとも拾はばやと嘘を月池の太子堂に夜通せし驗はあるべいもの夢中に授かる夫從以來悪い所はお授けなされし太子様のせいにするでも無す

と云ふによつても知られる。内容も楠無題記と似たもので唯彼の未來記に對して此は現在記たるの相違があるだけである。

「わい〳〵天王一萬八千年に當て草双紙は大人のよむものとなり正月三日會初ありてそれより月々會讀あり。四書五經は子供のなぐさみ本となり朱喜牧、畫艸莊子うりあるく」

と始まつて、芝居は見物人が狂言をして役者が却つて見物人となり、傾城中の町では琵琶琴和琴などを鳴して居る。色町は夜よりも朝店が賑ひ、子供は辛いものを好くやうになつたので

「かゝさんや、とん〳〵唐がらしを買て呉ねへお母さん」

「そんなにやかましくねだり事をすると柱へ縛り付て饅頭を食はせるぞ

など云ふ。乞食と一般人とが應答は敬語顚倒して、乞食小屋へ雪駄直しを賴みに行くのに

「今日旦那途中でうら付の鼻緒をふみ切られました何卒御覽の上御直し下されましおいそがしゝば御弟子中でもよう御座ります、一寸御賴みに伺候致しました」

「おし付弟子共をしんぜませう此頃は別して急がしい上に昨日富が落て大取込で御座るてや

太物屋も高くとまつて客など相手にせぬ、客が何か物を買ひに來ると「通らつせへ」と睨みつける

「何だ褌が買たひ、イヤハヤ不作法千萬モウ一言云て見やれ」

「何卒左様仰せられずにお賣下され丁稚衆おとりなし賴みます」

神も佛も一つになつて名號も祝詞も神道佛教のゴツチヤになり「神明地藏大菩必神本社位牌堂の建立勸化にあるく中臣の和讃に曰く「奇妙頂禮神明はたちばなのをどあかきが原に神とどまりまして衆生の濟度をみちびけり願以此功德はらひ給へ清めて言ふ」

「只今の御心さし一切の諸精靈小男鹿のハツの御耳をふりたてゝ聞しめせと申す」

女仇討の代りに男仇討が流行し、座頭の金借りが金貸の所へ辨濟遲延の斷に來て

「金一分に三兩の利で官金を借りましたはエイカ夫で返されぬといふやつだはエイカ、それだから詑言に來まするはエイカ」

と云ふと、貸主が却つて「どうぞお靜かに」と云ふ

下肥も當節は町家が平身低頭で葛西まで肥取の迎に舟で行つて平身低頭でやつと汲んで貰ふ。

「大三十日に掛取來らず借方は財布持をつれて拂ひにあるくゆたかなる代ぞあり難き」

「昔は代物をかした上に代をばやつばり貸した方から取に廻つたさうだがそんな事が有物か、どうやら嘘らしい事だぞ

「モウ五軒拂ひに廻らねばならぬ掛取があちらから來て來れはう味いものだ」

とある。其他面向不背御手玉（天明六年版）も名高い。

唐來三和　本姓は加藤氏もとは武士の出なのが、書肆蔦重の弟分になつて本所松井町に入婿し泉屋源藏が通稱のやうになつた。家業には似ぬ篤實な人で、蜀山人について狂歌を學び、洒落本黄表紙合せて十餘部を出した文致も脚色も巧であつたが、馬琴が作者部類には文章よりも趣向に秀いでゝゐたと評してある。文化十二年（二四七五）沒、六十七歳。天下一面鏡梅鉢（寛政元年）は當時白河樂翁公が善政を敷いた事を稱へたもので彼一代の大當りをとつたものだと云ふ三卷物で

上之卷　末白川の浪風も治り靡く豐年の國民
中之卷　天下泰平を並べ行はるゝ文武の兩道
下之卷　月額青き聖代も有り難い日本の風俗

「すべらぎの御代さかえんと吾妻なるみちのく山は云に及ばず其外佐渡の金山燒出したかどうしたか諸國へ金銀降る事三日三夜にして諸人よろこぶ事大方ならず

「直に灰を吹分て極印までうつて有金がふるとはハテナア」

「坂は輝る〳〵鈴鹿は曇る佐渡の金山かねがふる」

夜は戸を鎖さずを文字通り「こんな戸は邪魔になる」とて打ちこわし、乞食の貰ひが多くて

「今日はたつた百兩十二文もらつた夜食の菜に鯛を一枚買て食はう」

など云ひ、四谷と品川へ牛馬を放つやら、拾ひ物の處分に困るやら雨は十日目〳〵に降るので下駄も傘屋もちと不足顔だと云ひ、風は五日〳〵に吹くので自身番はその時日だけ火の用心に廻ると云ひ凡て頑徳的な滑稽で中には「佐渡の金山金がふる」だの「金に重みが數々ござる」など俗謡をもぢつた句が所々ある。

其他の作家　として山東京傳には江戸生艶氣蒲燒を始め多くの優秀な作品があり一九、三馬、蜀山人にも面白い作があるが、それ等各自の特色は黄表紙以外別に他の方面にあるから今は之を省く。吐等黄表紙の挿畫表紙畫は時に著者自身に書いたのもあるが（春町一九，京傳）他は當時浮世繪の名家清長、政演、歌麿、政美、等が書いたので文章は別として繪の方から見ても價値あるものも少くない。

黄表紙の特徴　江戸文化は京阪の文藝復興に後れること約百四十年で、文字の教育ある士は町人としては少なかつた。隨つて市民文藝としては川柳狂歌草双紙のやうな幼稚で簡單なものが始めに出た。それがだん〳〵教養を積み江戸ッ兒氣質が確立するに連れて淡白瀟洒洒落となり元祿享保以降、安永天明となつて泰平がつゞくに連れて市民にとつての二機關とも謂ふべき吉原と歌舞伎とが發達し、粋とか通とか云ふ人生觀照の新しい標語が出來、一方に於ては今日のやう大解放な秩序的な文藝教育の途が開けてない（たまに師についたり指導を受けたものがあるとしても）結果、多くは指導者なくして色々の書物を耽讀し、その書の所見と當時の時勢とに醸酵した表現慾は何等かの形で出口を求めたに相違

ない。彼等の多くは文學の本質に味到せず、作家の眞の社會的地位を自覺せず、唯その時々の世評に生きて何がな變つた趣向で讀者をアッと言はさん術をと工夫した。江戸に太田蜀山人だとか石川雅望と云つた風の雜學者としての大家の多いのもその爲めであらう。狂歌川柳の流行したのもその爲めであらう。江戸に洒落本が出たのもそして今又この黃表紙が盛行したのもその爲めであらうと解する。つまり

江戸の文化の比較的後れてゐたこと

花街と歌舞伎の發達流行

江ッ戸兒氣質

一體の學風が雜學的なこと

が江戸文藝を產む有力な導火線であつたのである。爾餘のものは儲置き、黃表紙だけについて愚見を述べると

一、其構想には史實傳說の敎養を根底とすること、金々先生榮華の夢には廬生の夢が引いてあり、楠無題記を作るには少くとも太平記や楠公三代記位は見ておく必要がある。(見德大師の未來記を平等院で開いて見ると云ふのは正成が四天王寺で聖德太子の未來記を捧讀したとあるそれをもぢつたものである)義經記以來の義經物、曾我物語的な曾我兄弟物などは殊によく取材せられ、その他どの一篇をとつても何等かの史實傳說から想ひついたあとのあるものばかりである。

二、內容は洒落、をかしみ、くすぐり、皮肉が主である。

洒落の多いことは殊に目立つ、「世話をしてくれの鐘」「忝茄子のしぎ燒」「嘘を月毛の太子堂」まづそれで用はざつと隅田川」など云ふ。をかしみも各篇の通想であつて、本來悲劇的な道成寺までも茶化して安珍淸姫は無事に一しよになつて館を駈落ち道成寺へ行つて鐘の中に隱れてゐると後から父が追うて來ると山には「ぢぢい禁制」とあつてエイままのかは躍つて歸れで面白をかしく道成寺を踊ると云ふ風に茶化してしまふ。(萬象亭が天明六年の作大笑止老毛鐘入)義經が秀衡に身を寄せると秀衡が「大食の龜井片岡伊勢駿河、お負けに辨慶ときてゐるから第一米代に困る」とこぼす。と云ふこれ等は川柳で

小便もせずに平家は船に乘り

と云つたやうなちやり方だ。併し中には無理に笑はさうとしたくすぐりも少くない。最後にあげた萬象亭の天下一面鏡梅鉢の如きその當時と今と時勢のちがひもあらうが夜は戸を鎖さず道遺ちたるを拾はず、五日に風ふき十日に雨ふるを唯概念的に引いてそれに誇張の衣を着せただけのことである。併し黃表紙が含む皮肉には他の姉妹文藝に見出されない鋭どさがある。珍玩器什に浮身をやつす隱居連をひやかして「何をしてもわびつきになり」と云ひ、官金費消、高利貸附の私曲をば借手の座頭の方から澁滯の申分けを吐鳴りつけると云ひ、通人氣取りを冷笑しては「人王三萬三千三百三十三代に當つて……大通の羽織長きこと三尺八寸五六分紐はかゞとへとゞき裏襟白く刷毛先は釣竿の如く布は居風呂の箍の如し」など云ふ。

三、坊巧で多いのは秀句についで頓降法である。始めは殊勝に古詩古歌を引いてゐるかと思ふと、突然露骨な平易な俗に落して來る。「すべらぎのみ代さかえんと吾妻なるみちのく山は」と萬葉で始まつて「云ふに及ばず、其外佐渡の金山燒出したかどうしたか諸國へ金銀降る事三日……」と云ふ。「地藏菩薩は六道の道に立給ふが兎角今はあつさりと粹にして物事を險約にするが流行ると思召し六道の道を四筋減して目黑と品川とへ別るゝ二筋の道に立給ひ(當世大通物買帳)など云ふのがそれで此に次いでは地口、語呂合に類するもぢりである。

佐渡の金山金がふる（あひの土山雨がふる）
金に重みがかゞ〳〵ござる（鐘に怨みが數々ござる）
徳若に御南無ざいとは（徳若に御萬歳とは）
たちばなのをどあかきがはら（橘の小戸あはぎが原）

などは當時の作者讀者共に悦んだ句と見える。其他主人が客より應柄な太物店や、乞食が素人よりも威張る雪駄直しや掛取られが掛取りを追つかけたり、町屋が下肥の舟を迎ひに行つたりするやうなのは矛盾の世相を諷したものか若くは「かのにかうした價値顚倒を現じたらどんなにをかしからう」と云ふところを覗つたものだ。要するに世の中を變體假名のやうに觀て人でも物でも直ぐその滑稽の一面を見出さうとするのがこの黄表紙作者の創作態度である。吾々はこれを讀むとき何だが岡本一平氏の漫畫に近いユーモアを感ずる。

（尙弘化元年から慶應三年までの黄表紙は新群書類從第七、五五七―五七七に草双紙書目として六百六十七種あげられてゐる處から察すると黄表紙は全盛期以後も盛んに發刊されたものらしい）

滑稽本　とは滑稽小説とも謂ふべきもので、凡べての滑稽的な作品をもつた本と謂ふ意味ではない。その名目は何時誰が始めたかは知らぬがそれが文壇の一地歩を占めるやうになつたのは一九の膝栗毛や三馬の浮世風呂が出てからのことで、滑稽本と云へばその妙趣も此等二三の書に盡きて居らうと思ふから以下專らその書のことを紹介しよう。

道中膝栗毛　は十返舍一九の傑作で、江戸の神田の八丁堀の借屋住居の風來者、彌次郎兵衞、北八の兩人が始め江戸から伊勢參りをし、それから京に出て難波に行き更に讃岐の金比羅に參り、踵を返して中仙道に出て木曾のかけはし草津の出で湯、と至るところ滑稽の數々を演ずると云ふ趣向で、始めは、かた〳〵伊勢詣り位でおくところであつたのを豫想外の好評で作者も出版者も膏がのつてつひ續篇に續々篇とあとを足したものらしい。今その版行次第を見ると、

東海道中膝栗毛
初編　享和三年（二四六三）
後編　享和三年（二四六三）（苟藥亭主人の序）
三編　享和四年（文化元年）（二四六四）
四編　文化二年（二四六五）（喜三二の序）
五編　文化三年（二四六六）（龜山人蘭衣の序、瀨芳園草の題詩一篇）
五編追加　文化三年（二四六六）
六編　文化四年（二四六七）
七編　文化五年（二四六八）
八編　文化六年（二四六九）

金毘羅參詣　續膝栗毛
初編（上下二卷）文化七年（二四七〇）
宮島參詣　續膝栗毛二篇

木曾街道　續膝栗毛七篇文化九年(二四七二)
從木曾善光寺　路道續膝栗毛上下二篇文化十三年(二四七六)
善光寺道中　膝栗毛上下二篇文政二年(二四七九)
上州草津温泉道中　續膝栗毛上未詳中文政三年(一四八〇)の自序第十一篇中卷にあり、十一篇は東海道中膝栗毛よりの延卷數で、草津温泉道中としては中卷にあたる、尙上卷の始めには六樹園の序がある)下文政五年(二四八二)

此書の滑稽本として優れた點は

一、作者自身の生活態度に原因する。

發端からが抑々作者の生活記錄とも謂ふべくその日ぐらしの彌次郎兵衛が柄にもない食客をつれ込む。その食客と云ふのが北八で、由ある家の娘お壺と行きやたりばつたりの夫婦、親のゆるさぬ同棲する中、妻は病氣で目がまはる

北「おつぼヤアイ〳〵

となりの亭主「おつぼさまとはだれの事だ、モシ爰のかみさまはへ

いも「コレこの目をまはしたがかみさま

となり「ハア彌次さんおめへのおかみさまか

彌次「アイわつちの女房のやうでもあり、又ないやうでもあり

となり「ハア、きこへた、北八さまのかみさまか

北「アイ、わつちのかゝあのやうでもあり、又ないやうでもあり

となり「マアなんしろどつちのだかしれないおかみさまヤアイ〳〵

いも「コリヤつめたくなつたもふいけねへ

北「エヽいぢらしいことをした、彌次さん醫者をよびにやつてくんなせへ

となり「わたしが元宅さんでも呼んで來てあげませうか

彌次「その次手にお寺へもいつてもらひてへな

それから寺方が來る、親が來る。棺をとつたが首がない。「首のない娘は產んだ覺えがない」とて親が承知せぬ。よく〳〵見ればさかしに入れてゐた。さて葬禮も無事終了、いつそ緣喜直しに伊勢參りでもしようか、それよからうで友だちから、金若干をかりうけて、いやな心もあらたまの年立ちかへるきさらぎなかば、狂歌一首のかしま立

難波江のよしあししとも旅なれば　おもひたつ日を吉日にせん

とあるが、一九自身の出立あんばいも此と相去る遠からぬものであらう。(傳へ云ふ彼この記の材料をあさる爲め旅立つあした蚊帳を釣つたまゝにしておいたが、ながの道中を終へて歸つて見ると、蚊帳は以前のまんまつらされてあつたと云ふ)

一九の傳記を讀み、飜つて彌次郎兵衛北八の所作言動をしらべると、どうも此二人は一九の分身だと思はれる。

二、旅そのものゝ實歷談たること。

旅の恥は搔き棄てと云ふ諺をさながらのノンキな旅行をして、而かも後には幾分意識的に種とりの考もまじつて多々益益の氣味がある。彼自身このことをあかして木曾街道膝栗毛の序に

去年此街道を通行せしとき横川の御關所を過て江戸よりかへれる萬歳と道つれになりたり其夜輕井澤の日野宿に同宿して酒興の上飯盛におだてられ此萬歳柳骨利より烏帽子素袍を取出し德若にとうなり出して舞たりしは水無月廿九日の夜にて予も珍敷覺たりき（この事次の五編にいだす）

それより諏訪の檜物屋にて針筥の間違ひ（此所にて、めしもりの事をはりばことといふ是も五編目にくはし）福島の奇應丸にてお屋敷を取ちがへ大へこみにへこみたりし事（同上）

大井泊の夜いまだ明ざるに宿を立て十三峠にさしかゝりたるに浪人體の人と道づれになりておどしかけられ。此方にも弱を見せじと心遣ひたりしおかしみ（此卷中に彌次郎北八が太田どまりの趣向とす）

其外御嶽伏見の遊びのおもむき垂井の驛にて月水流しの藥を呑て腹を瀉せし始末、今須の茶店には馬の矢物二階より出たる噺予が旅行の身の上にありし事亦目下見聞たる事でも有の儘に此編の趣向とし今年の新版とこちつけたるものならし。

と云つてゐる。所謂太田どまりの一件とは

「サアござらつせい。ゑい湯だに

ト、これより二人も風呂へ入しまうと勝手より膳も出て、したくしまひ互に打くつろぎて、

涙人「ナントきさまも最善つまらねへ身の上だといはれたが、幸ゐやつとうも出來るとのはなし、物は相談だが、よい養子の口がある。どうだそこへいく氣はねへか

彌次「ハイわつちらがやうなものでもかへ

涙人「ナ、サきさまの見こみは眼つきが、きよろ〳〵して、どふか小盜でもしそふな顏つき、末たのもしい。だめて酒もなるだろう。

彌次「さやうさ酒は大好物でござりやす

涙人「そりやよいことだ。しかし酒も醉て寢るやうじやァつまらねへ呑ば呑ほど根性骨がふとくなつて、せうせうは、酒亂で、すつぱぬきでもするやうな酒だと云分はねへに

北八「それもしかねはしやせぬ

涙人「それはいよ〳〵たのもしゐ、おしいことには、小氣ものと見へるが、それで膽玉がふとくて、横道もので、人を糸瓜とも思はぬやうな氣性だと、直に相談が出來る事だにナア

彌次「ソリヤとんだお好みだが、さきは何でござりやす

涙人「しれたこと、どろぼう商賣だ……」

と云ふ處である。

三、「旅の恥はかきずて」といふ諺の具體化。「旅の恥」の具體化は隨所に見られるが殊に一九の才氣を窺ふべき箇處を左に。

方廣寺大佛詣で

彌「アノこうしてござるお手のひらへ、疊が八疊しけるそうだ

北「たぬきの金玉と同じことだな

彌「もつてへねへことをいふもんだ。アノ鼻の穴から人が傘をさして出らるゝと

北「ソリヤまだしも人がさして出るからいゝがおらがほうのほうだら八が鼻のあなからは、瘡がひとりでにふ

き出したは

彌「馬鹿アいふなおうしろへまはつて見よふ。チャお脊中に窓があいてゐらア

北「あれは大かた汐をふくところだらう

彌「鯨じやアあるめへし

北「ヲヤ〳〵みんなが柱の穴を、くゞつてゐるは

彌「ほんにこいつは奇妙々々

ト、御堂の柱のもとには丁度人のくぐるだけ切り抜きし穴あり。田舍道者ども、戯れに此をくゞりぬける。北八同じく、くゞり

「コリヤおもしろへ、併し、おいらはくゞれるが、彌次さんは、ふとつているから、ぬけられめへ

彌「おれだとつてナニこれが

と北八をひきのけ、四ツばいになつて、柱の穴へからだ半分程は入かけて、一向に抜けられず、あともどろふとするに、脇差の鍔が横腹につかへて、痛みこらへられず、彌次郎兵衛顏を眞赤になし、

「アイタ、、、コリヤひよんなことをした

北「ヲヤどうした、ぬけられねへか

彌「コレ手を引ッぱつてくりや

北「ハ、、、こいつはおかしい

ト、彌次が兩手をぐつとひつぱる。

彌「アイタ、、、

北「よはい男だ、ちつと辛抱すればい、

彌「あとのほうからあしを引てくれろ

北「しやうち〳〵

トうしろへまはり、兩の足をとらへ

「ヤアゑんさア〳〵

彌「あいた〳〵

北「ちつとこらへなせへよつほど出かけたよふだヤアゑんさア〳〵

彌「ア、まつてくれ〳〵腰骨がおれるよふだ。コリヤ矢張、前の方から引出してくれ

ト云ふ故、北八前へ廻り、兩手をとらへて引く

「ヤアゑんさア〳〵ソレまたこつちへよつほど出て來た

彌「ゴリヤたまらぬアイタ、、、北八これではいかぬ初手のように又あとへ引もどしてくれ

北「エ、いろ〳〵なこと云ふ

ト又うしろから足をとらへ

「ヤアゑんさア〳〵

彌「まて〳〵〳〵コリヤどうでも前の方から引いて貰はう

北「エ、そんなに前へまはつたり、後へまはつたり、引出してはひきもどしいつまでもはてしがねへコリヤい

丶さんだんがある
そばに見ていたりし參詣の人をたのみて
北八「モシどふぞこつちらから、おめへひつぱつて下さいませ、わしがあつちへまわつて、あしをひきずり出しますから
彌次「馬鹿ア云ふな、兩方から引張つては、出る瀨がねへ
北「出る瀨がなくても、兩方から引張ると、前へまはつたり、うしろへまはつたりする世話がなくていゝわな
參詣の人「イヤ兩方からあのさんのからだを引のばしたらツイ出られそふなもんじやろぞい
北「コリヤいゝことがある酢を一升も買て來て彌次さんおめへに呑せよふ
彌「なぜ酢をのむとどふする
北「ハテ酢をのむと瘦るといふことだから
參詣の人「ハヽ、、そないなことといふたて、いんまの間にあふこつちやないさかい、こうさんせ、どこぞへいつて槌借つて來さんして、つむりをあとの方へ打こまんしたがよいわいの
北「なるほど、こいつが早い理窟だ、併しそれでは命があるめへ
參詣「されば、そこはどうも請合れんわいの
ト此内田舍道者一人「コリヤハア氣の毒なこんだァのしわしはハア遠國もんだから、あにも知り申さねへが、ふとの難儀さつせるこんだア愚意なういつて見ますべいか
北八「どうぞ、あの人の助かることがあるなら云つてきかして、くんなせへ
道者「ハアそれだアからのこんだアよあんでもあのふとの足のささきさを切割つせへて山椒粒のうはさまつせへたらふとりでに、つんぬけべいのし
北八「ハヽ、、そりや蛇が女に見こんだ時のことだろふ。どふせそんなことであらうと思つた
參詣「コリヤわしが智慧貸そわいの、何じやろと、あのさんの體を和らかにして引出すがよかろさかい、こうさんせ、土砂とて來て、かけさんせいの
いなかもの「すんだら土砂のウぶつかけずと、一ばんの桶さァ買てきなさろ、手足をちとべしおんまけたら、はいるべいのし
彌次「エ、いめへましいことをいふむだ所じやアねへ、北八はやくどうぞしてくれぬか
北八「まちなよハヽアおめへ脇差の鍔が横つぱらへこだわつていてへのだ
ト手をさし入てひねくりまわし、やう〳〵脇差を拔いてとる
彌「いかさま、これでどふかくつろぎがあるよふだ
北八「トレ〳〵イヤ時に、どなたぞ前の方からおし出して下さいませ、わしが足を持つて、こつちへ引出しますから、ヤアゑんさァ〳〵
參詣「ソレ出るわいの、まちつとじや、いけまんせ
彌次「ア、ウ、、、
北八「ハヽ、、出るやつがいけむから大わらひだ
彌次「ア、いてへ〳〵

「しめたぞ、ゐんやア〳〵ソリャ出たぞ〳〵

ト、やう〳〵のことにて、引出せば、彌次郎は、大あせをふき〳〵、ほつとためいきつきながら

「ヤレ〳〵ありがてへ、コリヤどなたも御苦勞でござい申した。おつちゃ伊勢の泊で產をしやしたが、產むよりか、產れる身は、よつほとせつねへ、コレ着物が、すりきれて、あばら骨が、今にびり〳〵する。

傘さして出るお鼻より柱なる　あなおそろしや身をすほめても

其他東海道雲津の驛で蒟蒻の燒石をいし〳〵(團子)とまちがつてカブリとやつてアイタ、の騷ぎや、京の見物の道中で、梯子賣をひやかして、とう〳〵買ふことを餘儀なくされ、旅の荷物に長梯子と云ふ奇體なはたごや入をし、素人狂言を始めて、相手の亭主丸鐵やその娘に怪我をさせて詫狀を入れることや、二人の脇差を一人でさして大小二本と見せかけて、さむらひ氣取で威張つてるのを後からすつぱ抜かれたり、風呂に入るのにゲス板なしに入つて足裏を燒痕し、一廉新發明のつもりで、下駄ばきで入つて、興に浮かれて地團駄ふんで、歌ひ舞ひ踊りして風呂桶の底拔騷ぎを演じたり、至る處間拔けた失敗を描いてゐる。殊にをかしいのは詫狀の文句で、京で宿屋の丸鐵に入れたものは

一札之事

一、我等此度ひらがな盛衰記淨瑠璃之内、安壽の役相勤候所實正也然る所梅がえ無間之鐘相撞候節其金是に羅有趣申之、打替之鳥目投出し候迚梯子爲辷候故丸鐵どの陰囊御釣上被成並貴殿息女え怪我爲致候段全右梯子鴨居へ打掛候より事起候趣預御腹立無申譯段々誤入候所御了簡被下忝存候然る上者已來御宿御無心申候共梯子杯決而持參致間敷候爲後日仍而如件

月　日　　當人　彌次郎兵衛

今一つ善光寺道中に同宿のものと褌をとりちがへて人のを洗濯したことがわかつて、自分のも洗つてくれよと相手に要求して却て立腹せられ、亭主丹九郎の挨拶で又々詫狀「彌次郎も旅のことなれば、どふでもよいといふ心なれば、平氣にてきせるの雁首に、たばこつきで此判にするその文言

一札之事

一、貴殿褌を我等心得違にて洗ひ候に付我等の褌をも貴殿洗ひ可申旨理不盡申懸其上突倒し御怪我致させ候段不埒に付御詫申入候處御承知被下忝存候然る上は以後我等褌に付貴殿へ少も御苦勞相懸申間敷候爲其一札仍而如件　　證人　北八

四、無邪氣な皮肉　一九の皮肉には、ちつとも嫌味がない酒々落々たるアイロニーで讀む者は勿論、當の主人公や相手すらも呵々大笑するものか、少くとも破顏一笑を禁じ得ない趣がある。今その一例として由井から興津の道中馬子と客との問答を彌次と北とが聞きながら興がつて徒步で行くと云ふ處をあげると

馬「……きんにより、うらが府中から江尻へ三百でのせた旦那が、お江戸衆で、ゐい旦那よ、長沼迄來ると、その旦那がいふにやア、江尻まで三百じやア安いから、酒手を二百增してやらふ、そのだい酒は別にこちから買つて呑ませるとて、吉田の的場でたらふく酒を、振廻つしやつた。それから、又いはしやるにやア、コリヤ馬子にしやア一日おまを引て、あゆんで草臥たろふ、是からうらがおりて、にしを此おまにのせよふといわつしやる、コリヤ、ハア、あんたるこんだ、うらアやアだといつてもきかない旦那よ、ぜつぴうらにのれと興津までおまア取のだが草臥たらふから、おまアとつたぶんでだちんやろふと、又二百下さつた。あんなゐい

旦那はめつたにやアないもんだ

ト話のうち、此馬に乘つて居る旅人、馬の上にて、そらいびきをかく。

ゴウ〳〵〳〵

馬「ヲイ旦那、あぶない。目をさましなさろ

旅人おこされて目を開き、

「馬が埒があかぬからねぶけが出た。昨日三島から乘た馬はよい馬であつた。そして馬士が飛んだ氣のよい男よ。三島から沼津まで百五十でねをして、乘つた所が、馬子が云ふには、旦那は、こんな早い馬に乘つて、今に落よふか、イヤめつたにいねぶりもならぬなどゝ、心遣してゐさつしやるだろふ、それが氣の毒だから、駄賃はモウ貰ひますまい云ひ居る。それから三枚橋へ來ると旦那は馬の鞍で腰が痛みませう。ちとおりておやすみなさい。酒でもあがるなら酒手はこつちからあげませふと、馬方の方から百五十くれて沼津へくると、さきの宿まで送つて上たいが、わしが馬は跳ねますから、外に馬をとつて、乘ていかしやれ、駄賃はわしが進ぜませうと、又百五十たゞくれた。あんな氣のよい馬士もないもんだ。

ト、話の中此馬をひく馬方、あるきながら

「コウ〳〵〳〵ムニヤ〳〵

此話に彌次郎北八も大きに興に入、あゆむとなしに府中の宿につく。

五、地方色の發揮「處かはれば品かはる」と云ふ俚諺程度の考からであらうが、道中の推し移りにつれて人情、風俗、習慣、言語の變化する次第を自然にからませてゐる。そしてその何れもが一九一流のユーモラスな色彩で紹介されてゐる。ローカルカラーと云つても後代自然主義派作家の主張するやうな、はつきりした意識があつてのことでないのに斯うした暗合を見出し得るのも一奇である。殊に彼は言語の感覺が鋭敏であつたと見えて、所々に凡例をあげて

驛々風土に隨て晉律に清濁の差別あり。俚言方言の通稱に異なる事あり、笑ふべきに非ず、古代の詞は却て田舍に殘れりと徂徠翁の謂なり。たとへば駿遠兩國にて行といふを行ずといふは行んずる也、酒を呑ず、飯を食ずとは、皆呑んず喰んずるなりと「物類稱呼」に見えたり。

恐しいといふ事を相州にてはおつかないといひ、駿州にてはゐずいと云ひ、遠州にてはこはいといふ。同國にて九ッをけゝねつといひ、心なしといふをけゝれなしといふ事は「古今集」に云々

と樣にあげてゐる。此等は口語の歷史文法上の一資料とも謂ふべきだが原本的なものではない。

京人の悠暢な氣質を寫した一節に、喧嘩の場面で

さかなや「名は何と云ふぞい

しよく人「喜兵衞と云ふわい

さかなや「としは幾つじや

しよく人「廿四じやわい

さかなや「おきくされ、おのれ廿四にしちや、ゐろう若い、嘘つきくさるな

しよく人「何云ふぞい、ほんまじやわい、前厄で、ことし嬶めを死なしたわい

さかなや「ソリャゐらい、力おとしあつたじやあろ、ゐいきみさらしたな

しよく人「イヤ、そればかりじやない、乳呑みくさる餓飢めが、あるさかい、ゐらい難儀なめにあふたわい

さかなや「そじやあろわい、おりやわれにふたつうへじやわい
しよく人「そふぬかしくさりや、われもわかい、うちはどこじやぞい
さかなや「一條猪熊通東入所じやわい
しよく人「かいやい、あこに盲目で目の見へん寸伯といふ針醫があろがな
さかなや「ヲヽ、針醫がありや、どふすりや
しよく人「イヤこちの一家じやさかい、おのれ通くさるなら言傳してこまそ
「いやじやわい、なんのわれが言傳、たれが云をぞい、ゑらいあほうめじや
けんぶつの人欠伸しながら
「十兵術さん、もふいのかい
十兵衛「またんせ、今に打合ふじやあろ
見物「イヤわしやうちに客ほつておいて來たさかい
十兵衛「そしたら其お客つれてごんせ、序に薄緣なと一枚くさんせんかい
又こちらの方にいる見物、軒の下につくばいひじをぬきく〳〵
「見なされ、あつちやのわろが、どうしても、ゑらいやつじやわいな
見物「イヤこつちやの男もゑらい顔じやわい
見物「ホンに、その顔で思ひ出した。お家はどふじやいな、痛所はゑいかいな
見物「ハイおかたじけなふござります。とんとよいやうであつたが、昨日から、ゑらふ、わるなつてツイゆふべ死にましたわいな
見物「ソリヤお前御愁傷じやあろ、御葬禮はいつじやいな
「今出しますとこじやあつたが、ゑらい喧嘩があると人が走るさかい、わしもツイいて見てもどる程に、それで待てと云ふておきましたわいの
と、各々氣の長いものばかり悠々と見物してゐると、かの
職人の男「コリヤ、ヤイ、まちつと、こつちやへよりくされ。日向がなふなつて寒くなつたさかい
さかなや「ヲヽ、よつたがどふすりや
しよく人「おのれ今、おれがことを阿呆とぬかし居つたが、なんでおれが阿呆じやぞい
さかなや「阿呆じやさかい、阿呆じやわい
さかなや「何ぬかしくさる、そふいふわれが、あほうじやわい
さかなや「イヤ、こちや、阿呆じやない、かしこじやわい
しよく人「サアひよつと互にせり合ふて着物でちひきさいたら、損じやさかい、やめにしてこまそふかい
さかなや「ゑらふ遲なつた、もふいんでこまそ
しよく人「おれは、われがいにくさる道じや程に、連立つて、いんでくりよわい。今日はゑい天氣じやかつたな
さかなや「あたゝかうでゑいわいやい
と互に挨拶して、此二人連立ちて歸る。見物もコソ〳〵と皆散り〴〵に歸りければ、彌次郎・北八腹をかゝへて
彌「ハヽヽなるほど上方者は氣が長い。あんなうすのろい喧嘩がどこにあるもんだ

北八「あのなかで損德を考へてやめにしたから大笑ひだ
　公家衆のいます都はおのづから　喧嘩やめるもうたとよみけり

六、旅行趣味の提唱、旅はういものつらいものとばかり思ひ込んでゐる邦人に、旅ほどノンキな氣散じなものはないと云ふ感じを抱かせるやうになつたについては此書の感化の甚大なものがあらう。全篇是れ舊幕時代の無錢旅行教科書とも謂ふべく（但し彌次、北はいつも有錢旅行ではあつたが、その旅する調子は全く無錢旅行的であつた）毎篇の卷頭亦この種のことを彼一個の旅行觀としてあらはに提唱してゐる。

卽ち木曾街道の始めには

月はおしまれて入櫻は散をめでたしと詠つらねたりしも理なるかな。都會といへども生れたる地は、不斷見るに見飽て珍しからず、東都の人たま〳〵江之島金澤にゆきて鯛鰈を追廻し鰹の生て働くを見しより、尾鰭をつけて見ぬ人に咄すばかりも一興なり。ましてや京、大阪および諸國に遊行して日毎にかはる山川の有樣、目なれぬ土人の風俗言語のおかしげなるをきく、樂しみ生涯忘れまじき旅行の面白さ……。

と云ひ、草津溫泉道中の始めには

我儘に枝葉生茂る驛路の松はちとせに割增して長生やせんずらん。傳聞、秦の始皇は、長生の藥を需んとて徐福といへるに詔して、金財の山をつきしは、まはり遠き望にして、終に得がたくはては、泣寢入となりて、虻も取らず蜂も取らずとなん。もし長生の藥をえんとならば價わづか二百銅にして旅籠屋の飯にしくものなし。旅は憂ものにたとへたれど、それは錢なしの缺落、貫ひたらぬ空腹はらの草枕などはさもあるべし。懷中に相應の貯さへあれば鬼神同前雲助の見すぼらしきに逢ども、これをひきことに異見する親仁はつれず、こゞと云ふ女房には留主をさせて置きぬれば、飯盛おじやれの戯れも、氣儘いつぱい嘘をつくと大筒を放し、螺を吹くこと法印も及ばず、掛取の顏絕て見ざれば、借金ありてもなきが如く、義理は棚へあげておき、褌は寢るとき蒲團の下に入れおき、もし朝寢せんとならば、逗留して寢つゞけになすとも、咎るものなく、錢次第にて馬籠の乘詰、また懷手して、何やらを握りながら、くわへぎせるのらう竹に、よだれを流して、無洒落ちらし、五郎八茶碗のたちのみ、串團子の横ぐはへも遠慮なく、雪凍は見はらしのよき所、勝手次第まことに命の洗濯せんには鬼の留主より内をおるすの旅步行こそ延命の藥なるべし。

七、滑稽の集成に巧みなこと、

彼は自身滑稽な性格ではあつたが、性格だけでは傑作が出るものではない。矢張創作方面に於ても、天分の才が豐かであつたものと思はれる。東海道中に、市山の旅店で夜泥鼈に指を嚙まれた談がある。これは當時漢學者の龜田鵬齋が「或年西遊の途次、小供が泥鼈を捉へて弄り殺しにしかゝつて居るのを見て買ひとつたが、その夜旅店でかく〳〵のことがあつた」と語つたのを一九は直に市山の旅店に應用してちつとも斧鑿の痕を見せてゐない。後に鵬齋が之を讀んで思はず苦笑したと云ふ。前にあげた、方廣寺の場面は、徒然草の鼎かぶりとよく似てゐるし、京見物中の喧嘩のおちは狂言胸突のそれと似通つたところがある。或は泥鼈の流儀かもしれぬ。殊に狂言の禰案は彼の藥籠中の首位を占めたものであるらしく、御油赤坂の一節は狐塚をとり、鳴海、宮の道中鍵屋の所は聾座頭をとり、木曾街道贄川の驛には鱸庖丁をとりしてゐる。今鍵屋の一節を引く。

これより彌次郎あんまに、もませる、この内となり座敷に泊り合せしごぜ二人が慰みに三味線を出して伊勢音頭をうたふ聲する

うた「花も移ろふ仇人の、浮氣も戀といはしろの、結びふくさの解きほどきハリサ、コリヤサよい〳〵〳〵よいとなア、ツテ、チン〳〵

北「イヤこいつ、いゝ聲だ、ナント按摩さん、わしは踊りが上手だ、おめへ目が見へると、あの唄で、一つ踊つて見せてへもんだがな

あんま「わしもすきだがなア、踊らつせる音をきかアすひとつやらつしやらまいか

北「やるは、やろふが、ほめてもらはにや、はりやいがねへから、こうしよう、わしが踊りしまつた所で、おめへのつむりをちよいと撫でよふから、それをきつかけに、やんやアとほめてくんな、よしか〳〵ソレ踊るぞとなりのうた「とけぬ思はふたつ箱、みつよつ、いつもとまりぶね、それが苦界の行きちがひ、ハリサ、コリヤサ」と三味線に合せて北八手をたゝき踊るまねをして

北「よい〳〵〳〵よいやさア

と、踊りしまい座頭のあたまを、ちよつとあしにてなでると、

あんま「ヤンヤアゑらい〳〵ハヽヽヽ

北「なんと、面白かろふ、もひとつやろふか

又となりのうた「さす手、引く手にわしやどこまでも、浪のうきねの梶枕

北「よい〳〵〳〵よいやなア

ト、又足にて座頭のあたまを撫でる

あんま「ヤンヤ〳〵

北「ハヽヽヽおもしろい〳〵

ト、此内、宿の女「お湯におめしなされませ

北「彌次さん、もふしめへか、しめへなら湯に入りなせへ、按摩さんが、踊りをほめてくれた代りに、これから、わつちも、揉んでもらをふ

彌「ドレそんならば入てこよふ

ト彌次郎は湯に入に行、あとにて、按摩北八を揉みにかゝり

あんま「時に旦那方は、ちと、當宿のおつるでもおよびなされ

北「イヤそれよりかア隣の三味線はこゝの娘か何人だの

あんま「あれは二三日前から、こゝの内に泊つてゐる瞽目でおますが、よい聲だなもし、しかし、まんだわしがしんくを旦那がたへきかせたい

北「コリヤよかろふやらかしねへ

あんま「その代りわしもほめてがなけらにや、張合がない。うたいしまつたら、旦那ほめて下さるかな

北「ヲツト承知々々

あんま「ドレやりからかさふ

ト北八がつむりをもみながら、拍子をとりて頭をぴしや〳〵

あんま「ジヤジヤン〳〵エヽヽヽよふたよた〳〵五勺の酒に、一合のんだらさまたよかろ

ト唄ひさして、北八が耳の中へグツと指をつつこみ、こいつが、最前吾等が頭を、足蹴にひろいだはつつけ野

郎奴、うぬがよな野郎は、祿では行くまい、あけくのはてには。首でも吊しやろ
ト云ひさして、耳の穴より指を拔けば、耳はホンと鳴る
あんま「やとさのせ〳〵
北八耳の穴をふさがれて、うぬが事を惡く云はれたをも知らず
北「ヤンヤ〳〵
あんま「シヤヾシヤン〳〵
ト拍子にかゝつて、北八があたまを、ひしや〳〵と叩く。北八顏をしかめて「おもしろい〳〵
あんま「もひとつやろかいな
北「イヤもふごめんだ、あたまがたまらぬ、
あんま「ハ、、、ゐろふおもしろかつた
其他由井蒲原の所で六部が「風が吹いたので箱屋を思ひついた」と云ふのは、江戸の諺に「大風吹けば桶屋がよろこぶ」と云ふのをとつたもの、二川より吉川への處で荷物を坊主持にしようとて、坊主に逢ふ毎に交代して持つのは、古くから心やすい同志の道中によくする趣向、大磯から小田原の間では
「外は白壁中はとん〳〵ナアニ……馬二匹ととく、心はどう〳〵だから
おいら二人が國所ナアニ……豚が二疋犬ころが十疋ととく、心は　ぶた二ながらきやんとをもの（二人ながら
勘當物か、二人ながら關東者か？）
おいら二人が國所とかけて、是を豚が二ひき、犬ころが十匹ととく、その心は、ぶた二ながらきやん十もの、
サアこれなあに……
などあるのは謎々の趣向を取容れたもの、箱根の宿でたばこぼんへ火を入れたら焦げる
めしをたいたら粥になつてしまうわな米をたくと云へばいゝ
湯がわいたら熱くてはいられるものか水が湯にわいたのならはいらう
などと云ふのは日常よく云ふ詭辯的をかしみである。琴平道中で
南無齒拔のこんぴらさま
とあるは語路合、木曾道中で
盆ござ、盆豆、ほんむしろ、盆牛房つみたてつみあけつみざんせう、こゝんこゞめの粉生米、親も嘉兵衞、子
も嘉兵衞、親嘉兵衞、子嘉兵衞かけまがらがさかけま下駄となりの茶釜はからちやがま、こちの茶釜もから茶釜
とあるは、以前からある發音練習を兼ねた遊戯語をもぢつたもの。木曾道中で饅頭の辯解に
北八「……ツイ茶碗の上へ轉けてこんなに打こはしたもんでござりやすから、お小僧さまがコリヤア御隱居さ
まの御秘藏の茶碗を破つて言譯がねへ、とても生てはゐられねへと泣出しなさる、わつちもまたこんなにお世
話に預つた上、面目次第もねへ、あなたに顏が合はされやせぬから、いつその事死んでのけふと二人とも覺悟
はきめましたが、山の中で身を投る川はなし、首を縊る勝手が知れず、コリヤ幸、あなたが、毒があつて喰ふ
と死ぬと云ふことを仰つしやつたを承つて居つた故、お小僧と二人その饅頭を喰つて見やしたが、どうも死に
やせぬから、コリヤ喰ひやうが足らねへからだ、もつと喰つたら死ぬであらうと、ツイ皆喰つてしまい申した
が、因果のつくばい、矢張死にやせぬので申譯がござりやせぬ

とあるのは確とは記憶にないが一休和尚の逸話に和尚の小僧時代に朋輩の小僧が師僧秘藏の茶碗を割つてぶる〳〵ものでゐるのを一休が「うまくやつてやらう」とて師僧が歸ると法問を始め

一休「偈――

師「そもさん

一休「生あるものは如何

師「必ず死あり

一休「始めあるものは如何

師「必ず終あり

と、そこで茶碗をとり出して「故にこの茶碗も終りが來ました」とやつてのけたと云ふこの趣向を逆用して更に饅頭を附加したやうに思はれる。

一九が道中膝栗毛は、上述の如く滑稽文學として、多くの優越點を持つて居るけれども、今日から觀ればマダ〳〵遺憾な點が尠くない。始めから全體の構想があつての執筆でないから、世間の氣受けを考へ〳〵書いたあとが見える（讀者の中には、もう一度位彌次北に床屋へ行かせずばなるまいなど忠告したものもあつた）それに當時の風俗があゝでもあらうが、至るところ飯盛とか何とか女色のいきさつを書いて、始終下がかつた滑稽に墮してゐるので遺憾ながら今日一般子女の讀物として推稱するを憚る。木曾道中以後には以前と重複するやうな趣向が折々出て來て「又か」と思はせる。東海道中の末尾の語と金毘羅道中の始めの語とはどう見ても矛盾だと思はれる。「女・小便・大便・放屁」、これだけを拔くと大分あとが貧弱に見える、つまり上品味がないと思ふ。

唯一九が天性の滑稽何の滯りもなくスラ〳〵とあれだけの大作を作つたと觀るのは誤りで、彼は一面創作の才に秀でても居れば構想脚色に苦心も拂つて居ることを忘れてはならぬと云ふことゝ、缺點を差引いても膝栗毛は近世文學の一珍たり、滑稽本の代表作たる價値に增減はないと云ふことだけは斷言し得ると思ふ。

式亭三馬（列傳體小說史下卷二二二―二四九、近世國文學史二四四―二五二）は浮世風呂、浮世床の著者として有名だが彼、本名は菊池泰輔と云つて安永四年淺草田原町三丁目の宅で生まれた。父は茂兵衞と云ふ版木師で、先祖には八丈島爲朝神社の祠官もあつたと云ふ。又伯母某はさる奧勤をして居たとも云ふ。彼幼時より讀書の趣味あり早く少青年期に於て稗史小說の類は大抵目を通してゐた（その師とも謂ふべきは唯一、平賀源内があるだけだつた。）寛政六年十八歲の時天道浮世出星操（でつかひ）と云ふ黃表紙の三冊物を處女作として、一代の著作百四十種許、尤も年次に配して見ると多い年、少い年、皆無の年など非常に不平均なやうだが、此は彼の境遇と性格とが原因して居よう、同じ寛政六年に「人間一心覗替操を出したが格別反響がなかつたらしい。間なく彼は書肆蘭香堂に入婿したが不幸にして妻が早世したのでそこを出でゝ、自立で古本屋開業、又々不幸にして失火丸燒、世過に困つて寛政十年には黃表紙少しと辰巳婦言（有名な洒落本）の初篇とを出した。翌十一年には俠太平記向鉢卷と云ふのを書いたが、その題材が火消人足の喧嘩であつたところから人足が怒つて怒鳴り込むやら、その筋が咎めて五十日の手鎖の刑に處するやらと云ふ騷ぎ、併しこの奇禍が幸して、彼が文名は一時に高くなり享和期に入つては多々益々の盛況を呈して述作も多かつた。此と相前後して本町三丁目に大阪某藥舖の出店を出して、だん〳〵懷を暖めた。文化三年に雷太郎強惡物語を書いたが、これは所謂「合卷物」のはじめ

である。同じき

文化三年　譚話浮世風呂　前編
同　六年　同　二編
同　八年　同　三編　柳髮新話浮世床初編
同　九年　同　四編(文元)　同　二編(文政六年瀧亭鯉丈が第三編を補つて完結)

と云ふ次第で彼の代表作を出した。その文化九年は彼の三十八才の時で蓋し彼の創作の最高潮に達した時であらう。爾來酒毒に健康を害して筆澁り書となり、よしや書いてもホンの達者に書きのめすと云ふだけで苦作力作は見られなく、文政五年四十八歳と云ふあたら年を以て逝いた。

三馬の性格は非常な才人で、貨殖の道にも通じ、緻密で而も敏捷な觀察力を有してはゐたが、大酒のみで、疳持で、我儘でだらしがなくて、喧嘩好きで利己的であつたらしい。長所は彼の二作によく發揮されてあるが、彼が酒のみであつたことは遂にそれが命とりになつたことででもわかるし、彼が疳癪持で我儘であつたことは故關根只誠翁の話として列傳體小說史(後編二三〇頁)に左の記事がある。

……通油町の鶴屋喜右衞門方にて作者畵工などを饗應せしことありしが、三馬京傳の徒皆其席に列りぬ。宴闌なりし時、西村屋與八といふ者(書肆)盃を京傳に與ふるとて、京傳先生と呼びたりしが、後又三馬に盃を屬して、三馬子お一つといひしかば、三馬怫然と色を作して、忽ち大聲に叱して曰はく、京傳を先生と稱し予を三馬子といふは如何、江戸氣性の作者といふは予を除いて誰ぞ云々、

又嘗て西宮新六が「雷太郎物語」の當り振舞をなせしことあり……他の書肆の主人某と共に三馬を伴ひて新吉原の廓に至りぬ。折しも彌生の櫻時なりしかば、人々の心浮きたちたり。西宮は三馬と共に、さゞめき歩きながらフト三馬を顧みて「シカシ先生かうして爰で遊ぶは實はムダでござりますね」といひしを三馬聞きもあへず大に憤り「ムダならお氣の毒だ歸りませう、直に歸りませう」といひかけて、スタ〳〵と歸りかゝれば、新六驚きおしとゞめ「今のは冗談なり」とて詫ぶれどもきかず、三馬雪駄をも脫ぎて懷中におさめやがて又驅出だす。新六やう〳〵追ひすがりてさま〴〵なだめ「ナゼ雪駄をおぬぎなされし」と問ふ。三馬曰ふ「これも穿いてゐるはムダなこツてす。」

彼がだらしがないのは、酒癖からも來て居たらうが、書肆の原稿責めは始終のことで、時には、書店の一室に捕虜同樣に閉ぢこめられて、それでヤツと書きあげたと云ふ。彼は馬琴の學者振つた態度が癪だと云つてひどく攻擊の矢を向けたが、馬琴も彼を淺薄なエセ才筆として蛇蝎のやうに嫌つて居つたらしい。彼の喧嘩好きは死ぬまでやまなかつたものと見えて、或人が、終焉の床に「そんなことは萬あるまいが若しもの事のあつた時、あたのやうな大家で辭世のないのも變なもの、どうか今から考へておかれては」と云はせも果てず「ナニ辭世――、おりやまだ死にやせんぞ、緣起でもない」と怒つて枕を投げかけたと云ふ。

因に、彼の辭世として世に傳はるものは

善もせず惡も作らず死ぬる身は　地藏もほめず閻魔しからず

といふのだが、一說には此は醫師須藤某の代作だとも云ふ。

彼の別號は本町菴、四季亭、洒落齋、遊戲堂、多囉哩樓など云ひ、字は久德通稱は西宮大助など云ふが、一番よく

通つてゐるのは「三馬」と云ふので、これは彼が慕つてゐる先輩唐來三和と烏亭焉馬とをつゞめたものだと云ふ。法號は歡譽喜樂奏天信士、墓は深川雲光院地内長源院にある。

彼の文學的地位については先輩名家の意見毀譽區々として定評がない。該博深奥な學識のないこと、國家社會に對して根本的聲革の成案もなければ、高い理解も理想もないこと、その言ふことは小理窟や團粉理窟を並べて小不平小小言の低小範圍に限られてあること、模擬標竊が多くて創作分子の少いこと、氣まぐれの執筆で作家としての態度が不眞面目不忠實であること、などは確かに當つた評であらうが、併し當時戯作者一帶の傾向を觀れば一人彼のみを咎めるのは稍酷な感じもする。目さきが敏捷で穿ちに妙を得てゐること、在來の黄表紙、洒落本が多くは材を遊里に採り、否一九の膝栗毛すらも江戸の吉原を五十三次その他の驛々に延長したかのやうな趣があるのを改めて、新に武士町人農工商とあらゆる階級の貴賤老若男女や各種職業を取材し遊里文學を擴めて眞の町人文學、社會文學としたこと、健想健筆で筆をとれば千里一瀉に作り上げたこと、馬琴や京傳は記憶と根氣でまねることが出來るが、彼のは到底他の追隨を許さぬ天才的な作風であつたことなどは大體その長所を捉へ得たものと觀ることが出來るが、健想健筆だけは必ずしも特異とは云へなからう

潮來節の前編附言に

……娼門に登て遊樂すること一晝夜、翌日舟中に想を發して、まづ發端を編又萬葉堂に歸り再び筆を採て凡五日にして著述校を脱す

とあるを見れば決して遲いことはないが、當時の一卷と云ふは吾々が雜誌に寄稿する一回分位なもので之を以て非常な速筆とは云へなからう（況んや彼が斯うしたことを公言する口吻には「その作の拙なるを咎むる勿れ」とよりは「これをあの京傳のうすのろに比べてどんなもんだい」とあてつけて得意がつた趣があるに於てなほ更である）

余は彼が作家としての價値は

一、寫實のすぐれてゐたこと
二、取材を廣汎にしたこと
三、平凡の中に奇拔を發見して、日常生活を寫しながら鋭い觀察をしてゐること
四、把雜剔抉穿ちの天才たること
五、對話小說に妙を得、地の文なしに巧みに筋を發展させてゐること
六、言語の感覺が鋭敏で僅かのアクセントの相違までも取材しそれによつて老若の別上方江戸の別乃至職業別をも書き別けたこと

などにあると思ふ。

だが併し、彼が滑稽文學作家として觀るときは又別である。蓋し

浮世風呂、浮世床　の妙處は上述諸點にあることは確かで風呂屋と云ひ床屋と云ひ、あらゆる人々があつまつて而かも誰もが解放氣分に浸つて僞らぬ自己をさらけ出す處だから、之を取材した着想などは中々面白いと思ふが、これがユーモラスな好作品かと云ふに、どうもさうはとれない。あれを讀んでゐる間、吾々は始終作者が意地の惡い眼つきで風呂場を覗いたり、床屋に坐り込んだりしてゐる風貌を想見する。一度はその穿ちの妙に魅せられもしようが、二度目から是作者の無同情で熱を冷される。まして當の主人公が之を讀めば最初からむきになつて怒りさうなものばかりだ。で、

余は思ふ、浮世風呂も浮世床も之を諷刺文學としては上乘であらうが滑稽文學としては膝栗毛に劣ること數等だと。因て今は唯一二例をあぐるだけに止めておく。

浮世風呂

かみ「……鰻なども、御當地のは和いばかりで、もみないがな。上の鰻といふたら、まアどないなもんじやい名高い所がマア京で上の生洲な。大阪で大正ナ。その外に川魚屋もまだまあ多とあれどナ。玉といふたら的等じや、何じやろとマア鐵串にさして燒じやは、その燒た跡で能程づゝに切てな。平に入てきつしりと蓋して出すさかいに、なんぼでもさめるといふ案じがないわいな。

山「江戸じやアそんなけちなことは、流行らねへのさ。江戸前の蒲燒は、ほつほと湯氣の立つのを皿へならべて出す。たべるうちにさめたら、その儘置てお代りの燒立をたべるが江戸子さ。さめると猫に持行つて遣うと竹の皮へ包で歸る人は、よつほど勘定高い人さ。

かみ「夫がマア何で江戸子じやな。物の廢にならんやうにしてこそ自慢したが能はいな。いしこらしう江戸子じや、何たら角たら云ふても、上の者の目から見ては、ト、やくたいじやがな。自慢らしう云ふことが皆へこたこじやによつて、江戸子はへげたれじやといふはいな。

山「へげたれでも能のさ。江戸子のありがたさには生れ落から死まで、生れた土地を一寸も離れねへよ。アイおめへがたのやうに、京でうまれて、大阪に住つたり、さまゝにまごつき廻つても、あけくのはてはありがたいお江戸だからけふまで暮してゐるじやアねへかの。夫だからおめへがたの事を上方ぜへろくと云ふはな。

かみ「さいろくとは、なんのこつちやゑ

山「さいろくト

かみ「さいろくとは、なんのこつちやへ

山「しれずばいゝわな。

かみ「へゝ、關東べいが、さいろくをぜへろくと、けたいな詞つきじやなア、御慮外もおりよけへゝ、觀音さまもかんのんさま、なんのこつちやろな。さうだから、斯だからト、あのまアからとは、なんじやア。

山「から」だから「から」さ。ゆゑといふことよ。そしてまた上方の「さかい」とはなんだへ。

かみ「ささい」とはな。物の境目じやハ。物の限る所が境じやによつて、さうじやさかい。斯した境と云ふのじやはいな。

山「そんならいはうかへ。江戸詞の「から」をわらひなさるが百人一首の歌に何とあるゑ。

かみ「ソレ〳〵最う百人一首じやアは、首じやない百人一首じやはいな。まだまア「しやくにんし」トいはで賴母しいな。

山「そりやアわたしが云損へにもしろさ。

かみ「そこねへじやない、云損ひじやゑらう聞づらいな。芝居など見るに今が最後だ觀念何たらいふたり、大願成就糸けねへ、何の角のいふて萬歳の才藏のと、ぎつぱな男が云ふてじやが、ひかり人のないさかい、ようさ。アイそんな片言は申しません。

濟んである

山「そりや〳〵上方もわるい〳〵。ひかり人ツサひかるとは、稻妻かへ。おつだネエ。江戸では叱ると云ふの

かみ「ぎつばりひかる、なるほどこりや私が誤だ。そしたら其百人一首は何のこつちやエ。

山「から」といふ詞の譯さ。能くお聞きよ。百人一首の歌に、文屋康秀、吹からに秋の草木のしほるればトあるよ。ソレ吹からネ。よしかへ。吹ゆるにといふことを吹からにさ。なんぼ上方でさかい〳〵と云うても、吹さかい秋の草木のしほるればとは詠はいたしやせん。

かみ「なる程、さう聞きやおまへのがほんまに尤らしいが、ハテ云ひや何でも云はれるはいな。

山「大願成就でも、何でも、利口をじこうと云つたり、立派をぎつば、狐をけつねと云ふより能のさ。

一九三馬の後　一九の弟子は九人、三馬の弟子は十四人もあつた。その中有名なものだけをあげても

十返舍一九
- 五返舍半九
- 十字舍三九
- 愚者一得（江南亭唐立）

式亭三馬
- 樂亭馬笑
- 古今亭三鳥
- 福亭三笑
- 式亭小三馬

などがあるが特筆する程のことはない。此等以後の作家となつては着想、表現に滑稽を求めゝして自己の生活態度そのものに新趣向をこらし、そをさながらに寫して得々たる趣がある。生活卽藝術の立場から觀てはその方が面白いかも知れぬが、生活そのものが眞の人生觀から割出されたものでなく、何がな世間を茶にする種はないかと云つた風の遊戯たつぷりのものだから宜しくない。斯うした傾向の代表的なものは瀧亭鯉丈で、文政三年版行の「花暦八笑人」はその代表作品である。又此傾向の極點に達したものは、鯉丈の門弟梅亭金鶴の

妙竹林話七變人　である（帝國文庫第廿六編一〇七――二九六）次郎、はね助、虛呂松、野良七、下太郎（へたろう）、飛八、茶目吉の七名、揃ひも揃つたのんきな仲間が色々珍趣向をこらした揚句、喜次郎の發案で、龜井戸天神前を背景に讐討のまねごとをして觀衆をアツと云はせようといふ。云はゞ野外劇とかページエント劇とかに當る。一人が橋がゝりに、武者修業になつて、やつて來ると、こちらからは、連歌師の行脚姿で行きかゝつて、ちよつとしたはづみで、物云ひかけて大立まはりをしてゐる處へ、虛呂松が女形で　それを仲裁すると、あとの者は、直ぐ下に船をこしらえて待つてゐる。見物人がアツと云ふ間に、船でスイ〳〵竪川づたひで下らうと云ふ、これが脚本の略筋で、その說明振は

喜「劍術のこむ手薙手はならひても　十文字さへ書ぬかなしさ

と云ふ古人の狂歌を口ずさむと、武者修業の男が聞とがめて、ツカ〳〵と立戻り、

「今吟じたる狂歌は、全く拙者をあざける一言、そのまゝにやは通さうか」ト紙布（し）の袂をしつかり取る。

されども、こつちはぐつと落付き

「これは近頃迷惑千萬。いかで貴殿の事を申さん。古人の狂歌の浮びしまゝに、思はず知らず詠ぜしのみ、そこ放して通し給へ」

と云ふと、

「比興なり、臆したり、人に雜言いひかけて、逃るとて逃さうや」といひつゝあとへ引きかへす、その手をとつて突放せば、二足三足たぢ〳〵と、よろける足を踏みしめて

「ヤア小ざかしい賣僧の腕だて、くわんねんしろと云ながら、脊中の木刀拔取つて、眞向みぢんと打てかゝると、襟にさしたる如意を持、右手にカツシと請とめるといふ、こゝからが武藏と笠原のたてゞいかうというものだ。

野ら「フムなか〳〵面白さうだわえ

喜「そこで二人が可い加減にごたつき、左右へパツと身を開く處へ、例の女形が

「マア〳〵待つてお二人さん

と聲かけながら駒下駄でトトトントンと、足踏しなから中へ割込、そのトンと踏だ足踏を相圖に兼て橋下に着けておく船のなかで

「ヨヲヰヤ。チヤン〳〵〳〵と三味ゐるを切かけに、三人は

「お前女でおいせさん

と船の中へ所作り込むと、直に三味線は侚と變り

吹けよ川風　あげろよ簾。チヤンチヤ。チヤン〳〵。スチヤラカ　チヤン

と竪川通へ、こぎもどさうと云ふ趣向だ。云々

さて、いよ〳〵實演にとりかゝると、何分にも、人通りが多い所へ持つて行つて本當の擊劍の先生か、七人の弟子同道で來かゝつて「丁度拙者の道場もツイ近くだから、是非同道して一太刀お試合を」と所望せられて、飛んでもない處へ引張り込まれ、キヨロ松一人が女のなりで、キヨロリ〳〵とうろついて、嫌に艶めくもんだから通行人は變な思ひで見てゐると云ふ。吾々が今日此を讀むと、教養のない。迷亭（夏目漱石氏の「吾輩ハ猫デアル」にある苦沙彌の親友）のやうな人々の集團だと思はれる。

狂文　狂歌の盛行に連れてそを散文に引き延ばした狂文なるものも出た。

四方赤良の　よものあか

四方の留糟

風來山人の　六々部集

は殊に有名で、京傳、三馬の戯文にも秀れたものがある。が余の私見を以てすれば當代の狂文は俳文の衒學的な嫌味だけがあつて、あれだけの輕快味がなく、狂歌の間の延びたやうな雅文の低級化したやうな趣があつて、どうも滑稽文學としての價値は薄いと思ふ。因て今は唯二三の例文だけを掲げる。

浮世（六々部集）

古人春宵一刻價千金とめつたに高ばれば、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり。然れども春宵一刻に、千金出して買ふたはけもなく、三分五厘に賣りてしまふ出來合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るまゝのいひたい事、つまる所はよくもあしくもいひなし次第の浮世にて、浮世の定なきは人の心の定なきなり。

達摩畫賛（四方のあか）

南天竺の菩提達摩遙々と西より來りて、梁の武帝に見えし時、民の膏血を絞りて、堂塔伽藍を造るを見て、無功德と答へ、遂に小林のもとに隱れて面壁九年、敎外別傳、不立文字とはいへど、一切經の版行も、この門流の末に成りて、をがみずきのめし食ふほんさんも、この葉板のおかげによりて、大般若の轉讀も出來、五七言の偈でも作るは、まだ〳〵此輩なるべし。徒に雪まろげの作物となりて、子供の杖に穴をあけられ、疱瘡見舞の不倒翁おきあがれ小法師とあたまをはらるゝも、又白眼のいたりならずや。

蛙の贅（四方の留粕）

花に鳴く鶯にともなひては、催馬樂の力なくしてあめつちをもうごかすべく、月の桂をもをりを得ては、不死の藥をまとかにして、己が齡も久方なるべし。むしろ香山の石となるとも、ゆめ〳〵鄭門の蛇に倣ふ事なかれ。

心學道話　狂文に比べると當期に起つた心學道話は（勿論敎訓文學の中へ入るべきだが）極めて平明で譬喩の適切なことや語路の輕快なことは遙により以上だと思ふ。詳細は敎訓文學に讓るとして左にその一例をあげておく。

中澤道二翁道話の一節

三世とは如何。手を一つ打つ。其の內にあり。見得するや看よ〳〵。三世とは此の骸に對しての名なり。心に三世はない、故に不可得也。不可得とは思案分別で合點することはならぬと云ふことじや。けれども之を小割して見れば、眼前にも今といふものがある故に、三世といふ名が出來たものじや。手を打たぬ先きは未來、手を打つたところは現世、打つたあとは音がすぎ去つた故過去といふ。三世ともにどこにあるぞ。過去も未來も唯今ばかり。此今を會得するを本心を知るといふ。此の今の外に何が有るぞ。

あすの事昨日のことに渡らずと　たゞ今橋を渡れ世の人

柴田鳩翁道話の一節

……古歌に「かたちこそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなん」指や足にかゝはつた事ぢやござりませぬ、皆心のことぢや、心がまがつて有つては、色が白からうが鼻すぢは通つてあらうがはえぎはがうつくしからうが、夫れは見せかけばかりで何のやくにたゝぬこと、蒔繪の重箱に、馬の糞入れたやうなものぢや。是をほんの見かけ倒と申します。飯たきのおさんどのが、ながしもとで、鍋の尻をあらうてゐる。丁稚の長吉が側へ來て「おさんどん、おまへの鼻のさきに、墨がついてある。見ともない」と敎へてくれる。おさんどんは嬉しがつて「さうかえ、どこに付いてある」と指のさきに手拭をまいて、額口で「おのれが鼻の先をながめ、後藤が目貫を彫るやうに、そこら中ひねくりまはして「長吉どん、モウとれたかえ」「イヤ〳〵ほゝべたの方へ餘計になつた」「ドレ〳〵どこに」と水鏡に顏をうつして掃除してござる。おさんどんの心には「アノ長吉どんは可愛らしい子供衆ぢや、晩のお菜（カズ）を杓子あたりで、お禮申さにやなるまい」と滅多にうれしがつて、禮をいふ。もし此長吉どのが「コレ〳〵おさんどん、おまへの根性はしぶとい根性ぢや、チッと眼頰（ふくれづら）やめなされ」というたら、お三どんが何といふで、あらうぞ、チト考へて御らうじませ「あたなめくさつた小丁稚づら、わしが心が、ゆがんであらうが、三角になつてあらうが、おのれの世話になるものか、おのれおぼえてけつかれ、小便たれても、ふとんの洗濯はしてやりはせぬ」との角のはえぬ鬼の樣に成りまする。是はお三どんの事ばかりぢやない「イヤ、ナニ軍太兵衞どの御上下の御紋が、すこしかたよつて見えまする」軍太兵衞しかつべらしう、肩衣を正して「コレハ〳〵御氣を付けられ、千萬忝う存ずる、何也とも相應の御用もござらば、承るでご

ざらう」と嬉しさうな顏して挨拶せらるゝ。こいつが間違うて「時に軍太兵衞どの、足下の御心術甚だ以て其の意得ませぬ、チト心を正直に御持ちなされ、心のゆがみが見えて、甚だ見ぐるしうござる」というたら、どうするであらうぞ、刀にそり打つてつばうちならし、忽ち刄傷に及ぶであらう。ナント人は身體のこと世話してやると減多にうれしがつてなほす、心の世話をする人があると眞黑になつて腹をたて、其の心を直さうとせぬは、どういふ拍子の間違で、是ほどまで迷うたものでござりませうぞ、是は餘所の事ではない、おたがひに大か小か、色かへ品かへ、こんなまちがひは得てありたがるものでございます。よう御吟味をなされませ。是がこれ、形は人の目にかゝれども、心は人の目にかゝらぬゆゑ、ゆがんであつても、曲つて有つてもくるしうはないと、此の無分別からおこることぢや。是ぢやによつて、少しも油斷はなりませぬ。

六　明治

明治初年に在つては一九の系統を引いた西洋膝栗毛が出て盛行し、廿年頃になつて同趣の紀行で「啞の旅行」が出る位であつた。韻文の方では柳北一派の狂詩が行はれ漢語の驅使圓轉滑脫の妙を極めたが明治らしい色彩としては唯その題材が新文明の器機に變つたと云ふだけで內面的に觀て明治文學らしい滑稽物は第三期卽ち明治卅年以後のことと觀られる。それは何故か。

一、當期は小說中心時代で作家の創作上の力點は專ら小說におかれ、滑稽文學の如きは文壇の基調を去ること遠く、末の末に觀られてゐたこと。

二、從前滑稽文學中にあつた、二わか、ものは附、冠附、地口、語呂合、講談、落語等はその地位が成り下つて一般俗人の俗趣と化したこと。(此等は前期とても滑稽文學の末枝に屬してゐたものなのが、愈々俗化してしまつた)

三、明治文學の酵母とも謂ふべき歐米文學も亦小說全盛期であつたこと。

四、且つ飜譯文學は政治、軍事、哲學、倫理、教育などの書が先になつて純文學作品のそれは十五六年以後に出た。それも始めは脚本、小說、詩の類で、滑稽文學の譯はずつと後れたので、それに暗示を得た作品の出るのも又それと等しなみに他の作品より後れたこと。

などが主原因であらう。

併し後半期殊に三十年以後に在つては、質量共に急速に展びて裕に前代の斯種文學を凌駕するものも見られる。以下從來の順序によつて主なものをあげよう。

韻文　狂詩　明治初年の雜誌や、戲作には大抵一二の狂詩が載つてゐる。此は已に前期一部の作者に試みられたものだが、明治に入つてからは過渡の時代相を取材し諷詠して長曲短詞何れも諧謔の好文字に富んでゐる。就中成島柳北が有名であつた。

吳服物問人物之價格也　(柳北全集三二〇——三二六)

欲レ買二吳服物一。　往觀大丸廛。　一々正札附。　持來客人前。
縮緬是上等。　一匹三十圓。　木綿是下等。　一反六十錢。
品物夫々有二優劣一。　代價隨生二高下別一。　若以二安物一貪二大金一。
世間必怒二其不埒一。　人間優劣不二知易一。　正札之價附者誰。

金時計兮高帽子。　向レ人法螺散々吹。
爲レ國爲レ君論雖レ貴。　焉知爲レ名又爲レ利。
百圓百圓五百圓。　至當價耶不當時。
若使二才德十分全一。　坐取二萬金一亦當然。
請看大丸呉服物。　縮緬自是異二木綿一。
歐羅巴又亞細亞。　未レ聞依レ髯治二天下一。
髯々看來美而長。　不レ知果有二幾許價一。

「東西隣」は當時書籍濫造の惡風を諷刺したもので、もつと皮肉だ。

東隣權助晨捻レ虱。　先生爲著本一帙。
西隣阿釁夕放レ屁。　先生卽時名案出。
今日所レ聞明日書。　一年三百六十日。
届二出版一又願二版權一。　驚君年々大著述。
假二人議論竊二人文一。　腹中本來無一物。
新聞廣告半法螺。　題辭空飾貴人筆。
鑛銀鉛管趣相同。　賣者取レ錢買者失。
善惡眞贋讀不レ分。　目暗千人目明一。
版木有レ口怒當レ言。　對レ我失敬矢鱈堀。

到處世間紙屑多。　好以二張拔一造二大佛一。
噫始皇帝死無二豪傑一。　唯見學者沸如レ蚘。
當今誰出二大英斷一。　焚盡天下無益書。

又「年市商人」と題しては

淺草神田又麴町。　市之商賣殆無レ形。
東風吹盡空財布。　顏色門松一樣靑。

と云ふ。其他「閉口歌」と題しては飲中八仙歌の韵を採つてをかしく愚痴を並べ、「開拓使」と題しては北海道の黑田海拓使を祭り上げ、「千金丹」と題しては人眞似の多きを歎いて末に

勸工々々數十軒。　大小雖レ異品相似。
嗚呼近來人情卑。　商業大半皆山師。
人眞似卽同士打。　畢竟盡爲二共倒姿一。
勸レ君莫レ學流行術。　勸レ君莫レ賣流行物。

と結び、「倫敦」と題して洋行風を吹かす徒にあてつけて「視則目毒聽耳毒。不レ如無レ往二歐羅巴一。」など硬い漢語を自由に軟化してゐる。

柳北以外狂詩作者は可なりにあつたことは狂詩餘學便覽を見るといろんな作者のいろんな詩でわかる。（狂詩餘學便覽明治十三年十二月廿三日發行）

夜宴觀妓　　雲心醉士

洗髮島田頗別品。　似狐狸笑愛嬌甚。
可レ知此猫是往來。　彈三味線爲二轉沈一。

登　樓　　變態子

每晚登樓遊蕩連。　月落烏啼有頂天。
暫時愉快還頭痛。　夜半鐘聲響二五圓一。

大　津　　銅脉先生

招婦(やれ)八町の暮。　元是(れ)馬棄場。
勢田囘(は)三里。　矢橋思案長。

書　生　　苦寒總子

囊中復無二一錢藏一。　故鄕仕送相待長。
十月霜月寒日益　每朝只以二燒芋一防。

併し漢字制限論や、ローマ字論や國字改良論の唱導と共に、漢文教育は次第に衰へ漢文學は西歐の拉丁文學のやうな、一種の古典文學と看做されるやうになつて明治文化の進展と反比例して段々退歩の氣味があり再び斯學復興熱が高まつた頃は、漢文は最早やこんなのんきな遊戯文學としてではなく、古典物は東洋思想研究の側から、現代時文は國際的要求の側から注目さるゝやうになつたので、狂詩の如きも次第に下火になつて明治末期には文壇から迹を絶つに至つた。

狂歌　**へなぶり**　狂歌は讀賣新聞紙上、朴念仁氏の選によつて掲げられた「へなぶり」に佳作が多かつた。後に纏めて「へなぶり第一、二輯」となつてゐる。

第一輯卷頭序して

本書の眼目は歌にありて議論にあらず。されど狂言の筋を語る稻荷町は、序幕の發端淺黄幕の外に出づるを便とす。故に本書は先づ冠するに狂歌改良の愚見を以てす。

と云ひ、稍體系的に

狂歌の稱呼
狂歌の本旨と變遷
狂歌の衰頽
狂歌の改良

なる見出しのもとに有益な文字を並べ、改良の主眼目としては形式の滑稽以外內容の好笑を取材することに努めた。

この事については第二輯の始めに幸田博士が序して居られる語も參考に値する。卽ち

……天明の狂歌に至つては、從前の滑稽趣味の歌の諸體を渾融して、鬱として一體を爲せるもの、我邦文學史上に於ても決して輕視すべからざるものあり。されども惜むべし、言葉の上の技巧あまりありてその餘のをかしみは寧ろ足らざるに傾き、まゝ俊爽巧妙なるものあれども、終に儇巧輕佻にして滑稽の眞處純處に到達せざるの觀なきに非ず。

今其中秀咏と思しい一部分をあげる。

關取も胄病に勝てず飯へりて　一と日わづかに一升五合

おざしきのひもじさしぬび歸るさを　身にしむ聲の鍋燒うどん
書留はいまだ來らず君よまて　どてらひさぎて肉にかへなむ
花の山四十女が三味ずれば　髯の先生コリヤ〳〵と和す
庫裡の椽に僧は證文しらべ居りて　紅梅の枝にむつきほしたり
たわやめに電車の席をあけてやれば　コン畜生め野郎かけたる
門づけの新內遠く夜はふけて　誰かひとり語かあゝつまらねえ
女湯に山の神々神集ひ　澤庵の禮におか湯くみやる
髯そりて五つは若く見えますよ　ウフフおつりかナーニ要らない
ゲーブフウ都大路にべタリ坐り　ナアワン公や醉やしねえなあ
はるさめにツツチンチテン面白い　世は春なれや一本つけな
志を立てゝ男の業ならず　舞臺の上に大臣つとむる
ヒョンな奴繪葉書出せば素はがきに　ペンで細かく千五百餘字
世の中は味方三分に敵七分　その三分さへ金ゆゑにして
すれ違ふ電車の窓に美人見て　乘りかへばやと思ふまに過ぐ
親不孝な聲のありたけ張揚げて　現はれ出でたる武智光秀
我骨も末は墓場の下なれど　まづ當分は座布團の上
うたゝねにうまく當つた五百圓　さむれば御免かけ乞の聲

オホホホホとアハハの二人並び行けば　此方はフフンしばしにらまゆ
教場で繪葉書會をしてゐるを　知らぬ先生エー、ブラス、ピー
大風や大洋十里日は暮れて　松原遠く追分聞ゆ

先づ此で明治らしい狂歌となつた。中には低級な想もあるが大體上品でさう厭な感じがしないで一讀失笑に値するもの以上の作ばかりである。(殊に最後の追分のなどは之を短歌の正調に入れても可い位だ)

當時この「へなぶり」が諧賣の讀者吸收の一策としても成功し、斯趣味普及の上に功のあつたことは新聞掲載當時第一着にこの欄を見る人も可なりあつたと云ふし、後の單行本の賣行が

三十八年六月十五日初版
同　七月十二日再版
同　八月十五日三版
三十九年一月一日四　版
同　十月一日五　版

發行と云ふに徵しても察せられる。

當世風俗五十番歌合　(上下二冊、藤園主人著淺井默語畫、永井素岳詞書及び淨書、三十八年十月十二日吉川半七發行)

には明治の新風俗を取合せて五十番の狂歌合が出てゐる。その職業は

左　　右

初出代議士　女將
食客　下女
藝妓　醫者
俳優　相撲
神職　僧侶
官吏　小使
田舍婆　產婆
疊屋　履物屋
高等地獄　和製ハイカラ
愛國婦人會員　出征軍人
さかな屋　肉屋
宣教師　神女
大原女　魚釣
村長　小學教員
幇間　宗匠
人力車夫　牛飼
豆腐屋　石切

法界節　淨瑠璃語
壯士　高利貸
汽車旗振　電車札切
消防夫　巡査
ガイド　ボーイ
西洋畫師　日本畫師
石版師　木版師
工女　工夫
下駄直　散髮屋
號外賣　牛乳屋
水兵　看護婦
令孃　寫眞師
植木屋　桶屋
賣卜者　碁打
ペンキ塗　紺屋
紙屑買　輿かつぎ
たちん坊　赤坊

船頭　荷車引
呉服屋　洋服屋
氷屋　燒芋屋
女教師　新聞記者
撒水夫　瓦斯燈夫
辯護士　落語家
郵便脚夫　小僧
學生　女學生
按摩　蹄鐵工
於傳武屋　そばや
遊獵人　鳥さし
藥賣　風船玉賣
塵さらへ　犬ころし
托鉢　尼
こえとり　どぶさらへ

で、中には如何はしい配合もあるが、大體に於ては相應しい組合せで、その組合せだけで己にをかしみを含んで居るが、それについて出てゐる狂歌も穿ちと皮肉で面白く棚下ししてゐる。

十二番の左宣教師
博愛の心と知らで讃美歌に　さくるおのが目とどむる人あり

右、神　女
春日山舞ふや少女が袖の上に　春風輕く藤の花散る

十五番左、村長
軍人送り迎への重りて　村長の袴色あせにけり

右、小學校教員
教員は人にてつくり生徒をば　教ふるうつはとまた書かれけり

三十二番、左、賣卜者
市の邊に卜賣る翁こと問はむ　君が運命いつか開くと

右、碁　打
打つ石の今はやめてむうば玉の　夜も白々と白みゆきたり

尙明治初年木版本の狂歌集もあるが、取材、形式多くは前代の拙なる模倣と云ふに止まる。又通俗向の新聞雜誌にも隨分狂歌を載せた向もあるが多くは低猥か卑俗に墮してゐる。

川柳　朴念仁氏の「へなぶり」と相前後して川柳の方面に旗幟をあげたのは阪井久良岐氏（名は辯）である。氏はその頃電報新聞の柳壇によつて大に同好を指導した。當時日本新聞にも川柳を載せたが久良岐氏の言によれば「電報新

聞のは下町式、日本新聞のは上町式であつた」とか。

滑稽文學　川柳久良岐點

はその選集で、三十七年十一月廿三日本郷區彌生町三番地金色社から發行されてゐる袖珍型四六七頁の本で卷頭「川柳概言」と題し、當時の柳壇の退歩を論じ、眞の川柳は機智、諷刺、滑稽（又は、輕み、穿ち、をかしみ）の何れかが見らねばならぬことを云ひ、新派（明治の川柳と云ふ程の意だが、無闇に新派がる輩はこの節に至つて多くなつたが）徒に奇調を衒つて

白瓜に目鼻をつけたるは夫れ俳優乎

など云ふが此は

白瓜に目鼻つけたが役者なり

とすればよい句だと云ひ、下がゝりの句（淫猥の句）は實感的でなく、假象的に扱ふが可いと云つて

指二本額へ當てゝ下女は逃げ

相模下女いやとかぶりを縱にふり

などを例示し、

肘鐵砲豫定の如く退却し

と云ふ風の當て込みの句（その當時日露戰爭で露軍の語として名高い「豫定の退却」をよみ込んだもの）を排斥し、更に進んでは寫生の要を說いて

砂糖の惡甘いのや、安香水のイヤに臭ふのや、惡酒人を醉はしむるやうな川柳は、決して眞の川柳では無いのぢや。その故どうか先、客觀の方面卽寫生を主として、丁度美術家がスケッチでもする樣な心持で一種の風俗畫をゑがく樣に社會のあらゆる方面にわたつて人々の職業上の特點とか、其人物の癖又は擧動を穿つて十七字に寫生すればソレガ自然ユーモアに上るのぢや。

と云ひ、その一例として口吻の寫生句

お母樣ソリヤ壓制だわと式部泣き　三日坊

それがよくなしアラよくつてよ　政女

を示す。今同氏選の中、特に秀逸と思ふものを左に

遠路のところ御苦勞にも負けにくる　啞竿坊

新聞の法螺が露帝の御意に入り　臺灣坊

キユーピツト矢の拂底に度々困り　呑吐坊

號外や己が手柄の樣に賣り　馬齡

ロシヤでは地震雷火事日本　啞蟬坊

せがまれて乳母は木馬に一すのり　同上

おしやべりが過ぎて義齒をおちことし　同上

人每に唯君だけと皆しやべり　同上

有丈の慾を牧師は天に乞ひ　同上

半纏にはコラとよび女にはモシあなた

前の嫁が〳〵と姑ほめ　　呑吐坊
御最負にとも云ひ兼る葬具商　　宇酸
新婚旅行とは云へ實は二度目也　　同上
灰吹をポンと叩いて偖と云ふ　　啞竿坊
悠然と川岸で一日釣られて居　　井仲者
電話口留守の樂屋が先へ知れ　　中間坊
はへば立て立てば擱めと髯を出し　　幻怪坊
すまし込んで座り込む客間違ひ　　水日亭
ふくれると泣くとより外武器はなし　　アカン棒
あかるみへ出ると鴛鴦右左　　宮坊
日曜は是非來給へと右左　　水品
權助は直覺的に申上げ　　一波坊
饅頭に胃散をつけて大食し　　四國猿
且那この髯はどうしようと床屋聞き　　啞竿坊
煙草入忘れて來たと腰を撫で　　中間坊
裸體畫のはじめ子供が壁にかき　　佐久良
後妻已に姑となり海内を平定す　　一波坊

ラ行變格カ行にサ行ヤヤコシイ　　啞蟬坊
演說はすれど浴衣が縫へぬなり　　啞竿坊
幼稚園保姆眞中で目をかくし　　門外坊
先妻は無疵のやうに後妻聞き　　啞竿棒
乳母車箱根の山で引き始め　　大灣堂
面白いと今日も芝居へ泣きにゆき　　岐陽子
そうだらうウンと自分で返事をし　　同上
寫眞顏よいもわるいも云へぬ義理　　同上
侍んべると英語と交る御手紙　　同上
口をアーンとおあきなさいと齒科醫云ひ　　同上
主人無口細君能辯客ボカン　　片破月
トンネルで讀みかけた字を押へてる　　呑吐坊
自轉車で來て小半日話して居　　天錄
哲學者天知り地知り吾知らず　　一刀齋
延上り見えぬで尙も口を開き　　啞竿棒
貰いたいのはくれずやりたいのは不緣也　　岐陽子
先生のあとをつけたら字引也

裁縫に近眼とう〳〵鼻を縫ひ

川柳は狂歌より以上に普遍的で三十年代以後多くの新聞雜誌に、柳壇、狂句、新川柳、等の名目の下に掲げられたが多くは一般人の座興程度のもので、作者點者も亦一世川柳時代のやうに全力的でない爲めに次第に純文壇より低下して唯雜俳の一つとして景品的娯樂文字となつてしまつた。吾人はこのせち辛い社會苦、人世苦の緩和劑破顏劑として矢張り斯の種の好笑文字の出現を希望する。

散文　**小說**　滑稽小說として有名なものは初期に在つては

假名垣魯文の西洋膝栗毛　十五篇である。三年から五年にかけて出版された。魯文は前期末作家花笠文京の門人で前期今期過渡の小說壇に於ける代表作家である。前期時代には假名讀八犬傳、安政見聞誌、端唄文庫を出し、當期に入つては安倶樂鍋、胡瓜圖解（この二書は滑稽小說の佳作）百猫畵譜、藝者の心得、高橋お傳などを書き、又假名讀新聞、いろは新聞、猫々奇聞、魯文珍報、猫洒落誌等の新聞雜誌を發行して文名を一世に高めたが、就中有名なのはこの膝栗毛である。大體が東海道中膝栗毛の世界的延長とも謂ふべく、二つを比べると左の對照が成立つ

一、人物	東海道中膝栗毛 彌次郎兵衞 北八	西洋膝栗毛 彌次郎兵衞 北八 大腹屋廣藏（横濱の紳商）
二、時代	享和文化の世相	明治初年の世相
三、目的地	京都	倫敦
四、地方色發揮	外面的異國情調あり	

西洋文明の外部的摸倣に汲々たる當時の邦人の心の姿の表れとして觀れば、今日と雖も一顧の價値なきにあらずだが、畢竟聞きはつり（福澤諭吉氏などの洋行談）に才筆をおつかぶせただけで一九のやうな體驗記錄ではないのだから膝栗毛をして機用に時代適應をさせたと云ふ外、清新なユーモラスを見出すことは出來ない。左に上海見物の一節を引く。

彌「そいつは奇妙、オウライト

北「サア〳〵すぐに進發々々

通「マアしづかにしねえ、外の者に知れると我も行かう、おれも行かうで、うるせえのみか、女どもが從いて來ると、足手纏で厄介だからア

北「さうとも〳〵、モシ陳さん、どうかおねがひ申しやす

陳「あなた、まはろ〳〵わたくしおとも

と手まねでしかたを早くものみ込み、

と、これより四人やどをたち出で、あちこちと市中の家々を見あるくに、見るものごとに珍らしければ、一々に立止まり、

北「オヤ〳〵此處の家は何商賣だらう。暖簾に何か書いてあるはえ。エ、何頭店（かしらだな）、ハヽア何でも大店だな

彌「オイ北や、てめへどうして此家が大店と分つたのだ

北「それでも頭の店と看板を出しておく位じや、抱への鳶人足が多勢集つてでも居るんだらう

彌「べらばうめえ、その上に一字書いてあるのを讀めねえからそんな寝言よみをすらア。アリヤ剃頭店といふので日本の髪結床だ

北「ハ、アなる程髪結床が剃頭店、湯屋が洗湯店、着物がてんつるてんで、懐中がすつてんてんか聞いてあきれら

彌「コウ〳〵北や、この國は文字の國だから、めつたなことを言ふと、けし坊主に笑はれるぜ、生聞に讀めるふりなんぞはよすがいゝ、知れねえことがあつたら、ソツとおれに聞け、外聞がわるいからよ

北「イヤハヤたまにわかつたと思つて、強制に幅をきかせるぜ。そんなら向うの生藥屋の看板に書いてある字は何と讀むのだ

彌「ドレ〳〵ウ、あれか、エ、とあれはエ、どうも日本の字引にはアンな字はねえが、ありや大概此國のこさへた字だらう

北「アハ、、、負けをしみもいゝかげんにしねえ、字といふ物は元、支那から渡つたものじやねえか。それにからの字引だの、日本の字引だのと別け隔てはあるめえと思ふぜ

彌「イ、ヤ字の渡つたのは支那からじやねえ

北「そんなら何處からだヨ

彌「イ、ヤ渡つた處はエ、とから〳〵わたるのオ、が日本ばしだいがかはれば八百や〳〵……。

膝栗毛以後、小説壇は一時彼のロマンチックな作品に刺戟せられ、それが新時代の政治的興味と結合して「佳人之奇遇」と云つた風の政治的傳奇小説が盛行し、廿二年（十二月九日）末廣鐵腸の

啞の旅行（菊版前編（廿二年十二月九日發行）四六頁、後編（廿四日二月六日發行）一三四頁、續編（廿四年九月廿七日發行）一三〇頁、合本（廿四年六月三日）十五版（卅四年九月一日發行）青木嵩山堂本）に至る迄滑稽小説の目ほしいものは出なかつた。（小説中局部の滑稽はあつたとしても）この「啞つ旅行」は、作者の體驗もあることゝて本當に洋行赤毛布式を發揮して、吾々が今日讀んでも尚相當に可笑味を感ずる。本當の意味で云ふなら此書こそ膝栗毛の飜案として上乘なものと謂ふべきであらう。

上編は横濱解纜から桑港まで、著者自身をモデルにした政客の一紳士忍先生がリードルの一二卷とパーレーの萬國史を二三十ページ讀みし位なるが近來頻りに洋行が流行するのを見樣見まねに思ひ立つてベルジック號第十八號室にをさまつたまではよかつたが、てんで英語がわからず困つてゐる矢先に一人同乘の客に黄皮髪黑矮少の紳士がゐるのを見つけて、地獄で佛と物言ひかけると「私し魔尼羅です日本人ありません」とやられてションボリ、それから第一日の午餐では食堂での失敗

……ナンデモ初めの方に書いてあるものから取寄せるが善からんとて、第一番の文字を指せは、後に立つ二人の「ボーイ」は笑ひ乍らコソ〳〵話し合ひ、スープ〳〵と小さき聲にて云ふにぞ、紳士も是れは遣り損ひしと氣が付き、急に三四番目の處に指を當てれば「ボーイ」はフウ〳〵笑ひ暫くあつて紳士の前に持來りしは、前に食ひし品と同じき牛の燒肉なれば、紳士は穴にも入りたき程に思へども、中々の强情ものなれば、ワザと己れは是れが一番好物だから二皿食ふのヂヤと云ふ樣な顏付をなし、平氣に小刀にて肉を切り割きムシヤ〳〵〳〵

食ひ終りしが是で止めては夕飯までこらへることが出來まい、ナアニ間違つたら夫れ迄のことだマア二三品やらかせと再び書付を手に取りしが、是れ迄は始めの方へ指を差して失策をしたから、今度は後の方がよからんと思ひ、指の先にてズッと末の方を突けば「ボーイ」はチャ〳〵〳〵と云て一杯の茶を持ち來るにぞ、又間違つたかと獨り笑ひながら茶碗を抱つて飲み干せば非常の熱湯にて舌を焼き、目を白黑しながら、苦痛を忍び、少し上の方を指せしが、是は菓子にて、マダ一通りの食事も濟まず菓物の出ぬ先に菓子を注文するは奇怪千萬なれば「ボーイ」はハア〳〵〳〵笑ひ出し、一つの卓子にある紳士貴女も皆ジロ〳〵紳士の顏を見れば、紳士は溜り兼ね、其の儘コソ〳〵已れの部屋へ逃げ歸りたり。跡にて孰れも高聲にて、何か話し合ひ時々ジャパニース（日本人）と云ふ語の交るは、此の紳士の馬鹿けたるを嘲るものと知られたり。

浴槽と便所とまちがへたり、部屋掃除のボーイを泥坊とまちがつたり、まちがつて叱り飛ばしたが爲めにボーイが來なくなつたり、稅關に贈賄しようとしてはねつけられたり、ヤットのことで桑港着マアケット、ストリートのパレスホテルに投宿、便意が催してもケーブルカーで下りる術がわからず窓から飛び下りて「用事を濟ませ借金を拂ふたる時のやうなる心持」となつたり、食堂のボーイが自分の帽子を精確に渡すのを見て、二千人近い客の帽子をよくも一々記憶したものだと感心して、居合した客から「それは君の帽子は日本字で姓名が書いてあるから特別目立つのだ」と云はれて感心の仕損ひをしたり、切符を買ひ損ねたり、それでも一マニラ人と同行のお蔭で、やう〳〵紐育行の列車に乘り込んだ。と云ふので上編は終り。

オークランドの海陸連絡では「アヽ不思議停車場が海へ飛び出した」と魂消、

亞米利加大陸の汽車に便所のあることは夢にも知らず、何處ぞで汽車が止るかと思ふて苦痛を忍びしに、今は早や下腹が弱り裂ける樣に覺ゆれば、魔尼羅人に向ひ「……小便　…小便……」と小聲に云へど魔尼羅人には意味が分らぬ樣子なれば、側にある平文（ヘボン）氏の英和辭書を取り、英語を搜り出さんとすれども、氣が急くまゝにどうしてもその文字が見えず今は是までと思ひ左の親指を伸してズボンの上に置き、右の手にて水の出る形容を爲せば、魔尼羅人はから〳〵と笑ひ「貴君（あなた）は汽車の内にW.Cのあるのを……と言ひ掛けて、自分にて口を掩ひしは、此聲の側にある婦人の耳に入りしかと氣遣ひしなるべし。ソッと起つて紳士を誘ひ後の一間に來り押入れ樣に造りし處を指したるにぞ、紳士は忙しく戸を開いて其の内に入り、ホッと一息して用事を濟まし、口の内にて「大安心をした」と云ひつゝ側を見廻すに、手を洗ふ水は無く、隅の方に一つの陶器を置き、其上に大きなる氷塊があるにぞ、紳士は心の内に「ナアールホド汽車の中で氷を水の代りにするのは善い考だと云ひつつ幾度となく手を氷の上にすり付けて立出でたり。アヽ穢ナ此の氷こそ臭氣を防ぐが爲めに便器の中に入れ、其の上に溺する者なれば、此時其の氷塊の中央は半ば凹み少しく黃色を帶びしならんに薄闇がりにて紳士の之に氣付がざりしは不覺千萬なり。

厠のかへりに寢臺をまちがつて新婚の夫婦が共寢のカーテンをまくつて大失敗、にげてその次の次をあけると一人の貴女が「貴人は誰れです婦人の寢間を窺ふのは失敬ナ」と怒られてさそくの應答に正反對の「ノウマインド〳〵」と云つてあとで氣がつくと「これはエキスキユース、ミイに對する返辭だつたんだ」と舌打

「ウオートル、吳れろ」と云つてボーイに「ウオーター、クロセット」とまちがへられた話

アメリカには泰平洋、山岳、中央、紐育の四時があることに氣付かず驛で時間をまちがつたこと

紐育のホテルで上水の線を開けつ放しにして科料を拂はされたこと。

魔藥をかゞされて掬摸られたこと

大西洋を渡航して英吉利に向ふ中途、婦人を尊敬すべきを學んだ忍先生、プーア、ウーメン（娼妓）に敬意を表して牧師其他の同船客に排斥せられること。

リヴアプールに着いて稅關の檢査官に向ひ

紳士も何心なく帽子を取ればコハ如何に葉卷の煙草が百本ばかりパラ〳〵と前に落ちたり、役人は笑を忍んで紳士に向ひ「是れはどうしたので有ります」と問はれて紳士は答に窮せしが顏を眞赤にしながら「多分天からでも降つて來たのでありませう」

龍動（ロンドン）のチョウコハムの下宿に滯在して同宿の日本人と出かけたが中途ではぐれて。大まごつき——、それからやつと歸つて來ての對話。

「どうも確かには分らんが、停車場の眞ん中に「ピールス」と大きう書いてあつたから、ピールス、ステーションだらう。

「ハアヽピールスは何處の停車場にも出してあるシャボンの廣告だ

「そうか……アヽ夫れ新聞紙と同じ名さ、思ひ出した〳〵スタンダード

「夫んな停車場の名があるものか、夫も新聞社の廣告である

と云はれて紳士は愈々赤面し

「分つた〳〵ゼントルメン〳〵

「ハアヽ〳〵雪隱の札を見て停車場の名と思ふたのは可笑しい

紳士は眞面目になり

「英語では雪隱のことを紳士と云ふかネ

「男の便處と云ふ意味でゼントルメンと書いてあるのサ

「ナアルホド夫れでゼントルメンが雪隱……今日は一つ善いことを聞いた。

で、こんどは、巡査や、マニラ人に便所をきくに「ゼントルメンは何處にあります」と云つて怪愛な顏をされる　……こまでが後篇。

山崎と云ふ日本人と連になつて花の都の巴里に乘り込んだはよかつたが、珈琲店へ一寸入つて七十法（フラン）と云ふに度膽を潰し、とまる宿屋がないとて

「愈々ホテルが分らんと野宿する外は無い困つたものだ」

と途方にくれたり、アウエニヴ、カルノウ町へ行くのをまちがへ大統領カルノウ氏の官舍に馬車を横づけにして平あやまりにあやまつたりして、マルセイユに行き地中海を横ぎり、亞丁の海で小供の銅貨投げにまちがつて金貨を七十法も投げてやり、囊中拂底して國へ電報を打つ料金もなくなつてずるい一計を案じてローマ綴で

コノホウノ　シンダト　イフノハ　マチガヒデアル・フツコクセンデ　ライゲツハシメ　キチヤウス

を一綴にして出すと役員が「外國語は十字の綴りを一語と見做しますから、其の積りで代價を拂ひなさい」と云ふに閉口して、又々絞る苦肉の一策

「夫なら差出人の名前には制限はありませんか

「名前は幾ら長くても差支ありません

夫なら旨い仕方があると、心の内にて笑ひ乍ら、今度は差出の名前の處へ「佛國飛脚船で來月始に歸國すサイゴンに於て忍(そし)」と羅馬字にて認めて差出せば役員はジロリと忍(そし)の顏を眺め、

「是が貴君の御名前でありますか減法長いではありませんか

「左樣さ日本には長い名前があります。昔には彦波漱武鵜鷬草葺不合尊と云ふ天子がありました。法政寺入道前關白太政大臣も、矢張姓名のやうなものです

「アー左樣か、かう長くては氣絕した時呼立てるに、不都合でありませうな、夫れはさうと此には受取人と差出人の名前ばかりで、電文がないではありませんか

忍は拔からぬ顏にて

「名前さへ云つて遣れば善いのですが

と云ひ乍ひ「無事」の二字を書き入れ、代價を拂ふて電信局を立ち出で「どうだうまく遣つたらうがね」

と、それより上海、香港、神戸と云ふ順で歸つた。上海では

昔し越後の者が始めて高崎へ出て江戸も此んな處であるかと問ふた話しがあるが、日本人が始めて上海を見た時は矢張りそんな者であるだらう。

なども云ふ……續編。

此書のすぐれてゐることは、前にも云つた通り

一、作者の體驗記錄たること。

にあるが、尙

二、作者をモデルにした「忍」と云ふ主人公はいつも失敗を演じて、作者のとつた態度が徹頭徹尾自嘲、自謙にあること。

三、作中の記事は多くの洋行者のとる徑路の好模型たること

四、讀者のまだ見ぬ歐米の文化生活に對する憧憬

五、文體は厭味のない平明な口文語混淆體なること、まゝ漢詩漢文も出てゐるが、その出し方にも嫌に氣取つた跡がなくてよい)

なども相俟つて博く愛讀せられたものであらう。

(大正十二年十月中旬上京の節、電車をまちがつて一高前で下りた序、とある古本屋に寄つて買つた中に此書があつて暫らくほつたらかしにしたものを十二月の末にフト見る氣になつて讀み出して、段々つり込まれてとう〳〵一氣呵成に卒讀した記憶は今尙新しい。)

櫻庭葦村氏の「お蓬參り」　(葦村叢書七〇三―九九六)は、いつ頃作られたものか知らぬが余が見たのは大正元年九月十日の小說文庫本の中のそれで、喜多七、と與次(栃木與次郎兵衞)とが伊勢參りの道中記で、云はば、一九の膝栗毛を明治の世話に碎いたやうなものである。文章は氏一流の軟かい優麗調の地の文と通人がかつた對話、筋は中途の失敗數々……だがその中に無錢旅行の樂隱居を助けたり、心中者の若夫婦や、瞽濕厭世の靑年の自殺を思ひとまらせたり非人を助けたり善根を積んだ報いで到る處意外の欵待を受けてめでたし〳〵に終つてゐる。沿路の地理解說や歷史的考證もよく行き届いて居て長篇ではあるがたるみはない。唯一篇を讀み卒へての感じは「どうも作り物だ」と云ふ氣持がつよ

いだけが遺憾だが器用な作品であり形式に於ては此迄の明治物では一番すぐれてゐる。

傳奇的政治小說盛行以後、斯壇は逍遙氏の寫實提唱、硯友社の發展、紅露二家の活躍、歷史小說、理想小說、觀念小說、深刻小說、社會小說、敎育小說、家庭小說、自然主義的小說と目まぐるしい一轉一變があつて滑稽小說は最早や斯壇の地步を失つて俗人の俗趣味を充たす程度のものに墮してしまつたが、三十八年

夏目漱石氏の「吾輩ハ猫である」（雜誌ホトトギス、大倉書店の單行本、漱石全集本）が出て、始めて新時代の敎養ある紳士淑女のユーモラスを表現し得た。

一、「吾輩は猫である。名前はまだ無い」の一段は猫の生理性に卽しながらも、苦沙彌先生の宅に來た不思議な緣を面白をかしく語り、次に苦沙彌が學者氣取りの居睡屋なることをすつぱ抜き、人間の我儘をさらけ出し、後架先生の渾名を紹介して

元來此主人は何といつて人に勝れて出來る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつて「ほとゝぎす」へ投書をしたり、新體詩を明星へ出したり、間違だらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはヴァイオリン抔をブー〳〵鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張り是は平の宗盛にて候を繰り返して居る。

人間は猫が折角とつた鼠を交番へ持つて行つて五錢に代へるエゴイストだ。とも云ひ、

主人の水彩畫の成つてないこと、

迷亭（好い加減な事を吹き散らして人を擔ぐのを唯一の樂しみにして居る美學者）がアンドレア、デル、サルトの一件

二、年賀狀の繪葉書の猫を熊とまちがへること、

寒月の來訪と對話

此寒月といふ男は矢張り主人の舊門下生であつたさうだが、今では學校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話である。此男がどういふ譯か、よく主人の所へ遊びに來る。來ると自分を慕つて居る女が有りさうな、無ささうな、世の中が面白さうな、詰まらなさうな、凄い樣な、艶つぽい樣な文句計り並べては歸る。

二人が連立つて外出すると吾輩は喰殘しの蒲鉾を失敬する。二人の子供が砂糖壺から一杯一杯又一杯とパンにつけるべく競爭で掬つて壺をからつぽにする。

主人が日記にタカヂアスターゼを攻擊する。

神田の某亭で晩餐を食ふ、久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大變いい。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカヂアスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利かないものは利かないのだ。

次に有名な雜煮の舞

これは畔柳都太郎氏が材料を提供されたと云ふ。こゝにバルザツクが作品中の女主人公にマーカス、ジエーと云ふ命名をするのに一日巴里をあるきまはつた記事があるが、枝葉の想で少しく衒學的な嫌がある。

我輩は戀猫の三毛子のこと、三毛子の主人は二絃琴の女師匠で

何でも天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁に行つた先の御つかさんの甥の娘なんだつて

と云ふむづかしい系圖立

氏の母君「お千枝」と云ふのはもと明石藩出で十年も御殿奉公をせられたと云ふから、自然こんな着想をせられたものだらう。

次に詩人越智東風が來訪して、迷亭にかつがれたと云ふトチメンボー事件

これは明治の狂言とも謂ふべき趣向新體詩朗讀會賛助員を承諾（これは氏が實歴にもあること）東風から第一回の試演の樣子を聽くと、近松の心中物をやつて船で芳原へ行く所を演じたと云ふ。

主人は花魁（おいらん）といふ名を聞いて一寸苦い顏をしたが、仲居、遣手、見番といふ術語に就いて明瞭の知識がなかつたと見えて先づ質問を呈出した。「仲居といふのは娼家の下婢にあたるものですかな」「まだよく研究はして見ませんが、仲居は茶屋の下女で、遣手といふのは女部屋の助役見たやうなものだらうと思ひます」東風子はさつき其人物が出て來る樣に假色を使ふと云つた辭に、遣手や仲居の性格をよく解して居らんらしい「成程仲居は茶屋に隷屬するもので、遣手は娼家に起臥する者ですね。次に見番と云ふのは人間ですか、又は一定の場處を指すのですか、もし人間とすれば、男ですか、女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひます」「何を司つて居るんですかな」「さあ、そこ迄はまだ調べが屆いて居りません。其内調べて見ませう」

次は迷亭からの來狀

明日は某男爵の歌留多會、明後日は審美學協會の新年宴會、其明日は鳥部教授歡迎會、其又明日は……

右の加く謠曲會、俳句會、短歌會、新體詩會等會の連發にて、當分の間は、のべつ幕無しに出勤致し候爲、不得已賀狀を以て拜趨の禮に易へ候段不惡御宥恕被下度候

から始まつて「孔雀の舌」の講義や、古代羅馬人の嘔吐術を長々と紹介する。

こゝは一寸黃表紙的な滑稽だ。

天璋院樣云々の二絃琴の師匠の宅では女主人と女中とが散々に主人と我輩とを惡口してゐる、

「教師と云ふのは、あの毎朝無作法な聲を出す人かえ」「えゝ顏を洗ふたんびに鶯鳥が絞め殺される樣な聲を出す人で御座んす」

尙この女師匠には反現代的の語が多い「舊幕時代に無い者に碌な者はない」など巨人引力の名文、首懸の松、寒月の方向を反對の身投げ（こゝは、氏がゼームスの心理學を愛讀してゐたと思はれる心理解說と、ロチレライの巖を喜劇的に茶化した筆致）處がその川底で呼んだやうに思つた愛人の〇〇子は「二三日前年始に行きましたら、門の內で下女と羽根を突いて居ました」と云ふ。（こゝは氏の作、琴のそら音の落想と同じだ）主人が攝津大椽を聽かざるの記を話す、（併しこゝの主人の物語はあまり流暢輕快で、寧ろ迷亭の口調だ）三毛子の死、猫譽信女と戒名して葬送。

三、月末勘定と鼻毛の植附、天然居士の墓碑銘、主人の留守に迷亭細君と主人の噂（こゝにタークキン、ゼ、ブラウドを樽金、などは駄洒落である）細君が主人の常套語の月並と云ふ語（これは氏が正岡子規と親交があつたから子規のよく云ふ月並を取材したもの）について「月並つて何のこつてすの」ときくと、例の迷亭すました顏で

中學校の生徒に白木屋の番頭を加へて二で割ると立派な月並が出來上がります

など云ふ。

寒月が理學協會でする演說の下稽古、題は「首縊りの力學」主人と迷亭が聽衆の代りで間のぬけた合槌を打つ

先づ女が同距離に釣られると假定します。又一番地面に近い二人の女の首と首を繫いで居る繩はホリゾンタルと假定します。そこで$A^1 A^2 \cdots\cdots A^6$を繩が地平線と影づくる角度とし、$T^1 T^2 \cdots\cdots T^6$を繩の各部が受ける力と見做し$T^7 = X$は繩の尤も低い部分の受ける力とします。Wは勿論女の體量と御承知下さい。

どうです御分りになりましたか。

迷亭と主人は顏を見合せて「大抵分つた」

と云ふ。但し此大抵と云ふ度合は兩人が勝手に作つたのだから、他人の場合には應用が出來ないかも知れない。

「偖て多角形に關する御存じの平均性の理論によりますと、下の加く十二の方程式が立ちます。

$$T_1 \cos A_1 = T_2 \cos A_2 \cdots\cdots\cdots\cdots (1)$$

$$T_2 \cos A_2 = T_3 \cos A_3 \cdots \cdots\cdots (2)$$

「方程式は其位で澤山だらう」と主人は亂暴なことを云ふ。「實は此式が演說の主腦なんですが」と寒月君は甚だ殘り惜し氣に見える。「夫ぢや首腦だけは逐つて伺ふことにしようぢやないか」と迷亭も少々恐縮の體に見受けられる。「この式を略して仕舞ふと折角の力學的研究がまるで駄目になるのですが……」「何、そんな遠慮は入らんから、ずん〳〵略すさ」と主人は平氣で云ふ。「それでは仰せに從つて、無理ですが略しませう」「それがよからう」と迷亭が妙な所で手をばち〳〵と叩く。

獨逸人と東風との對話

鼻子が令孃の緣談につき寒月のことを主人に聞き合はせに來る（此夫人と、鈴木と云ふ會社員だけが此作では嘲笑的に扱はれてゐる。次にあげる夫人の風貌は夫人自身にとつては不快だらうが第三者の讀者から觀ては警句と誇大と譬喩とに興味があらう）

かの鋭い聲の所有主は、縮緬の二枚襲を疊へ擦りつけながら這入つて來る。年は四十の上を少し越した位であらう。拔け上つた生え際から前髪が堤防工事の樣に高く聳えて、少くとも顏の長さの二分の一丈天に向つてせり出して居る。眼が切通の坂位な勾配で、直線に釣るし上げられて左右に對立する。直線とは鯨より細いと言ふ形容である。鼻丈は無闇に大きい。人の鼻を盜んで來て顏の眞中へ据ゑ附けた樣に見える。三坪程の小庭へ招魂社の石燈籠を移した時の如く、獨りで幅を利かして居るが、何となく落ち附がない。其鼻は所謂鍵鼻でひと度は精一杯高くなつて見たが是では餘りだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかかつて、下にある唇を覗き込んで居る。かく著しい鼻だから此女が物を言ふときは、口が物を言ふと云はんより、鼻が口をきいて居るとしか思はれない。吾輩は此の偉大なる鼻に敬意を表する爲、以來此女を稱して鼻子々々と呼ぶ積りである。

夫人歸宅後の批評、金田邸へ吾輩の斥候

（次に夫人の手先が主人の讀書を妨害の魂膽――、こゝは、高濱虛子氏の「漱石氏はよく氣を廻す人であつた」と云ふ話が思ひ出される）

迷亭が鼻哲學のお談議、主人作の鼻の俳體詩、（こゝには前の寒月の口吻をくりかへして一層をかしみが有效に發揮されてゐる）

私の證據立てようとするのは、此鼻と此顏は到底調和しない。ツアイシングの黃金律を失して居ると云ふ事

なんで、それを嚴格に力學上の公式から演釋して御覽に入れようと云ふのであります。先づ日を鼻の高さとします。aは鼻と顏の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云ふ。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困たな、君は理學士だから分るだらうと思つたのに。此式が演說の首腦なんだから、之を略しては今迄やつた甲斐がないのだが――まあ仕方がない、公式は略して結論だけ話さう」「結論があるか」と主人が不思議さうに聞く。「當り前さ結論のない演說は、デザートのない西洋料理のやうなものだ――、いゝか兩君よく聞き給へ、是からが結論だぜ。――偖て以上の公式に、ウイルヒョウ、ワイズマン諸家の說を參酌して考へて見ますと、先天的形體の遺傳は無論の事許さねばなりません。……」

とそこで鼻も遺傳するが故に、此結婚は中止せよと結ぶ。

四、冒頭には氏の職業觀、處世觀が猫の口を藉つて表白されてある。

金田の主人と鈴木（苦沙彌の舊知）との對話、

細君の禿

鈴木藤十郎金田主人の命を含んで苦沙彌訪問（木菴の贋物や云々とあるが、氏は元來贋物趣味とも謂ふべき人で、本物はブールヂョアでなくては手に入れられないから上手な贋物を持つて樂しむがよいと云ふ。その趣味があらはれてゐる）鈴木の心理分解……そこへ迷亭が飛込んで來て各自の學生時代の追懷談（これは成程よい思ひつきだと思はれる）迷亭が學生時代に「僕は今にきつと美學原論を書いて見せる。若し書かなかつたら西洋料理をおごる」と云つておきながら、本も書かず、料理もおごらなかつた話も出る。

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする

主人「無論さ、その時君はかう云つたぜ。吾輩は意志の一點に於ては敢て何人にも一歩も讓らん。然し殘念なことには記憶が人一倍無い。美學原論を著さうとする意志は充分あつたのだが、其意志を君に發表した翌日から忘れて仕舞つた。夫だから百日紅の散る迄に著書が出來なかつたのは記憶の罪で、意志の罪ではない。意志の罪でない以上は、西洋料理抔を奢る理由がないと威張つて居るのさ

鈴木「成程迷亭一流の特色を發揮して面白い」

此は子規隨筆を見ると、子規が漱石に向つて「漱石は米のなる木を知らぬ」とからかつた時、氏が「馬鹿ア云へ、米も喰ふ、稻も見た、唯此二つを結合する知識がない迄さ」と返したと云ふその趣によく似てゐる。

迷亭は「今日は一大珍報を齎した」と云ふ。「君は來るたびに珍寶を齎す男だから油斷が出來ん」と云ふ。……迷亭は

此頃トリストラム、シヤンデーの中に鼻論があるのを發見した。金田の鼻などもスターンに見せたら善い材料になつたらうに殘念な事だ。云々

スターンのトリストラムシヤンデーは氏が洋行前――八九年頃江湖文學誌上に紹介せられたもので、氏の創作性を害する程ではないが、彼我の構想頗る酷似して或意味に於て氏の扮本とも謂ひ得る。

五、冒頭には

……花曇りに暮を急いだ日は疾く落ちて、表を通る駒下駄の音さへ、手に取る樣に茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛を吹くのが絶えたり續いたりして、眠い耳底に折々鈍い刺戟を興へる。外面は大方朧であらうと云ふ美文があつて、それから泥坊の忍び込み、泥坊哲學の談義（こゝは坪内逍遙氏の馬骨人言と似た筆致）泥坊は、

山の芋の箱（肥前唐津の多々良三平から土產に貰つた）を千兩箱とでも思つてか、大事に盜んで行く

それから子供のちやんちやんを二枚、主人のめり安の股引の中へ押し込むと、股のあたりが丸く膨れて靑大將の蛙を飲んだ樣な――或は靑大將の臨月と云ふ方がよく形容し得るかも知れん。（此三平はモデルがあつて本籍は一寸ちがへてある）

泥坊闖入の翌日巡査がやつてくる

「それで盜難に罹つたのは何時頃ですか」と巡査は無理な事を聞く……

「さうですね」と細君は考へる。考へれば分ると思つて居るらしい。

巡査が歸つたあとへ三平が訪づれる。細君は自分の頭の禿と、主人がいつも「オタンチン、バレオロガス」と罵るのとを結合して

「オタンチンと云ふのが禿と云ふ字で、バレオロガスが頭なんでせう」

ときく、三平は「さうかも知れませんたい。今に先生の書齋へ行つてウエブスターを引いて調べて上げませう」

主人が歸宅、三平と連つて散歩。（こゝに氏の休養論がある）我輩の初陣（鼠の捕りそこね、臺所の寫生文の巧い所がある）

六、人間の自家撞着、迷亭が留守に來て

「奥さん御飯と云やあ、僕はまだ御飯を頂かないんですがね」と平氣な顏をして聞きもせぬことを吹聽する

…「今途中で御馳走を誂へて來ましたから、そいつを一つ頂きますよ」……妻君「マァ？」と云つたが其まあの中には驚いたまあと、氣を惡くしたまあと、手數が省けて難有いと云ふまあが合併して居る。

主人歸宅、迷亭は十四通りに使へる鋏を得意げにひけらかす（煙草切、喰切、定規、物指、鑢、金槌、釘拔、錐、字削ナイフ、寫眞挾等）寒月博士論文持參「蛙の眼玉の電氣作用に對する紫外光線の影響」と題するもの。迷亭の失戀談。迷亭、友人「老梅君」の失戀談。（こゝにミユセの脚本に出た女性觀について主人と細君の論爭がある）迷亭、幼少の頃女の兒を唐茄子のやうに籠に入れて賣り歩いてゐるのを見たと云ふ話。寒月の現代女性評、迷亭アグノヂス產婆の話。東風の來訪金色夜叉のお宮に扮した話。主人の新案になる俳劇（この構想は紅葉の小說「むき卵」にあるモデルの女お喜代からヒントを得たものと思はれる）東風の詩集（こゝに近頃の新體詩評がある）主人の短篇「大和魂」の話。

七、運動、海水浴の歷史、吾輩の運動――蟷螂狩、蟬取り、松滑り、馳け下がり、垣巡り、錢湯の觀察

昔から利口な人は裏口から不意を襲ふことにきまつて居る。紳士養成法の第二卷第一章の五ページにさう出て居るさうだ。其次のページには「裏口は紳士の遺書にして自身德を得るの門なり」

裸體畫問題、衣裳哲學とも題すべき記事があり、三馬の浮世風呂を現代式で行つた筆致、主人の入浴振り、細君が「ハイ」と答へると「そのハイは感投詞か、副詞か、どつちだ」ときく、（こゝに語原說を絡ませた滑稽がある）

八、主人の庭の垣巡り、落雲館事件（私立中學落雲館の生徒が主人の怒るのをからかつて、わざとボールを庭にころがしておいて拾ひに來ると云ふ事件、これもモデルがあつた。主人が學校へ故障を申込むとこんどは又ウルサク「一寸ボールが入りましたから入らせていたゞきます」と斷りに來る。この趣は徒然草の榎木の僧正と似てゐる。

催眠術の甘木先生や哲學者の獨仙が來る。

九、主人の痘痕面　鏡のこと、縫田針作や天道公平からの來書、迷亭の來訪、（靜岡の伯父同道）刑事巡査の來訪

おい此方は刑事巡査で先達ての泥坊をつらまへたから、君に出頭しろと云ふんで、わざ〳〵御出でになつたん

だよ」

主人は漸く刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥坊の方を向いて丁寧にお辭儀をした。泥坊の方が虎藏君より男振がいゝのでこつちが刑事だと早合點をしたのだらう。

十、主人の朝起　子供三人の洗面

坊ちやんも中々自信家だから容易に姉の云ふ事なんか聞きさうにもない「いや――よ、ばぶ」

……其癖此姉はつい此間迄元祿と双六とを間違へて居た物識りである

……火事で葺が飛んで來たり。御茶の味噌の女學校へ行つたり、惠比壽臺所と竝べたり、或時杯は「わたしや藥店（裏店）の子ぢやないわ」

子供の朝飯、主人の姪の雪江來訪、（八木先生の演說を話す）主人日本橋堤分署から盜難品を受取つて歸る。無用長物、保險加入、蝙蝠傘などの話。

文明中學校の生徒武右衞門の訪問（こゝの艶書事件も佳章の一つと云つて謂い。自分の受持だのに名前も知らぬ程の主人と金田の令嬢をからかふつもりで「文章は濱田が書いて、僕が名前をかして遠藤か夜あすこのうち迄行つて投函したんです」と云ふ學生との對話が對蹠的に進行するのを襖のかげから細君と姪の雪江が立聽きして腹を抱へて笑つてゐると云ふ筋で對話の活き〳〵してゐる所がうまい）

寒月來訪、動物園の虎の話、寒月苦沙彌を上野公園へ連れ出す。

十一、迷亭と獨仙とが來て圍碁

「とにかくやらう」「君が白を持つのかい」「どつちでも構はない」「流石に仙人だけあつて鷹揚だ。君が白なら自然の順序として僕は黑だね。さあ來給へ。どこからでも來給へ」「黑から打つのが法則だよ」「成程然らば謙遜して、定石にこゝいらから行かう」「定石にそんなのはないよ」「なくつても構はない。新奇發明の定石だ……」

「づう〳〵しいぜ、おい」

「Do you see the boy か。――なに君と僕との間柄ぢやないか。そんな水臭い事を言はずに、引き揚げてくれ給へな。死ぬか生きるかと云ふ場合だ。しばらく、しばらくつて花道から驅け出してくる所だよ。

「こゝには此種の警句的な滑稽語が頻發されてある。思ふに圍碁そのものが已に浮世離れのしてゐる處へ、打つ人が仙人じみた獨仙と慓輕な迷亭なのだから場面想ふべしだ。取材がうまい上に表現も巧みだ。

Do you see　で思ひ出されるのは故和田垣博士の英文和譯問題の秀句である。

'O my march march care no thought'

と提出して學生が思案にあぐんでゐると

お前待ち〳〵蚊帳の外

と譯してケロリ、氏のこの語はそれから思ひつかれたものか。否ユーモラスな心持と英文の素養が契合して自然に出たものであらう。

一方では主人、東風、寒月の對座、寒月ヴアイオリンの話、同結婚の話（國元の知るべの令嬢と）探偵、刑事の話、獨仙、スペイン、コルドヴ水泳の話、迷亭結婚不可能論、主人「タマナス、ナツシ」の女性觀をよみきかす、三平來訪、金田の令嬢と結婚のことを話す、猫の臨終――

と云ふに終つてゐる。

批評　一、作の動機と作品の種類。「ホト、ギス」は子規、虚子などの同人何れも以前からの知己でもあり、洋行中にもあちらから折々投書した位だつたから、歸朝後も折々筆を執つて居たが、その中に此書の一が出來た。題はなかつたのを虚子氏か始めの語をとつてつけるがよからうと云ふので「吾輩ハ猫デアル」とした處、これが非常の好評だつたので更に二を足し三を足し、囘は一囘と世は歡迎する。氏にもあぶらがのる。とう〳〵三十八年の一月一日から、三十九年の八月一日まで一年八ヶ月の功程を經た。當時の日本は彼の日露の交戰でやかましい時で、當時の著者は西丹波の片田舍に小學校訓導として奉職してゐた。その時その村に京都大學の法科に行つてゐる有田邦敬氏(今の大阪市助役)が歸省の際一近頃珍しい小説だから讀んで御覽なさい」と云つてこれの前編を持つてこられた。あまり面白いので二日程でよんでしまつてその頃の教育學術界に感想を戴せた處が、當時神戸に在つたS氏が來て、その話をして「君アリャ俳文小説と云ふものですよ。俳句の趣味で綴つた小説です」と云つた。當時余は教育學を研究してゐたので文學は娯樂的に見る位のことゝて、さまで氣にもとめてゐなかつたが、何しろ面白いので、その後も有田氏から中編後編を借りて讀んだ。その後國文學を專攻することになつて岩城準太郎氏の明治文學史を見ると氏の作品を世間では低徊小説又は餘裕派の小説と云ふと書かれてある。成程適當な名稱だと思つてゐる中にも氏の作品はその後續々公刊されて中には必ずしも低徊趣味をもつたものとは云ひ難いものをも見た。氏の晩年沒後にかけては名聲愈々重くなつてその作品に對する論議は色々の人によつて色々の場合にせられた。中にも

新小説臨時增刊文豪夏目漱石
森田草平氏の文章道と漱石先生
高濱虚子氏の漱石氏と私
帝國文學所載藤代素人氏の猫文士氣炎錄
漱石全集　同別冊
朝日新聞紙上諸家の追悼談
太陽、ほのほ、はがき文學諸雜誌の記事

などをあさつた。

俳文小説だと云つた評も強ち無理ではない。氏自身俳句をよくよまれたし、紹介したのも俳句の雜誌なり、内容にも俳諧詩や俳劇の趣向があるし、苦沙彌、寒月、迷亭、獨仙、三平と主要人物の性格言動は孰れも一種の俳味を帶びてゐるし、簡結でキビ〳〵した寫生文の筆致も俳句的だ。けれどもそれにしては獨仙などの禪味や東風式の星菫的生活情調や多くの西歐文藝、風俗、レオナルド・ダヴィンチ、だとかデーメルだとか、古代羅馬だとかスペインのゴルドヴァと云つた風のことが外れてしまふ。

餘裕派小説は氏自身虚子氏の作品鷄頭の序文に「小説は必ずしも死生の間に彷徨する切迫感情をもらねばならぬと云ふ譯のものではない。菊を東籬の下にうゑて悠然として南山を見る底の閑適なものもあつて然るべきだ」と樣に云つてゐる處から推しても、此作品のどのページを見ても金色夜叉のお宮のやうな強い悔恨もなければ不如歸の浪子のやうな戀の切なさもない。村井長庵やその他默阿彌の白波物に見られるやうな獰猛な盜賊はなくて、金箱と山の芋とをまちがへるやうな「親愛なる泥坊君よ」とでも云ひたいやうなコソ〳〵が一人あるだけだ。泉鏡花の高野聖に出る女のやうな神秘味はなくて平凡で明瞭すぎるやうな富子孃雪江孃が居るだけだ。廣津柳浪の變目傳のやうな恐しい殺人犯はなくてお茶の味噌の女學校へ行つたり、藁店の子でなかつたりする子供が砂糖の窃盜犯をやつてゐる。だから此を餘裕派小説と

云ふに何の不都合もないやうである。が、それにしては金田の夫婦や、才子の鈴木はどうだらう。愛孃の結婚談で血眼ではないか。主人に取入るべく鞠躬如たる有樣ではないか。主人の胃病、寒月の博士論文、天然居士の夭折、隣り近所の口さがなさなどよしそれが反面的に餘裕づけるものがあるにしても、そのものゝ奥底は愁もあれば涙もあれば恐れも不安もあるべきである。況んやその落想には猫自身すらも

呑氣と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟つた樣でも獨仙君の足は、矢張り地面の外は踏まぬ。氣樂かも知れないが迷亭君の世の中は繪にかいた世の中ではない。寒月君は珠磨りをやめて

とう〳〵御國から奥さんを連れて來た。是が順當だ。然し順當が永く續くと定めし退屈だらう。東風君は今十年したら、無闇に新體詩を捧げる事の非を悟るだらう。三平君に至つては、水に住む人か、山に住む人か、ち

と鑑定が六づかしい。生涯三鞭酒を御馳走して得意と思ふ事が出來れば結構だ。鈴木の藤さんはどこ迄も轉つて行く。轉がれば泥がつく。泥がついても、轉がれぬものよりも幅が利く。

と云つて、果ては生者必滅觀の下に大往生を遂げたと云ふではないか。

又、之を一種の喜劇と觀る觀方もあらう。

一、人物　水野苦沙彌（文明中學の英語教師）

迷　亭（美學者）

水島　寒月（理學士）

金　田（富豪）

同夫人鼻子

同令孃富子

雪　江（苦沙彌の姪）

越智　東風（新體詩人）

多々羅三平（法學士）

二絃琴の師匠

古井武右衞門（文明中學二年生）

八木　獨仙（哲學者）

珍野　夫人

坊　ば

すん子

とん子

女中二人

泥　坊

近所多勢

一、場處　第一齣　苦沙彌宅

第二齣　二絃琴の師匠の宅

第三齣　苦沙彌宅

第四齣　上野公園
第五齣　金田邸　返し苦沙彌宅

季節　明治卅八年一月一日より約一年半の出來事

などすれば少し手を入れて脚本として、上場することも出來さうである。けれども此中に表はれた、人生批評や文化批評とも謂ふべき心理分解や、戀愛觀や、女性觀、夫婦觀、社會觀、風俗觀に至つては到底原作を活かすまでに實演することはむつかしい。ではレーゼ、ドラマとして成り立つかと云ふに、幾らか樂に改作が出來るかもしれぬが餘りに甚しく劇の約束を無視して、無拘束な單元の切り方である。のみならず肝腎の「猫」そのものが第三者の立ち場から觀測し思惟し批評する氣持はどうしても表しにくい。其上に此作は徹頭徹尾喜劇的の內容だとは云へない。

そこで余は作者の本意は那邊に在るかは知らぬが矢張滑稽小說の中に入れようと思ふ。小說とすれば、この體裁は極めて自然であり、且つ從來我邦の小說よりも奇拔である。(尤もそれ迄とても枯川氏や二三氏によつて紙幣や貨幣の身の上噺めいた自叙體はあつたが此程長篇の傑作はなかつた) 此作にだつて滑稽でない場面は可なりあることは前云つた通りだが、併しどの齣をとつてもそれら非滑稽は滑稽の前提か、滑稽を引立たす爲めにのみ交へられてある。幾ら膝栗毛だつて字々句々悉く滑稽とまでは書く譯に行かぬ。已に滑稽と云ふのが相對的の感情で主人の本氣違ひに細君の世帶狂、迷亭の瓢輕に寒月の澄ましやう。獨仙と迷亭とが仙氣と茶氣とで碁を打つ、間拔けた武右衞門と無愛想な苦沙彌とやうにそれ自身單獨で起きるものでもなく、泥坊が入るので山の芋もをかしく、迷亭が茶化すので夫人の鼻もをかしく、二絃琴の師匠だから御幣かつぎも引き立つのである。

それに、これは(或は氏に對して失禮な云ひ分だが)此作の始めは一回切りでよすつもりだつたのが讀者の歡迎によて氏が乘氣になり一回、一回又一回と長篇にしたのは彼の十返舍一九が東海道切りの豫定であつた物を存外の好評に書肆の懇望で段々延長して琴平道中以下を出したのと其趣がよく似てゐる。膝栗毛が一九の出世作たりしが如く此作は氏の出世作で、此迄とても一英文學者としては知る人ぞ知るであつたらうが、あゝまで氏の名がポピュラーになつたのは此作以來である點まで酷似してゐる。氏が純粹學者であつたこれまでの生のわだちを學者兼創作家に向け純創作家に轉回させたのも此一作であつたと觀てもよい。(無論其他の點に於て氏を一九と比較することは失禮でもあり失當でもある。

滑稽小說には相違ないが、當初氏が執筆した時はまだはつきりしたモチーヴは無かつたと觀るべきだ。漫然筆を執つて何がなホトヽギス向なことで自己の品位を傷つけない程度で一つ洒落を云つて見よう位のところであつたらう。卽ち當初の作意は小說よりは寧ろ隨筆とも謂ふべきものであつたらう。併二回三回と重なるに連れて構想に技巧がこもつて段々小說的手法を意識的に用ひた跡が見えてゐる。で之を以て氏の安全瓣と做し、この作品の下に氏が在來のあらゆる鬱を散ぜられたと觀ることも當初の分については妥當であらう。けれども氏が已往の閱歷に於て體得したことは此しきの僅かなものではなかつた。一たび「滑稽小說を」とねらひが定まつてからは、よしや自分の言ひたいことでもその趣意に不恰好のものは故意に避けられたであらう。(でなければ坊ちやん以下の多くの作品の創作心理は辿られなくなる) 要するに後世否な現在でも文學史觀の上では此作を以て劃時代的な滑稽小說と推すのが最も妥當であらう。

此作の優越點　はどこに在るか

第一、氏が此種作家として立派過ぎる程の教養のあつた事である。英文科專攻の文科大學教授の、後日文學博士(それも不承々々)になる程の氏か一滑稽小說を作ると云ふ事は、牛刀鷄肉の觀すらある位だのに、俳句に漢詩に英詩に英

文に南畫に油畫に書に禪に往くとして可ならざるなき多能で、江戸の舊家の五番息子として、きかん氣と洒落とは持つて生まれた江戸ッ兒氣質で、講談落語は早くから好んで、ヤンヤと唸る大向ふ連にも加はつたと云ふのだから滑稽な着想に事缺くやうなことはなかつたらう。迷亭が寒月と富子との結婚を遺傳的方面から不贊成だと唱へたり、百科全書の月賦を滿期後までも拂込む（これは大學の貸費償却につき氏の實驗があるとは云へ）のは習慣の惰性によると云つたり繪畫論や美術論や戀愛觀や女性觀を茶化しながらも尤らしく肯かせる迄に表現したのは氏が原書の素養からであらう。「月並」をかついだり、俳體詩をつくつたり、俳劇を思ひついたりするのはどうしても俳人漱石のやゝくちだ。「電光影裏に春風を斫る」とか「薫風南より來つて殿角微凉を生ず」とか「鐵牛面の鐵牛心、牛鐵面の牛鐵心」と云つた風のことを烏鷺混戰の間に口走らせるのは禪味に參した表れであらう。「正月野郎」と云つて「おめでたい野郎」「行德の俎板」と云つて「馬鹿(貝)」「吹子(ふいご)の向う面(づら)」と云つて「吹けば飛ぶ野郎（の意か）」などの隱語にするのは講談の趣味とも見られ、江戸ッ兒の洒落とも思はれる。寒月が橋底に愛人の聲をきいて「私も參ります」と云つてザンブとばかり飛び込んだが死にもせねば濡れもしないと云つて「よく見れば橋の向ふへ飛ぶところを橋の內側へ飛んでゐた」と云ふあたりは落語のおちを思はせる。

第二、心理描寫の克明なこと。

氏以前に理想主義や、觀念小說や、深刻小說など、心理的標榜の作品は隨分多いが、氏が此作品程精細に心理學を文學化したものはない。氏の藏書目錄を繰ると心理學の原書で、斯學專攻の人すら、持つてゐるかどうかと思はれるやうなものもある。卽ち

Allen (G) The Colour-sene : Its origin and development.
Bergson (H) Laughter: an Essay on the Meaning of the Comic.
Crozier (J. B.) History of Intellectual Development.
James (W.) The principle of psychology.
Knight (W.) The philosophy of the Beautiful.
Morgan (C.L.) An Introduction to Comparative psychology.
Münsterberg (H.) Psychology and Crime.
Santeyano (G.) The Senceof Beauiy.
Scripture (E.W.) The new psychology.
Stout (C.F.) Analytic psychology.
Wundt (W.) Outline of psychology.
〃　Princeyples of psychological psychology.
〃　Grunbriss Der psychology.

などがある。猫の初陣や、鈴木の訪問に面白をかしく而かも精緻な心理分解があるのは斯うした學殖から出たものであらう。單なる一語の「まあ？」にすら三個の素因を計へる程の心理描寫は、どうしても氏以前には見られない所だ。（尤も、氏が此傾向は、後日禍して氏の筆癖となり「坑夫」で燒芋を食ふのに新聞の三日分を費したとて非難するものがある）

第三、構想の巧みなこと

此想の出所は根本に於ては氏の天才に在るが派生的な出所は英國式のユーモラスと東洋的な閑適の情と、洒落上手な江戸ッ兒氣質と、講談、落語、その他の氏の趣味と、氏自身と、その家庭と親近な知人の日常生活とであらう。そして氏の學殖が原因した構想は拔として、それ以外の材料ならば氏でなくとも吾々凡人の日常にでもころがつてゐるやうなことも少くない。それでゐて篇々句々好笑の好文字となつてゐるのは、組み合がうまいからだと思ふ。主人獨居の時には日誌を評し、日なたほつこの處では夫婦關係を寫し主人が散歩の時は細君と迷亭との對話を寫し、三毛子訪問によつて舊幕の遺物的思想を寫し、夫人來訪の後をつけて行つて金田邸をかいまみて人情の表裏を畫くと樣に極めて自然に開展されてあつて而かも場面にそつがない。子供のをかしみ、女學生のをかしみ、男學生の單純、碁打の口巧者此等は吾人の周圍にも隨分滑稽な材料が澤山あるが、偖てこれを渾然たる一作品に融合させるとなるとそれを出す場處と方法とがうまくなければならぬ。處が此書ではそれが可い鹽梅に當に出るべくして出たので木に竹をついだり、竹に針金を纏はしたりと云つた風のわざとらしい作爲のあとが見えない。

第四、明治の滑稽の表現であること

舊式の滑稽ならば、黃表紙、洒落本以來いくらもある。新時代の敎養あるものは學校生活や、新文明や、西歐文化の中から見つけた滑稽でなくては惹きつけられない。處が此書の人物は二絃琴の師匠と迷亭の叔父とをのければ後は皆明治ッ兒であつて、アンドレアデルサルトと云ひ、レオナルド・ダビンチを云々し、ゼームスを引いたり、サント・ブーヴやブルヌチエルを云々し、首縊りの理窟を力學的に論じたり、ドングリのスタビリティーを云々する人々である。此は新人就中、學生仲間が最も共鳴する處であつた。

第五、寫生の筆緻

氏が寫生の筆緻は俳句の素養から來てゐると云はれるが、余の觀る處では寫生の着想こそ俳句の素養が與へて力があらうがその筆致のあざやかさ、自在さは寧ろ英文學の語彙と漢學の素養によるものだと思ふ。俳句のやうな餘情法の多い陰影のある修辭では滑稽は引立つものでない。その例は上掲の解題にもある通り子供は子供らしく（氏の子供描寫は殊に一品とまで云はれた）女學生は女學生らしくその他それ〳〵の人物にそれ〳〵の樣を活寫してゐる。上掲以外殊にうまい處は迷亭が十四色に使へるケース入の鋏を持つて來たのを細君が見る處だと思ふ

……ばら〳〵に離すと、ナイフとなる。一番仕舞に――さあ奧さん、此一番仕舞ひが大變面白いんです。ここに蠅の眼玉位な大きさの球がありませう、ちよつと覗いて御覽なさい」

「いやですわ、又屹度馬鹿になさるんだから」

「さう信用がなくつちや困つたね。だが、欺されたと思つて、ちよいと覗いて御覽なさいな。え？　厭ですか一寸でいゝから」

と鋏を細君に渡す。細君は覺束なげに鋏を取上げて、例の蠅の眼玉の所へ自分の眼玉を附けて居る。

「どうです」

「何だか眞黑ですわ」

「眞黑ぢやいけませんね。も少し障子の方へ向いて、さう鋏を寢かさずに――さう〳〵夫なら見えるでせう」

「おやまあ寫眞ですねえ。どうしてこんな小さな寫眞を張り附けたんでせう」

「そこが面白い所でさあ」

と細君と迷亭はしきりに問答をして居る。最前から默つて居た主人は、此時急に寫眞が見たくなつたものと見

えて

「おい俺にも一寸覽せろ」

と云ふと、細君は鋏を顏へ押し附けた儘

「實に綺麗です事、裸體の美人ですね」

と云つて中々離さない。

「おい、一寸お見せと云ふのに」

「まあ、待つて入らつしやいよ。美しい髮ですね」

「おい、御見せと云つたら、大抵にして見せるがいゝ」

と主人は大いに急き込んで細君に食つて掛る。

「へえ、御待遠さま、たんと御覽遊ばせ」

第六　猫の生活に卽して書けること

「吾輩は猫である」の冒頭が最後まで響いてゐて、猫固有の生活を離れないでかいまみをしたり、斥候に行つたり、居睡りをしたり、雜煮餅を喰ひ損ねたり、鼠をねらつたりする。で、人事拔きとして猫の描寫だけをとつても好文字が得られる位である。かうした作風はともすると地金が出て、猫の後から作者の人間の手が出足が出するものだが、此作にはそれがない。

第七、滑稽美を多分に含んでゐること

此篇の中では鼻子の鼻に對する譏笑、刑事探偵に對する罵詈、鈴木に對する皮肉を除ければあとはちつとも當の主人公が聞いても見ても不快を感じないをかしみばかりだ。迷亭の機智百出、獨仙の諧謔や警句、苦沙彌の日常の小錯誤、小矛盾、小失策、三平の素朴、子供や女學生や男學生の思無邪、寒月や東風の浮世離れ、など皆アッサリしたものばかりで、之を讀むと剃りたての頰を春風に吹かれたやうな快さがある。泥坊を滑稽化したものには狂言の瓜盜人や浦嶋師頃からあるが、この篇の泥坊はもつと進化してゐてもつとをかしい。最後に主人が刑事と間違つてお辭儀をする處に至つては滑稽の極とも謂ふべきだ。

第八　上品なこと、

從來の滑稽物には、いくら上品と謂つても所謂下がゝり的の筋が多く、どうしても淫猥とか低級とかの非難を免れなかつたが、氏が此篇にはさうした嫌は毫末もない。隨て之を學生に勸めることも出來るし、之を家庭の讀み物として一家團欒の席で朗讀しても差支ない底のものである。

缺點　此書を一個の滑稽小說と見て、さて缺點と謂ふ程のものがあるかどうか。余は上述の如く之を多くの美點優越點を具備した傑作と推すもので、あまり大した缺點を見つけない。強いて望蜀の慾を云はゞ以下の數項に止まる。

第一、首尾同一の體にしたい

「吾輩ハ猫デアル、名ハマダ無イ」と始めは飄然たる調子で出て來た猫なら結末も飄然として擱筆した方がよくはないか何も大往生際まで書かずともものことであらう。氏が才筆で死そのものすらも悲痛にはなつてゐないがさりとて滑稽小說の結末として「死」を描くのも變である。これは寧ろ氏がトリストラム・シャンデーを評して

無始無終、尾か頭か心許なき事海鼠の如し

と云はれたがこの式で通された方がよろしからう。始めフラリと來たものが、歸りには敷居越に三ツ指ついて「デハ御暇いたしませう、左樣なら」と挨拶するやうな不調和は可けないと思ふ。

第二、作品中に實感的の名詞や筋をからませることは面白くない。

俳劇の所に高濱虛子が出、酒を呑む所に「大町桂月が飲めと云つた」などあり、終のところに藤代博士の猫文士氣炎錄の記事にあてつけて

先達てカーテル・ムルと云ふ見ず知らずの同族が突然大氣燄を揚げたので一寸吃驚した。よく〳〵聞いて見たら、實は百年前に死んだのだが、不圖した好奇心から、わざと幽靈になつて、吾輩を驚かす爲に、遠い冥途から出張したのださうだ。

などあるが、これを喜ぶ一部の讀者もあるかも知れないが創作態度としては避くべきことだ。丁度舊歌舞伎で愛宕山出陣のたゞ中に光秀が突然「ホホウ敬つて申す」なんか云つて名披露目の挨拶をするやうな趣があり、或は幕あひに着流しで「一座大車輪で相つとめますれば偏に御贔負を願ひ上げます」などと翌日の替り狂言を云ふのと同じ趣である。折角作品で得た假感が實感と混線する。かうした挨拶に拍手する程度の讀者ならば喜びもしようが、でない以上之を目障りに思ふだらう。

第三、人物の命名

迷亭や獨仙や東風は別號と見て差支はないが、珍野苦沙彌や、とん子や、すん子や、めん子や、寒月は明治ッ兒としては餘りに非現實的な固有名詞だ、それが富子や雪江や藤十郎のやうな明治らしい人名と相竝んでゐるのも變だ。矢張り然るべき明治式の名をつけてほしかつた。

第四、鼻子夫人の鼻を取材した一項は省いた方がよくはないか

八笑人や七偏人にでもありさうなことで、いくらノンキな連中でもアアまで嘲笑譏笑の巧をつくすと云ふことは少くとも明治にはないことだ。チトサツカリン式のやうな氣がする。

第五、にはもつと些細なことだが二三の改訂案を提出しよう

（ページや行は全集本によつたもの）

一一頁七行目　「忍び入りたる」は「忍び入つたる」とする。

一三頁―一四頁　不德事件の前置としては長過ぎる。

一四頁十二、三行目「いたちつてえ奴は手に合はねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」は後の「いたち」を「彼奴」にする。

二四頁十一行目「今年は征露の第二年目だから大方熊の畫だらう抔と氣の知れぬことをいつて澄まして居るのでもわかる」の「氣の知れぬ」は氣の知れぬ語だ。こゝは「色々考へた末に、こんな間抜けたことを云つて澄まして居る。「今年は征露の第二年目だから大方熊の畫だらう」つて……

六〇頁十三行目「何も僕を胃弱の標準にしなくても一の標準は「標本」がよくはないか。

七五頁九行目「是も丁度明ければ昨年の暮の事で」の「明ければ」をとる。

一二三頁九行目「どれ〳〵僕が好いのを選つてやらう」は「選つてあげませう」としたい。

一二六頁あたりには氏の持論とも謂ふべき間諜や探偵的人物の熱罵が欲しい。

一二七頁十行目迷亭牧山男と云ふ伯父のことを云つて、おれは此年になるが、まだ帽子を被る程寒さを感じた

事がないと威張つてるんです——

とある次へ「で、それが牧山男爵か？」位の主人の半疊を入れてほしい。

一二九頁五行目「大に滿足の體に見える、やがて」は「大に滿足の體で」

一三三頁三行目「只人を威壓しようと、二階造が無意味に突つ立つて居る」でもよろしいが「只人を威壓するやうな」と通常譬喩にした方がよくはないか。

一五一頁十三行目「金田君は細君に似合はす鼻の低い男である」はそれでも聞えてゐるが「細君とは正反對の鼻低で」とした方がよからう。

一五八頁十四行目「容喙するべき」の「る」をとる。

一六四頁十三行目「此度は觀音樣の鳩の事を思ひ出す」の「此度」は「このたび」とルビがついてゐるが「こんど」と口語調にすべき處だ。

一六八頁十二行目「其猫の態度が」は「此吾輩の態度が」としないと猫が猫自身を客觀的に扱ふことになる。

一七一頁終行「實業家も惡くもないが」は「惡くはないが」

二六七頁十二行目「こんな觀察を述べられた」は「述べる」

三八一頁二行目「時候後れの感」は「時勢後れの感」

三九三頁十三行目「元來から行儀のよくない髯で」の「から」は入らない。

其他隨處に見られる「一緒」を「一所」、「提出」を「呈出」、「委托」を「依托」とあるのも直されたい。（氏の崇拜者は別に漱石文法を成立たせれば可いなども云ふが、通論とは謂へない）

第六、挿畫の好いのがほしい

あまり野卑でない漫畫と俳畫と油繪とを折衷したやうな、つまり此作の基調に相應しい挿畫を少くとも每齣二頁位入れたらもつとその特色を引きたゝすだらう。

此書の反響　此作を書いた頃、氏は駒込千駄木町五十七番地に居住して居たが、そこの玄關脇の八疊の書齋で書いたものだと云ふ。その阪下の製本屋はそのお蔭で身上をつくつて、氏に俳句を書いて貰つて「福の神」として祭つたと云ふ。實に此書程廣く知識階級に愛讀せられものは少なからう。雜誌ホトトギスで一遍出して、大倉書店から出して、春陽堂から縮冊本で出して、漱石全集刊行會から出して、安澤貫一氏が "I am a cat" と題して英譯したものを出して、その何れも數版數十版を重ねてゐる。そして小說壇の方では高濱虛子氏の鷄頭のやうな此に近い作風が斯壇の一地歩を占めることになり、新聞雜誌には「吾輩ハ何デアル」と云ふ題目が流行し、學生の作文の口調が迷亭式になると云ふ程の騷ぎであつた。氏自身が生涯の方向を變へたのも此に萠し、「漱石の猫」とか。「猫の漱石」と云ふ風のあひことばがひろまるやうにもなつた。經濟のことなど云ふのはあまり立入つたやうだが氏の日誌や手紙を見るとその頃からだん〳〵暮らし向もよくなり、つまり物質的方面から見ても出世作と謂つてよろしからう。現に在る早稻田南町のあの立派な邸宅も半分は猫が建てたとまで云はれてゐる。尙七五頁一行目に、迷亭が「暮といへば去年の暮に僕は實に不思議な經驗をしたよ」と云つてゐるが、それかあらぬかその頃より朝日の天聲人語には大抵一日に一語位は「何々と云へば云々」の句が入れられるやうになつたのも或はこの模倣ではあるまいか。

今年の夏季暇中縣下の綴方授業の實地指導をしてまはつた時、その文題に「私は古机である」「私は螢であります」と云つた風のものが可なり多いのを見て、氏の猫がまだこんな處に息をしてゐると今更の如くその影響の大なるに驚いた。

余は本論を草するに唯一の「猫」をとつたが、他の滑稽小說でない氏の作品は「坊ちやん」でも「二百十日」でも「虞美人草」でも「坑夫」でも乃至其他の長篇にでも何れも好笑の文字に富んで嫌味のない光明小說である。隨てそれ等の中から滑稽の部分を拾つてあげればまだ〳〵謂ふべく論ずべき多くが殘つてゐる譯だが、そは他日小說論で詳說するつもりだから玆には省いておく。

脚本　明治の劇は廿七八年(起原はもつと古いが)の頃に始まつた世話物卽ち壯士芝居から起つて正劇、新劇、新派劇などの名稱の下に開展したがその脚本は至つてお粗末なもので、始めは實錄物や新聞の三面や茶番狂言めいたもので中頃は通俗的な小說を飜案したもので末期に至つて飜譯劇や、それに示唆を受けた新作劇が上場せられた。が、喜劇に至つてはもつとお粗末で、專門的な喜劇作家は一人もない。曾我廼家のやうに自分で作つて自分で上場するものは兎に角他は閑餘の戲筆で、舞臺上の效果などを考へたものもあまりないやうで隨つて實演せられたことも少い。吾々は矢張り舊歌舞伎の滑稽な場面――たとへば千本櫻で忠信の捕手が苦もなくとんぼがへりさせられる所や、一の谷の合戰に田吾平が俄ざむらひになつて坐作進退を無理に武士らしく裝はうとする場面の方が遙かに面白いものに觀て來たものだ。隨て今は管見の目に觸れたものにつき一部分紹介するに止めておく。

尾崎紅葉氏の「夏小袖」　(廿五年八月作紅葉全集春陽堂本第一卷二六一―三五三)「慾張の老爺が息子と娘の緣談を餘儀なく承諾せねばならぬ破目に陷る」と云ふのが大團圓で齣は次のやうに切れてゐる。

一、一寸の間　番頭和七と令孃おそめと身の振方の相談をする。おそめは「どうか阿父樣と兄樣の氣に入るやうに努めておくれ、すれば二人の戀も許されよう」など云ふ。

二、內證話

德之助と妹との內證話、兄は自分が近頃寫眞屋の近所の「お八重」と云ふのに戀してゐることを打明けると、妹は自分と和七とのことを話し、あのわからずやの老爺が到底快諾しさうにもないので

「お前も思ふ男があるといふなら、一所の驅落、二組の道行、こいつは新しくつてきつと好ぜ、第一お互ひに道中が心丈夫だ、それから一つ長屋の隣同士か何かで、大仲好で暮さうぢやないか」

と、怪しからぬ相談――

三、無理暇

老爺(主人)五郎右衞門は番頭佐助が氣に喰はぬと云ふので無理に暇をとらさうとする。佐助も負けてゐず散々主人に惡口を浴せる。

「おのれのやうな奴は、おれが庭へ金を埋けておくまで知つて風聽する奴だ。油斷のならねえ

「へえ、旦那は庭へお金を藏しておきなさるのでございますか、不用心な事でございますね

「主人の情を仇におもふ、おのれは餘程罰あたりだ

「罰はあたつてもいゝから鰻飯とビフテキを頰ふほど食て見たいなど

四、緣談　上

五郎右衞門は此節自分の妻を物色してゐたが、やつと見つかつたのはあのお八重で、「お八重をもらふ」と云ひ出した處が德之助は自分の妻にかと思つて悅んでゐたのが、しまひに父の妻ときいて失望する。

「もらはうかの德之助

「至極結構でございます

「ちつと年齡が不釣合だからの

「どういたしまして、丁度似合はしい水の出花同士で

「さういはれると我は羞しい

と五郎右衞門は顏を横にして頭を撫でる。德之助は合點のゆかぬ顏をして

「でもあなた、先方が十八で、此方が二十四、

「當事もない世辭をいふな、我は今年もう六十三になるのだ

「それはあなた、舅は六十が七十、百でも、百六でも、構つたことはございませんそめ「それぢや、あのお八重をもらはうとおつしやるのは

「誰だとおもふ

「あの、私では無いのでございますか

「我だよ、我の事だよ

「ひえゝ

そめ「あの父親が？

「おいよ

德「あゝお染

そめ「兄樣

德「情ない事になつたなあ

「何だ情ないとは？　不吉な事をいやがる

五、緣談　中

父は息や娘には氣に入らぬ緣談をふりつけて

「德之助には、心當りの寡婦があるから、其をもらつてやることに極めたが、お前には瀧造樣が似合はしいと思ふがどうだ」

と云ふ。おそめはあられもなくはねつける。とゞ「和七の考へ次第でどうにでも致します」と云ふ。和七は「さう突然ではお嬢樣の御思案なさる暇がないから、今暫らく御猶豫を」とお茶を濁してその場はすみ。

六、緣談　下

和七とおそめのひそ〳〵話し「どうしてこの場を切拔けよう」と密議をこらす。こゝの場面が此脚本としては、一番うまく出來てゐると思ふ。

「あなたまあ、父樣のいふ事を唯と聞いておゝきなさいよ、方寸にありますから

「ほんとに方寸にあるのかい

「ありますから大丈夫

「屹度かい、方寸に無いときかないよ
「在りますよ
「でも、お前今晩嫁けといふのだよ、いゝかい。どんな方寸だか安心するやうに聞かしておくれな
「今晩いざといふ眞際に、あなた卒倒しておしまひなさい
「卒倒するつて、あの目を眩すのかい、否だねえ
こゝはシエクスピヤーのロメヲ・エンド・ヂユリエツトの中のヂユリエツトがあらぬ結婚に苦しんだ揚句四十二時間だけ假死する魔睡藥を服んで免れよと勸められるのと一寸似てゐるが、作者はそれによらないで創造した趣向だらう。
「私は、まだ一度も眩した事がないから、もし眩はしそくなつて、父樣に見附つたら大變だね
「眩はした事が無いつて誰が平常稽古をしておくものがあるものですか、うんとか何とかいつて、引くりかへつて手足を突張て、齒を切しめて、何となく死だ眞似をなさいな」
「どんな風に？
「どんな風につて困りますね
「一寸して見せておくれなね
「一寸たつて絶息の振附は困りますね
「して見せておくれよ、形だけでいゝから
「困りましたねえ、ぢやまあ一寸形をしてお目にかけますから、一度ですつかり覺えて下さい。度々は私もあやまります」

「あゝ一度で覺えるから、よく見てゐるよ
「よう御座いますか、俄に擡と、かう仆れて、あ、痛——
と顏を顰める。
「そこで顏を顰めるのだね
「えゝ洒落なさんな、あゝ痛、ほんとに脊骨を打ました
「傷めはしないかい
「まあよう御座いますから、先を御覽なさい。かう仆れてから手足を硬く突張て、うゝんと、此呻聲が身上です、さも苦しさうに齒をくひしばつて眼を白黑かういふ鹽梅に
「あゝ否だ。氣味が惡い。和七もういゝよ
「もういゝよぢや御座いません、これが一番難しいのですから、もう一度それかういふ鹽梅に
「その眼色たけは堪忍しておくれな
「あなた、死ぬのに外見も色氣もあるものぢやございません
「そうして、お醫者樣が來たら直に虛死といふ事が分つてしまふだらうね
「それは此方にちやんと仕掛がしてあるのですから、大丈夫なものです、それぢや、もう直に胸が痛いといふよやうに、絶息の徵候に取懸からなくちやいけませんよ、

七、工面

德之助は家を出奔するつもりで差當つて入る金の工面に困つてゐると佐助がしるべに高利でなら貸すと云ふのがあつて

それを借りるやうに頼む。

八、高利

佐助は金兵衛の世話で德之助に借りてやることにしたが、その金兵衛も實は五郎右衛門に借りようと云ふのであつた。そこで「高利貸出會て見れば親父なり」と云つた風のことになる。

九、お饒舌

口入婆のお勘がお八重の母親の强慾と結托してお八重を無理矢理に五郎右衛門に嫁がさうとする。おかんの追從輕薄が笑はせるやうに出來てゐる。

十、結納

見そめの場でお八重は德之助と一座して驚いて泣いて「もう歸る」といふのをお勘色々となだめる。德之助が父のダイアモンド入の指環をお八重に嵌めてやるのを父が惜しさうにする處が滑稽。

十一、鞘當　上

五郎右衛門と德之助とがお八重の取合ひ

十二、鞘當　下

父子とゞ喧嘩を始める。店の權平が仲裁でやつとをさまる。

五「どうも權平いろ〳〵世話になつたのう、待ちな

と懷中へ手を入れる。權平は若干金に有り付事と手をむづ〳〵さして待てゐると古手拭の洟布を出して、ちんとかみ

五「之を一つ洗つてくれ

この場面は親子が妻を爭ふと云ふ沒常識そのものを山にしたのだから作意はあまり巧とは謂へない

十三、掘出し

佐助と德之助が共謀になつて庭の金を掘出す

「銅貨の音とは又格別ですね

「天子樣と平民ほど違ふからな

「底にまだ遺つてはしないか、お前はいつでも茶碗に二粒ぐらゐ飯粒を遺すのが疾だから

「麥飯と金貨とは大分氣の持方が違ひます

あとで五郎右衛門金をとられたのに氣がついて大恐慌、それさへ取返しがつくなら、何でもきくと云ふので、德之助が念の爲めに一札を入れさせる

證

此方大事の三千圓、裏庭の桐の根方四尺下に埋置候事實正也然る所、今晩盜難にあひ、一方ならず力を落し、既に命をも捨てむと存候所、貴殿明日中に右金子別條無く、此方の手戻可申約束致候に於ては萬一約束通の首尾に相成候はゞ、右禮として、八重事は其方の嫁につかはし、娘染事は和七に添はせ且又佐助の歸參許しつかはすべく

權「其處へ一寸權平の給金倍にとらすべくとお書き入れ下さるやうに願ひます

五「いゝとも〳〵、且又權平の給金倍に致しつかはすべく、爲後日一札如件

こゝの權右衛門はヂツケンスのクリスマスカロルの結末スクローヂが改心した處と相似た趣がある。唯、彼は道德的

光明小說でこれは飽くまで貪慾な性格の發展といふちがひがある。

そこでみんなが「目出たい〳〵」を連發するものだから、五郎右衞門までが、白髮頭を振り立てゝ「めでたい〳〵〳〵」で幕。

櫻庭星村氏の「つり的」（篁村叢書五一三――五五四）は前記夏小袖を模倣したと作者自身の斷りがあるが、似てゐるのは、親子が一人の女を爭ふことゝ、父萬右衞門が弟の百助や息子の千太郎に自分の緣談を話しかけるのを相手はいつも千太郎の嫁とばかり思ひこんで、そこで双方の話がをかしくチグハグに進展する趣とだけで、彼のお八重は實際しほらしい町娘だが、こちらの十重子は實は萬年お若と云ふ名うての美人局（つゝもたせ）である。對話は氏一流の輕快味があるが、結末は喜劇らしくもなく、お若がばれて引きとる處が落となつてゐる。

川上眉山氏の「滑稽相續三人男」（眉山全集第三卷二五七――三三一）はいつ頃の作かは知らぬが多分は篁村氏のと相前後して出されたものであらう。三人の放蕩な甥が七十萬圓もある伯父の遺產の相續を爭ふと云ふ筋だが、主想が單調で畢竟「人情の輕薄」を虛大に具體化したに過ぎない。始めの栗原三四郎が不身持で妻のお松が、荷物をさらつて行かうとする間際、伯父の手紙が來て相續の話が持上ると態度一變大にチヤホヤするところも、次の上野公園大佛前で爲子と娘の花子が竹岡に對して始め接近して中途竹岡が高利貸に催促されるのを見てツンとはねつけて又伯父の相續話をきいて、急に持ちかけて來るのも最後の涌井喜十郎奧で三四郎、多見治、勘之助の三人が始め相續を爭つておきながら「實は此伯父には澤山借金があつてな」ときかされて、みんな作病を云ひたてゝ逃げようとすると「今のは試みに云ふたのだ、本當は七十萬の財產はピクともせずにあるのだ」ときいて又三人が「伯父さん〳〵」と縋るやうにもてはやす所も同一趣向で「又か」「又か」の感に堪へない。氏の小說や文章に比べては著しく隔りがあるやうに思ふ。

太郎冠者氏「喜劇三種」（三十九年九月六日神田區表神保二　彩雲閣發行、四六版ハイカラ、七九頁鶯蒼亭八三頁　正氣の狂人七〇頁）著者實名は益田太郎と云つて銀行員で、その父君は「孝」その母堂は矢野家（二郎氏）から來られたので卷頭の故大隈伯の序によると氏の家は餘程文學的な殊に喜劇的な雰圍氣が濃厚であつたらしい。但卷頭水田榮氏の推稱の辭に「一九三馬の靈筆を驅つてモリエル、シエリダンを凌駕するの奇想を脚色し云々」は少くとも此三種の作品に對しては稍溢美ではあるまいか。氏は洋行から歸つて此筆を執られたと云ふが、此作品の內容はあまり西歐喜劇の分子はない。併し寥々たる我が喜劇脚本界に、專門家ならぬ氏が、かうした單行本まで出された文才は實に感歎に値するものがあらう。お負けに氏の作は舞臺上の効果の多いことは上述諸家の作よりも一頭地を抜いてゐる。

（此三種は何れも實演せられたものばかりで、余も在阪當時辨天座主尼野氏に請待されたことがあるが、惜しいことに他に先約があつてよう見なかつた。）

「ハイカラ」は洋行歸りの牟田口菊之助が、あまり氣取り過ぎて失敗を演ずると云ふ筋。「鶯蒼亭」は麻布狸穴の高利貸加根野星藏並にその周圍を描いた社會の暗黑面に對する諷刺劇、「正氣の狂人」は須藤傳十郎の神經質を中心に、妻「いそ」のクリスチヤンと父傳作、母「きち」の天理教との凝り性を配したもの、最後のを解說する。

序幕　須藤傳十郎病室の場

病人傳十郎は自身精神に異常あるものと思ひ込んで靜養してゐる。妻いそは夫の病氣を直さうとて看護婦や下

女とお祈りをしてゐる

「新約全書使徒ヤコブの書第五章第十三節爾曹の内誰か苦しむ者ある乎あらば祈禱せよ……」

主人は「うるさッ」と怒る。おかまひなくお祈りを續け、讃美歌を歌ひなどする。

傳「五月繩と云ふに……默つて聞いて居れば能い氣になつて夫たる者を傳十郎などと呼捨にしたり、ヤレ何とか僕だとか、神の惠を知らぬ罪人だとか俺がいつ罪を犯した事がある」

「神の目より見れば吾々は皆罪人であります。其罪より救はんが爲に神の子イエスキリストをして……」

「お前は人を狂人だと思つて馬鹿にして居るな、もう勘辨が出來ない、サア皆此部屋から出て行て呉れ、出て行かんか！」

と云つてもいそ子はまだ平氣で讃美歌を歌ひつゞける。傳十郎は、しまひに

「サアー僕は愈々狂人にされて了つた。モウ此上は正當防禦の爲に貴樣等の命を貰ふから然う思へ」

とまで言ひ放つ。そこへ傳作夫婦が來て之を和めて更に天理教を説く。

天理教信者のよくあゆる御神樂歌や、丹波市の中山みきの話をくど〳〵とする所は、前のいそ子のクリスト狂と對照的にをかしみを構成してゐる。

左の母との對話は單に秀句と誤解とに過ぎないが充分笑はせられるやうに出來てゐる。

傳十「イエ大丈夫です。正當防禦の爲ですから、止を得んのです」

母「……そりやマア正當防禦さんとか言ふ方には、甚麽御恩になつて居るかは知らないが、他人の看護婦の二人や三人は兎も角も、自分の女房を殺して迄も其方に義理を……」

傳作「エ、何を解らない事を言ひなさるんだ。正當防禦さんだなど、、然んな人が有るものか、な正當防禦と云ふのは御國の爲ぢふ事だよ」

母「アン然うですか、おくにと言ふ女の爲ですか、其れぢやおいその怒るのも無理は無いわネエおいそ）

果はキリスト教派は上手に、天理教派は下手に傳十郎を中にしてアーメンとたすけ給へとでせめたてる。そこへ出入の醫師日比谷が來る。傳十郎は又日比谷にくつてかゝつて「このひどい病人を唯だ神經だ〳〵とごまかして……たひと氣休めの爲とは云へ、最早恢復の見込のないものを欺るとは不德義極まる」と云ふので、日比谷も一寸「これは變だワイ」と思ふ

次の秀句はチト洒落過ぎのやうだが、實演上こんな言なりと入れねばだれる氣味もあるからだらう。

きち「先生御無病と申しますのは、矢張り伸びたり縮んだりする樣な新規な舶來病でございますか」

比「併し神經が餘程過敏になつて御居でですから……」

きち「（傳作に向ひ）御父さん神經を土瓶に入れて煮詰めるのですか

傳「神經が土瓶に入るものかな、過敏だな」

きち「ア、花瓶ですか」

傳「解らないな、神經過敏と云ふのは俗に云ふ病氣の事だよ」

傳十郎は醫者やその他一同に向つて自分は飽くまで精神病者だと云ひ張つて一同を室外へ追ひ出す。

二幕目　根津精神病院の場

氣ちがひの種々相で食物狂がいろ〳〵料理のことをしやべつてゐる傍には試驗狂が、試驗の失敗談や問題解法のことを